

# グローバル教育研究

## 第2号

### 目次

#### 原著

日本社会における韓国出身交換留学生の異文化理解に関する一考察 ..... 安 龍洙	1
中国人短期留学生の日本留学観に関する一考察 ..... 青木 香代子・安 龍洙	13
元留学生のライフストーリーに見る留学評価 —家族と日本で生活する元留学生の場合— ..... 八若 壽美子	29
元日本留学生のライフストーリーにみる留学評価 —交換留学から英語教育の道へ— ..... 池田 庸子	47
東南アジア出身留学生は日本のサブカルチャーを通して日本をどう捉えているか ..... 石鍋 浩・安 龍洙	59
中国出身留学生は日本のサブカルチャーを通して日本をどう捉えているか ..... 松田 勇一・安 龍洙	73
映像を用いた実践共有の課題と可能性 —日本語中級クラスにおけるインタビュー・プロジェクトの映像化から— ..... 瀬尾 匡輝・瀬尾 悠希子	87
日本人学生の韓国留学観の変化に関する一考察 ..... 高柳 有希・安 龍洙	91
アメリカにおける社会正義のための教育の可能性 —多文化教育の批判的検討を通して— ..... 青木 香代子	103
投稿規程	117

# 日本社会における韓国出身交換留学生 の異文化理解に関する一考察

安 龍洙\*

(2018年10月1日受理)

## An Analytical Study of Intercultural Understanding of Exchange Students from South Korea Living in Japan

Yong Su AN\*

(Received October 1, 2018)

### 要旨

本研究では、韓国人交換留学生3名を対象に留学終了直前にPAC分析法による日本社会における異文化観についての調査を実施し分析を行った。その結果、日本社会については「ルールが守られている社会」、「安心・安全できる社会」というイメージを有していること、日本人については「親切で優しい人」、「個人行動を好む人」として捉えていることがわかった。被調査者自身の振り返りによる来日前後の変化<sup>1)</sup>については、「日本人の個人主義」は来日後の体験によりネガティブなイメージがポジティブなイメージへ変化しているが、「日本の交通の安全性」「個人行動する日本人」「日本の気候」「物価の高さ」などは、来日前後でイメージの変化がないことがわかった。また、被調査者から得られた連想イメージのほとんどは実際の経験に基づくもので、「約束を守る日本人」「親切的な日本人」などに関してはプラス評価をしているのに対して、「目立つのを嫌う日本人」「日本人の仕事の遅さ」「本音と建前を使い分ける日本人」などに関しては、マイナス評価をしていることがわかった。

【キーワード】 韓国人交換留学生、日本社会、異文化理解、来日前後の変化、PAC分析法

### 1. はじめに

本研究は、日本社会における日本人と外国人の異文化相互理解について、外国人がどのように理解し評価しているのかを、個人別態度構造分析法 (Analysis of Personal Attitude Construct: PAC分析法) を用いて、認知的・情意的観点から探る一連の研究の一部である。

---

\*茨城大学全学教育機構 (〒310-8512 水戸市文京 2-1-1; Institute for Liberal Arts Education, Ibaraki University, 2-1-1 Bunkyo Mito-shi 310-8512 Japan)

本稿では、日本社会における外国人の異文化観について検討するために、韓国人交換留学生を対象に PAC 分析法による調査を実施しその特徴を探った。PAC 分析法を用いた外国人留学生の日本社会における異文化理解に関する先行研究としては、石鍋・安 (2018)、松田・安 (2018)、青木・安 (2018) などが挙げられる。石鍋・安 (2018) では、英語圏出身交換留学生 3 名を対象に多文化共生に対する理解の構造を質的分析した。その結果、被調査者は日本社会での共生を模索していることが示唆された。松田・安 (2018) では、中国人短期留学生を対象に彼らが日本において異文化をどのように理解しているのかについて探った結果、日本の社会については日本での経験からイメージを得ているが、日本留学前にはステレオタイプの日本像を持っていた者もいること、日本人との交流と理解については「日本人を理解する」という部分で重複するところが多く、理解度によっていくつかの段階があることが示唆された。青木・安 (2018) では、東南アジア出身留学生を対象に日本社会における異文化理解を探った結果、日常的に外国人と積極的に関わりを持つ日本人と外国人に対して消極的な日本人とのギャップに戸惑いを感じていること、日本留学中に置かれた環境や知り合った日本人によって日本社会や日本人に対する評価が大きく異なる可能性があることが示唆された。

そして、韓国人の日本社会への異文化理解については、これまで対日観及び日本留学観の研究を中心に行われてきた。その結果、韓国人の日本・日本人に対する主なイメージとして、1) 親切的日本人 (安 2008a, 2009, 2010, 2015a, 2015b, 2016, 安・宋 2013)、2) 他人に配慮する日本人 (安 2008a, 2009, 2010, 2016, 安・宋 2013)、3) 本音と建前を使い分ける日本人 (安 2008a, 2008b, 2016, 2010)、4) 消極的な日本人 (安 2008a, 2010, 2015a, 2016)、5) 伝統を重んじる日本人 (安 2008a, 2008b, 2010, 2014, 2015a)、6) 融通の利かない日本人 (安 2008a, 2009, 2010, 2015a, 2015b)、7) 時間に正確な日本人 (安 2009, 2010, 2015a)、8) 個人主義傾向の強い日本人 (安 2008a, 2008b, 2009, 2010, 2014, 2015a, 2015b, 安・宋 2013)、9) 仲良くなりにくい日本人 (安 2008a, 2008b, 2009, 2015a, 2015b)、10) ルール・規則を守り規範意識の高い日本人 (安 2010, 2009, 2008a, 2015b, 安・宋 2013) などが示されている。

本稿では、約半年から 1 年間交換留学生として日本に滞在していた韓国人留学生を対象に、PAC 分析法による日本社会における異文化観を調査し、1) 韓国人留学生が日本社会をどのように理解し日本人と分かり合おうとしているのか、2) 来日前後で異文化観がどのように変化したのか、について検討する。

## 2. 調査方法

調査は、1 部と 2 部に分けられる。1 部は質問紙による調査で、被調査者の属性を尋ねるフェイスシートと「日本社会に対する異文化観」に対するイメージ評価からなっている。1 部のイメージ評価の手順は以下の通りである。

- (1) あなたは「①私が生活する日本社会、②私と日本人がつきあうこと、③韓国人と日本人がわかりあうこと」などの表現からどんなイメージが思い浮かびますか？思い浮かんだイメージを「単語、または短い文」で下の【質問 I・記入例】のように【質問 I】に記入してください。上記①～③はイメージ項目に入れて、あなた自身のイメージを 7 個以上書き、全体のイメージ項目が 10 個以上になるようにしてください。
- (2) (1) で書いたそれぞれの「単語か短い文」が、プラス・マイナスのイメージに関係なく、「あなた自身の日本社会に対する異文化観」を考える時に、重要と考える順番に並べ替えてくだ

さい。

- (3) 次に、「重要イメージ」のイメージ項目同士を比較して、二つの組み合わせがどの程度近いのか、判断していただきます。最初に、①と②を比較します。①と②の関係が、直感的なイメージやその内容から見て、どの程度近いのか、次の尺度で判断して、「1、2、3、・・・」と書いてください。同じ要領で、①と③、①と④・・・というふうに、最後の組み合わせまで比較して、記号1、2、3などで書いてください。尺度は、非常に近い=1/かなり近い=2/いくぶん近い=3/どちらともいえない=4/いくぶん遠い=5/かなり遠い=6/非常に遠い=7とします。

上記(3)において作成された「重要イメージ対比表」を基に、ウォード法でクラスター分析をし、デンドログラムを作成した上で、2部のEメールによる調査を行った。まず、被調査者にクラスター分析を行ったデンドログラムを示し、各項目についての説明やクラスター分けについての解釈や、来日後の認識の変化について記述させた。そして、分類されたそれぞれのクラスターのイメージやクラスター全体のイメージについて尋ね、来日前後の変化があるかどうかについて質問した。最後に、連想項目のイメージについて、プラスイメージの場合は(+)、マイナスイメージの場合は(-)、どちらともいえない場合は(0)の記号を記入してもらい、各イメージを抱くようになったきっかけや媒体などを尋ねた。調査は、3名の被調査者が交換留学を終了した2018年2月に実施した。

### 3. 結果

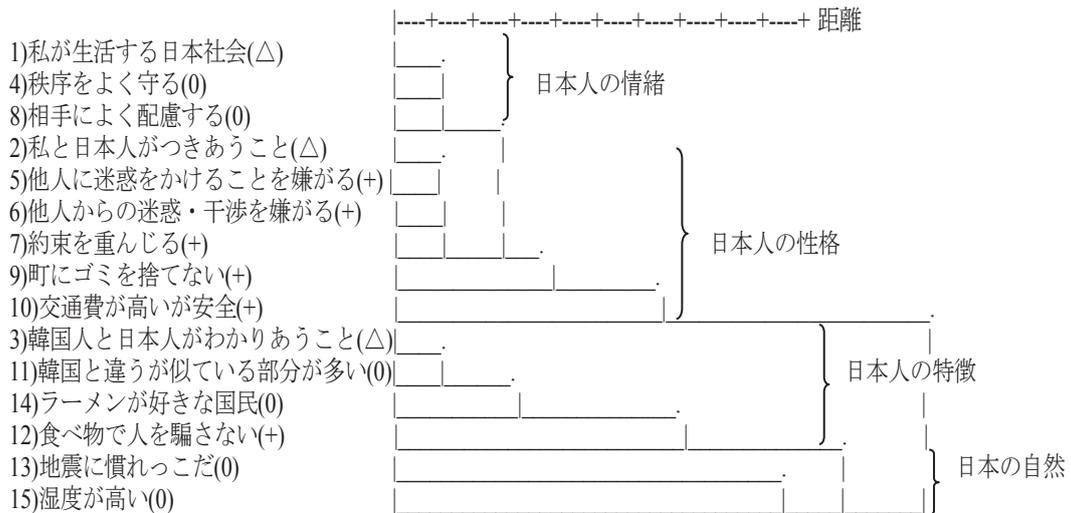
ここでは、まずクラスター分析の結果を示し、その結果に対する被調査者自身の解釈とそのイメージが形成されたきっかけについて述べる。

#### 3.1. 被調査者Aの結果

被調査者A(以下、「A」とする)は約1年間A大学に特別聴講生(交換留学生)として在籍していた。図1は「Aのデンドログラム」、表1は「Aの連想イメージを持つようになった切っ掛け」である。

クラスター1は『1) 私が生活する日本社会(△)<sup>2)</sup>』『4) 秩序をよく守る(0)』『8) 相手によく配慮する(0)』の3項目でクラスター名は「日本人の情緒」とした。クラスター1は「日本で電車に乗った時に一番印象に残ったのは、乗客が皆降りてから乗ることだった。また、バスが停車してから乗客が乗り、バスが停車するまでは降りる人も席を立たないことだ。このようなことを見てとても秩序正しい社会だと思った。また、日本人はいつでもどこにいても他人を気遣うことを身につけている。他人に迷惑になる時は『すみません』と言い、食堂でも度が過ぎるくらい客にサービスをする。日常生活で相手に配慮する気持ちを持っている。」と解釈した。来日前後の変化については「日本人は相手に配慮する気持ちが強くて、他人に迷惑をかけることも迷惑を蒙ることも嫌うと聞いたから、日本に来る前には日本人は過度な個人主義者ではないかと心配していた。しかし、日本で生活してみるとそのような感じは受けず、どこでも人によりけりという感じを受けている。また、東京では人が冷たくてドライな感じがして、暗いという印象を受けた。」と回答した。

クラスター2は『2) 私と日本人がつきあうこと(△)』『5) 他人に迷惑をかけることを嫌がる(+)]『6) 他人からの迷惑・干渉を嫌がる(+)]『7) 約束を重んじる(+)]『9) 町にゴミを捨てない(+)]『10) 交通費が高いが安全(+)]の6項目でクラスター名は「日本人の性格」とした。クラスター2は「日本人の言動を見ると、他人に迷惑をかけたがらない。日本の大学生はスケジュール帳を利用することが習慣化されている。大学になって色々大変だろうに、多くの日本の大学生は大学生になる前か



- 1) 左の数値は重要順位
- 2) 各項目の後ろ ( ) 内の符号は単独でのイメージ

図1 Aのデンドログラム

表1 Aの連想イメージを持つようになった切っ掛け

クラスター1	イメージを持つようになった切っ掛け
1) 私が生活する日本社会 (△)	×
4) 秩序をよく守る (0)	実際に見た日本人の秩序
8) 相手によく配慮する (0)	多くの日本人は配慮する心がある
クラスター2	
2) 私と日本人がつきあうこと (△)	×
5) 他人に迷惑をかけることを嫌がる (+)	実際の日本人との交流で
6) 他人からの迷惑・干渉を嫌がる (+)	実際の日本人との交流で
7) 約束を重んじる (+)	実際の日本人との交流で
9) 町にゴミを捨てない (+)	実際の体験
10) 交通費が高いが安全 (+)	実際の経験
クラスター3	
3) 韓国人と日本人がわかりあうこと (△)	×
11) 韓国と違うが似ている部分が多い (0)	実際の体験
14) ラーメンが好きな国民 (0)	日本での生活で感じた
12) 食べ物で人を騙さない (+)	メディア、実際に見て
クラスター4	
13) 地震に慣れっこだ (0)	周囲の日本人の反応を見て
15) 湿度が非常に高い (0)	日本での生活で感じた

らスケジュール帳を利用して管理して約束を大事にしてきたと感じている。日本は本当に不思議な国だ。もちろんゴミを捨てる人もたくさんいるだろうが、人が多く集まるところにゴミが一つもないこともある。こういうところは韓国が見習わなければならないことだ。日本にはゴミ箱も少ないのにきれいだ。自分さえ良ければいいという気持ちを捨てなければならないと思う。日本は交通費

が高いことで有名だ。日本に来ている留学生たちは皆、日本の交通費は高いという。もちろん韓国の交通費より高い。しかし、日本の交通は安全だ。例えば、日本のバスは多少遅いが安全を重視する。そして電車代も高いが、便利だと考える。」と解釈した。来日前後の変化については「変わらない」と回答した。

クラスター3は『3) 韓国人と日本人がわかりあうこと(△)』『11) 韓国と違うが似ている部分が多い(0)』『14) ラーメンが好きな国民(0)』『12) 食べ物で人を騙さない(+)]の4項目でクラスター名は「日本人の特徴」とした。クラスター3は「韓国と日本は違う国だが、本当に似ている部分が多い。全く同じことわざがあって、昔から中国の影響を受けた両国の特徴が現れている。そして韓国の医薬品や食べ物が日本にもある。韓国と日本、中国は古くから近かったから、完全に同じではないが、同じ国ではないのかと思うくらい似ている部分がある。日本人は本当にラーメンが好きだ。私は小麦粉の食べ物が好きではないので、そんなにラーメンを食べていないが日本はラーメン屋が多い。知り合いから聞いた話だが、高級乗用車に乗って1000円のラーメンを食べに行くほど日本人はラーメンが好きようだ。日本人は食べ物で人を騙したりはしない。韓国も中国も頻繁に食品に関する事件が起きるが、日本でそのような事件があったという話は聞いたことがない。そのためか、日本の冷凍食品などは安心して食べられる。」と解釈した。来日前後の変化については「来日前と変わったことは、やはり日本語は思ったより韓国語と似ているという考えだ。日中韓は同じ漢字を使っていたから、昔から言葉や文化が似ていると思う。日本語と韓国語があまりにも似ていて、時々、日本語と韓国語は発音だけ違うと錯覚する。」と回答した。

クラスター4は『13) 地震に慣れっこだ(0)』『15) 湿度が非常に高い(0)』の2項目でクラスター名は「日本の自然」とした。クラスター4は「韓国でも最近大きな地震が起きたが、日本に比べて地震が発生する頻度はかなり少ない。日本に来てかなり大きい揺れを感じる地震が何度か起きたが、その時、日本人は特別な反応はなかった。日本人の友達に地震が怖くないか、と聞いたら、少し揺れるくらいの地震には慣れているから怖くないと答えた。日本は海に囲まれているから湿度がとても高い。韓国も夏はあるが、汗を流してもすぐ乾くが、日本は湿度が高くて汗を流してもあまり乾かない。そして、日本は湿度が高いから畳部屋を使ってきたと思う。」と解釈した。来日前後の変化については「思ったより日本人は地震に慣れている。韓国で震度5.0以上の地震が起きた時に大きなニュースになったが、日本はかなり強い地震でない限り、ニュースにならない」と回答した。

各クラスター間の比較においては、クラスター1と2について「クラスター1の『相手によく配慮する』は、クラスター2の『他人に迷惑をかけることを嫌がる』と深い関係がある。他人に迷惑をかけることを嫌うから自然に相手に配慮する気持ちが生まれる。また、相手に配慮する心があると、他人に迷惑をかけない。そのため、この二つは密接な関係がある。」と解釈した。

全体のイメージについては、「日本のイメージとして最初に思い浮かぶのは『町がきれいだ』ということだ。日本を連想する時にゴミのないきれいな街、人が溢れているところでも秩序を保ち、気をつけながら行動するため、人とぶつかることはあまりない。このような慎重な態度と、相手に迷惑をかけない心があるからそのようなことが可能だと思う。また、日本の夏はとても暑くて湿度が高いが、それに見合う夏用の商品があるから生活ができる。日本の交通費は非常に高いが、それに見合った安全性と便利さがある。」と解釈した。

### 3.2. 被調査者 B の結果

被調査者 B (以下、「B」とする) は約 1 年間 A 大学に特別聴講生 (交換留学生) として在籍していた。図 2 は「B のデンドログラム」、表 2 は「B のイメージを持つようになった切っ掛け」である。

クラスター 1 は『1) 私が生活する日本の社会(△)』『3) 日本人と外国人が分かり合うこと(△)』『6) 仕事ぶりが遅い(0)』の 3 項目でクラスター名は「日本人の仕事」とした。クラスター 1 は「日本で感じたことはバスに乗った時やスーパーで買い物をする時に仕事が遅いということだ。少しイライラしたこともある。」と解釈した。来日前後の変化については「始めは日本人の仕事が遅くてイライラしたが、日本で生活してみて、日本人は仕事が遅いではなくて、非常に几帳面だということに気づかされた。几帳面だから仕事は遅くてもミスをしなないことがわかって、日本文化が理解できるようになった。」と回答した。

クラスター 2 は『2) 私と日本人がつきあうこと(△)』『8) 飲み会(0)』の 2 項目でクラスター名は「日本の飲み会」とした。クラスター 2 は「日本社会では人間関係を維持する上でお酒が重

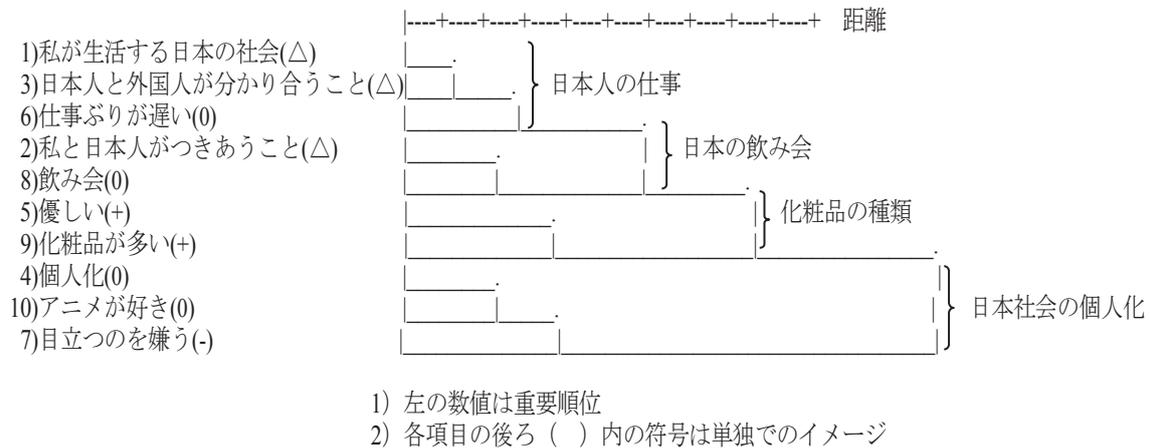


図 2 B のデンドログラム

表 2 B の連想イメージを持つようになった切っ掛け

クラスター 1	イメージを持つようになった切っ掛け
1) 私が生活する日本の社会 (△)	×
3) 日本人と外国人が分かり合うこと (△)	×
6) 仕事ぶりが遅い (0)	日本で生活して
クラスター 2	
2) 私と日本人がつきあうこと (△)	×
8) 飲み会 (0)	日本で生活して
クラスター 3	
5) 優しい (+)	実際に周りの人から助けてもらったから
9) 化粧品が多い (+)	使ってみて
クラスター 4	
4) 個人化 (0)	日本で生活して
10) アニメが好き (0)	日本で生活して
7) 目立つのを嫌う (-)	日本で生活して

要な役割を果たしていることがわかった。お酒を飲み過ぎる時もあるし、飲み会はいつもあった。」と解釈した。来日前後の変化については「韓国では日本の酒文化を引き合いに出して、韓国の酒文化は度が過ぎると批判する話や書き込みが多い。そのため、日本人はお酒をあまり飲まず、相手にお酒を勧める文化ではないと思ったが、日本に来てみると、酒が好きなのは韓国人も日本人も同じだった。」と回答した。

クラスター3は『5) 優しい(+)] 『9) 化粧品が多い(+)] の2項目でクラスター名は「化粧品の種類」とした。クラスター3は「韓国にも化粧品は多いが日本は使う人を考えて作っており、便利で奇抜なアイテムが多い。また、日本人は親切で絶対に無礼な行動をすることはない」と解釈した。来日前後の変化については「日本といえば思い出することの一つが『個人主義』なので日本人は無愛想だろうと思ったが直接交流してみると、思ったより親切だった。」と回答した。

クラスター4は『4) 個人化(0)] 『10) アニメが好き(0)] 『7) 目立つのを嫌う(-)] の3項目でクラスター名は「日本社会の個人化」とした。クラスター4は「すべての日本人がそうではないが、韓国人より落ち着きがあって一人で静かに過ごす人が多い。食堂でも街中でも一人でご飯を食べる日本人が多く、ゲームセンターに一人で行って楽しむ人も多かった。日本人は人前が出るのが嫌いで、大きな流れと一緒に流される姿が印象的だった。また、アニメや漫画のキャラクターが出てくるゲームを楽しむ、いわゆる『オタク』のイメージの日本人が多い。」と解釈した。来日前後の変化については「変わらない」と回答した。

各クラスター間の比較においては、クラスター1と2について「日本人は外国人に友好的だ。日本の酒文化は日本人と親密になるきっかけを作るのに大きい役割を果たす。」と解釈した。クラスター1と3について「上で述べたように日本人は外国人にも親切だから、外国人とすぐ親しくなれると思う。日本人の仕事が遅いのはスピードより丁寧さを重視するからだと思う。」と解釈した。クラスター2と4について「飲み会で、一人で静かに携帯電話のゲームをする人がいるのを時々見かける。こういう飲み会での行動と目立つのを嫌うことは関連があると思う。」と解釈した。クラスター3と4について「日本は個人化と他人に配慮する精神がある社会だから、他人の助けなしに一人でもできるように作られた化粧品がたくさん出ると思う。」と解釈した。

全体のイメージについては、「日本人はいつも仕事は遅いが親切で無愛想ではない。そして、日本では人間関係を維持する上でお酒が欠かせない。化粧品は、使う人が便利で奇抜な物をたくさん作っている。日本人は一人で何かすることに馴れているようだ。」と解釈した。

### 3.3. 被調査者Cの結果

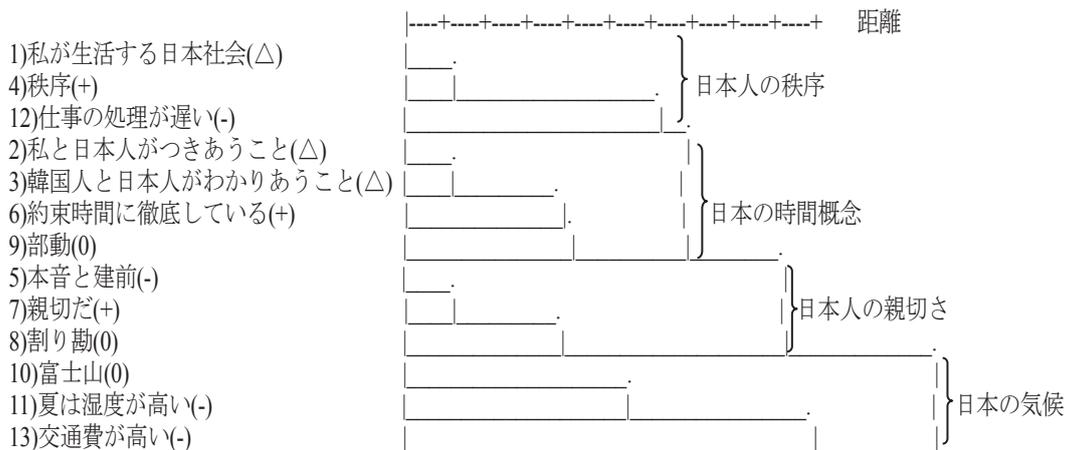
図3は被調査者C(以下、「C」とする)は約半年間A大学に特別聴講生(交換留学生)として在籍していた。図3は「Cのデンドログラム」、表3は「Cのイメージを持つようになった切っ掛け」である。

クラスター1は『1) 私が生活する日本社会(△)] 『4) 秩序(+)] 『12) 仕事の処理が遅い(-)] の3項目でクラスター名は「日本人の秩序」とした。クラスター1は「バスや地下鉄に乗る時や多くの人が移動する時に整然としている。そして、銀行や市役所、郵便局などは韓国に比べて仕事が遅い。」と解釈した。来日前後の変化については「日本に来る前に聞いていたから、変わらない。」と回答した。

クラスター2は『2) 私と日本人がつきあうこと(△)] 『3) 韓国人と日本人がわかりあうこと(△)] 『6) 約束時間に徹底している(+)] 『9) 部活(0)] の4項目でクラスター名は「日本の時間概念」とした。

クラスター2は「日本人と交流するためには部活動をたくさんしたほうがいいと思った。そして、部活動でも何でも時間をきちんと守るからお互いに理解が深まると思った。」と解釈した。来日前後の変化については「部活動をするのが交流に役立つと考えるが、時間的に余裕がなくて参加することは難しかった。」と回答した。

クラスター3は『5) 本音と建前(-)』『7) 親切だ(+)]『8) 割り勘(0)』の3項目でクラスター名は「日本人の親切さ」とした。クラスター3は「日本人と話をしたり一緒に行動をしたりすると、表向きは非常に親切に感じるが時々違和感を覚える。そして、日本人は先輩が後輩におごる時は分からないが、友達同士で一人が全部費用を払うのは変でおごってもらう人は申し訳ない」と考えると



- 1) 左の数値は重要順位
- 2) 各項目の後ろ ( ) 内の符号は単独でのイメージ

図3 Cのデンドログラム

表3 Cの連想イメージを持つようになった切っ掛け

クラスター1	イメージを持つようになった切っ掛け
1) 私が生活する日本社会 (△)	×
4) 秩序 (+)	実際の経験
12) 仕事の処理が遅い (-)	実際の経験
クラスター2	
2) 私と日本人がつきあうこと (△)	×
3) 韓国人と日本人がわかりあうこと (△)	×
6) 約束時間に徹底している (+)	実際の経験
9) 部活 (0)	実際の経験
クラスター3	
5) 本音と建前 (-)	実際の経験
7) 親切だ (+)	実際の経験
8) 割り勘 (0)	実際の経験
クラスター4	
10) 富士山 (0)	たくさん話を聞いたが行ったことはないから
11) 夏は湿度が高い (-)	実際の経験
13) 交通費が高い (-)	実際の経験

感じた。それも本音と建前から生まれた考えではないかと思う」と解釈した。来日前後の変化については「韓国で日本人の本音と建前は習ったが実際に体験してみて、それをはっきり感じた。」と回答した。

クラスター4は『10 富士山(0)』『11 夏は湿度が高い(-)』『13 交通費が高い(-)』の3項目でクラスター名は「日本の気候」とした。クラスター4は「日本というと思えば浮かぶのが富士山。また、夏は蒸し暑くて、交通費も高いと思った。」と解釈した。来日前後の変化については「ない」と回答した。

全体のイメージについては、「日本人は他人の目を気にしているためか、表向きは秩序正しく、親切で、時間に徹底していて、割り勘を好む。確実さを求めているため、仕事が遅いと思う。そして学生の交流も部活動のようなグループ活動を好む。日本は海に囲まれているため、夏は非常に蒸し暑く、快適に過ごせない。また、遠くまで移動するのにお金がたくさんかかる。」と解釈した。

#### 4. まとめと今後の課題

ここでは、第3章の被調査者の解釈に基づき、韓国人留学生の日本社会における異文化観について、(1)日本社会に対する捉え方、(2)日本人に対する捉え方、(3)来日前後の変化の特徴、(4)連想イメージの特徴、に分けて考察を行う。

##### (1)日本社会に対する捉え方

日本社会については、まず、Aの『4 秩序をよく守る(0)』、『9 町にゴミを捨てない(+)]、クラスター1の「…バスが停車してから乗客が乗り、バスが停車するまでは降りる人も席を立たないことだ。このようなことを見てとても秩序正しい社会だと思った…」、Cの『6 約束時間に徹底している(+)]、『4 秩序(+)]などからルールが守られている社会として日本社会を捉えている様子が窺える。これは先行研究のルール・規則を守り規範意識の高い日本人(安・宋 2013, 安 2010, 2009, 2008a, 2015b)の結果と一致する。

また、Aの『10 交通費が高いが安全(+)]、クラスター2の「…もちろん韓国の交通費より高い。しかし、日本の交通は安全だ。例えば、日本のバスは多少遅いが安全を重視する…」、Bのクラスター1と3の比較で「…日本人の仕事が遅いのはスピードより丁寧さを重視する…」などから、安心・安全できる日本社会として捉えている様子が窺える。

##### (2)日本人に対する捉え方

日本人については、Aの『8 相手によく配慮する(0)』、クラスター1の「…日本人はいつでも他人を気遣うことを身につけている…日常生活で相手に配慮する気持ちを持っている。」、Bの『5 優しい(+)]、クラスター1と3の比較の「…日本人は外国人にも親切だから、外国人とすぐ親しくなれると思う。」、Cの『7 親切だ(+)]などから3人全員が日本人は親切だと考えている。このような日本人の他人への親切や配慮について、AとBはかなりポジティブに捉えているのに対して、Cは「日本人と話をしたり一緒に行動をしたりすると、表向きは非常に親切に感じるが時々違和感を覚える。」と解釈しており、やや異なる評価をしていることがわかる。これは先行研究の親切な日本人(安 2008a, 2009, 2010, 2015a, 2015b, 2016, 安・宋 2013)、他人に配慮する日本人(安 2008a, 2009, 2010, 2016, 安・宋 2013)の結果と一致する。

また、Aのクラスター1の「…日本に来る前には日本人は過度な個人主義者ではないかと心配していた…」、Bの『4 個人化(0)』、クラスター3の「…日本といえば思い出すことの一つが『個人主義』…」などから、日本人は個人主義であると考えているようだ。このような日本人の個人主義

に関しては、先行研究（安 2008a, 2008b, 2009, 2010, 2014, 2015a, 2015b, 安・宋 2013）の結果と一致する。

### (3) 来日前後の変化の特徴

来日前後の変化については、日本人の個人主義に関する、Aの「人によりけりという感じを受けている」、Bの「日本といえば思い出すことの一つが『個人主義』なので日本人は無愛想だろうと思ったが直接交流してみると、思ったより親切だった」の解釈から、来日後日本人との交流により、ステレオタイプ化されたネガティブな日本人像であると考えられる、『日本人は個人主義』というネガティブなイメージが弱まりポジティブなイメージへと変化している様子が窺える。韓国人の来日前のネガティブな対日イメージが来日後にポジティブなイメージへ変化することに関しては、安（2018）でも同様の結果が得られている。しかし、安（2015b）の日本永住の韓国人は「…来日当初は、日本人はとても親切だと思ったが、今はそれが本当の気持ちなのか分からない時がある」と述べており、Cと同様の日本人像を有していることから、日本人像が個人の経験によって評価が異なる可能性が示唆される。

また、「仕事が遅い日本人」に関しては、Cは留学前後の変化がないと解釈しているのに対して、Bは「几帳面だから仕事は遅くてもミスをしない」とイメージが具体化していることから、被調査者間で異なる結果が示されている。韓国人の来日前の対日イメージが来日後に具体化していることに関しては、安（2018）においても同様の結果が示された。さらに、「日韓両言語の類似性」、「地震に慣れている日本人」、「日本人の飲酒文化」は来日後にそのイメージが強くなっていることがわかったが、この結果に関しても安（2018）の結果と一致する。しかし、「日本の交通の安全性」、「個人行動する日本人」、「日本の気候」、「物価の高さ」は来日前後でイメージの変化が起きなかった。

### (4) 連想イメージの特徴

イメージ項目についての評価においては、『5) 他人に迷惑をかけることを嫌がる(+)] 『6) 他人からの迷惑・干渉を嫌がる(+)] 『7) 約束を重んじる(+)] 『9) 町にゴミを捨てない(+)] 『10) 交通費が高いが安全(+)] 『12) 食べ物で人を騙さない(+)] (A)、『5) 優しい(+)] 『9) 化粧品が多い(+)] (B)、『4) 秩序(+)] 『6) 約束時間に徹底している(+)] 『7) 親切だ(+)] (C)などはプラスイメージとして評価している。それに対して、『7) 目立つのを嫌う(-)] (B)、『12) 仕事の処理が遅い(-)] 『5) 本音と建前(-)] 『11) 夏は湿度が高い(-)] 『13) 交通費が高い(-)] (C)についてはマイナス評価をしていることがわかった。このように、韓国人留学生は、日本人の規範意識の高さについてはポジティブな評価をしているのに対して、消極的な性格の日本人に対してはネガティブな評価をしていることがわかる。

最後に、A、B、Cのイメージを持つようになったきっかけについては、Cの『10) 富士山(0)] 以外は、実際の体験に基づいたものであることがわかった。

以上、本稿では韓国人交換留学生の日本社会に対する異文化観について分析したが、日本社会についてはルールが守られている社会、安心・安全できる社会というイメージを有しており、日本人については「親切で優しい人」、「個人行動を好む人」として捉えていることがわかった。また、振り返りによる来日前後の変化については、1) ネガティブなイメージが弱まりポジティブなイメージへと変化していること、2) 来日前の対日イメージが来日後に具体化していること、3) 来日後に特定のイメージが強くなっていることが示されたが、この結果は先行研究の安（2018）と一致することがわかった。今後、日本社会の異文化理解について、長期滞在の韓国人や在日韓国・朝鮮人の特徴についても調査し、比較検討する必要があると考える。これを今後の課題にしたい。

## 付記

本研究の一部は日本学術振興会学術研究助成基金助成金基盤研究（C）（課題番号 17K02838，研究代表者：安龍洙）の助成を受けて行われた。

## 注

- 1) 本研究における「変化」とは、ある対象に対する被調査者自身によるイメージや態度について振り返り、それを評価したものを指す。
- 2) 「①私が生活する日本社会、②私と日本人がつきあうこと、③韓国人と日本人がわかりあうこと」は研究者が予め設けた項目でプラス・マイナスのイメージ評価はさせなかったため、本稿では(△)と記す。

## 引用文献

- 青木香代子・安龍洙（2018）「日本社会における東南アジア出身交換留学生の異文化理解に関する一考察」『茨城大学全学教育機構論集グローバル教育研究』1, 3-28.
- 安龍洙（2008a）「韓国人留学生の対日観の変容に関する一考察—個人別態度構造分析法（PAC 分析法）を用いて—」『留学生交流・指導研究』10, 31-48.
- 安龍洙（2008b）「韓国人の対日観に関する一考察—個人別態度構造分析法（PAC）を用いて—」、『ユーラシア研究』5(3), 107-125.
- 安龍洙（2009）「外国人の対日観に関する事例研究—韓国人短期留学生の場合—」『茨城大学留学生センター紀要』7, pp.1-13.
- 安龍洙（2010）「外国人の対日観に関する研究—日本滞在歴の長い韓国人の場合—」『ユーラシア研究』7(4), 373-392.
- 安龍洙（2013）「外国人の対日観の変化に関する研究—中国人留学生の来日前後の対日観を比較して—」『茨城大学留学生センター紀要』11, 1-16.
- 安龍洙（2015a）「在日永住者の対日観に関する一考察—韓国人ニューカマーの場合—」『茨城大学留学生センター紀要』13, 61-73.
- 安龍洙（2015b）「日本留学経験者の韓国帰国後の対日観の変化に関する一考察」『茨城大学留学生センター紀要』13, 1-14.
- 安龍洙（2016）「日本で就職した元韓国人留学生の対日観の変化に関する一考察」『茨城大学留学生センター紀要』14, 93-105.
- 安龍洙（2018）「国費留学生の日本留学観の変化に関する一考察—日韓プログラム 14 期生を対象にした 4 年間の追跡調査から—」『留学生交流・指導研究』20, 97-114.
- 安龍洙・宋有宰（2013）「外国人の対日観の変化に関する研究—日本滞在歴の長い韓国人留学生の場合—」『茨城大学留学生センター紀要』11, 81-96.
- 石鍋浩・安龍洙（2018）「日本社会における英語圏交換留学生の異文化理解に関する一考察」『茨城大学全学教育機構論集グローバル教育研究』1, 57-68.
- 松田勇一・安龍洙（2018）「日本社会における中国人交換留学生の異文化理解に関する一考察」『茨城大学全学教育機構論集グローバル教育研究』1, 69-84.

## 中国人短期留学生の日本留学観に関する一考察

青木 香代子\*・安 龍洙\*\*

(2018年10月1日受理)

### An Analytical Study on Perceptions of Short-Term International Students from China about Studying Abroad in Japan

Kayoko AOKI\* and Yong Su AN\*\*

(Received October 1, 2018)

#### 要旨

本稿では、X大学に約半年間留学した中国人留学生の日本留学観について、PAC分析（個人別態度構造分析法）を用いて調査、検討を行った。その結果、日本留学については、1) 日本語能力の向上と達成感、2) 日本留学が将来の進路や進学につながる、という特徴が見られた。調査の結果、日本社会や日本人に対するイメージについては、これまでの研究と同様、1) 本音を言わない日本人、2) 親切で優しい日本人、3) 礼儀正しい日本人といったイメージを持ったことが分かった。また、留学先大学での1) チューター制度、2) 居住環境、3) 留学生同士の交流、4) 日本文化体験といった特徴が、留学観に影響していることが分かった。

【キーワード】 中国人交換留学生、日本留学観、留学観の変化、PAC分析

#### 1. はじめに

本研究は日本社会における「外国人」と「日本人」の異文化相互理解の実態とその特徴について、個人別態度構造分析法（Analysis of Personal Attitude Construct：PAC分析法）を用いて、認知的・情意的な観点から質的に検証し外国人と日本人の相互理解と相互交流の課題と問題点を検討する一連の研究の一部である。本稿では、滞日期間が5カ月以上6カ月未満の中国出身交換留学生4名を対象に、PAC分析法を用いて日本留学観について調査、検討した。

中国人留学生の対日観に関するPAC分析法を用いた研究として、滞日期間が比較的短い非正規

---

\*茨城大学全学教育機構（〒310-8512 水戸市文京 2-1-1; Institute for Liberal Arts Education, Ibaraki University, 2-1-1 Bunkyo Mito-shi 310-8512 Japan）

\*\*茨城大学大学院教育学研究科（〒310-8512 水戸市文京 2-1-1; Graduate School of Education, Ibaraki University, 2-1-1 Bunkyo Mito-shi 310-8512 Japan）

留学生の対日観の研究 (安 2010)、中国の内モンゴルおよび朝鮮族の少数民族出身者の対日観の研究 (安 2012)、滞日期間が比較的長い中国人留学生の対日観の変容の研究 (安 2013) 等が挙げられる。これらの研究では「決められた規則を守る日本人」、「礼儀正しく親切な日本人」、「生活水準が高い日本社会」、「自分の気持ちをはっきり言わない日本人」等の対日観が被調査者の出身や滞在期間にかかわらず共通点として表れた。また、中国人留学生の異文化理解について PAC 分析法を用いて調査した松田・安 (2018) の研究では、日本人や日本社会に対する理解は、日本人との付き合いが深いと思われる学生ほど、来日前に持っていたイメージが変容し、自国文化との違いを長所、短所という認識ではなく相対的に理解しようとする傾向がみられることが分かった。さらに、インドネシア人交換留学生を対象とした日本留学観に関する研究 (安 2016) では、「規範意識の高い日本人像」や「本音を出さない日本人像」といった日本人像がみられたほか、留學生活については「一人暮らしの楽しさ」や「課題や宿題が大変である」等の特徴がみられた。しかし、この研究では被調査者の連想イメージの特徴として日本人、日本社会に対するイメージが多く、日本留学そのものに対するイメージが少ないことが分かった。そのため、本調査では、研究者が予め「日本での留学」「日本留学で学んだこと」「日本留学と将来の進路」のイメージ項目 (刺激語) を設け、これらの項目を含めて PAC 分析を行った。

## 2. 研究方法

調査は第1部と第2部に分けられるが、第1部は被調査者本人の同意を得てフェイスシートに被調査者の属性を記入させてから、質問紙を用いて以下のように調査を実施した。まず、被調査者には前述の刺激語「①日本での留学、②日本留学で学んだこと、③日本留学と日本留学と将来の進路」を与え、これらを含めてイメージ項目が10項目以上になるように記入してもらい、次のような説明を行った。

「あなたは『日本留学』についてどのようなイメージを持っていますか。思い浮かんだ言葉やイメージを、思い浮かんだ順に番号をつけて記入してください。言葉でも短い文でも構いません。」

その後、その連想イメージを重要と思われる順序に並べさせた。更にそれぞれのイメージ項目の組み合わせが、直感的イメージでその意味内容においてどの程度近いのかを7段階尺度で評定させた。この尺度での回答をもとに、ワード法でクラスター分析し、その結果に対する対象者自身の解釈を求めた。最後に連想項目のイメージについて、プラスイメージの場合は (+)、マイナスイメージの場合は (-)、どちらともいえない場合は (0) の記号を記入させた。

第2部は口頭により、1) 各クラスター及びクラスター全体の解釈、2) 上記1) の解釈についての来日前後の変化、3) 各イメージ項目に対して、そのイメージを抱くようになったきっかけや媒体を尋ねた。

本稿で対象としたのは、2017年～2018年に日本のX大学に交換留学生として滞在した中国出身の学生4名(A～D)である。調査は被調査者A、Bは2018年1月から2月に、被調査者C、Dは2018年7月から8月に第2著者が実施した。いずれの学生も1学期間(約半年間)日本に滞在した。本稿では被調査者が特定されないように地名、大学名、施設名、個人名にはアルファベットを用いた。誤用については、被調査者の解釈において内容の理解に問題があると思われるものに

ついて修正あるいは補足を加え、分析を行った。聞き手の発話を丸括弧、補足部分については角括弧を用いた。

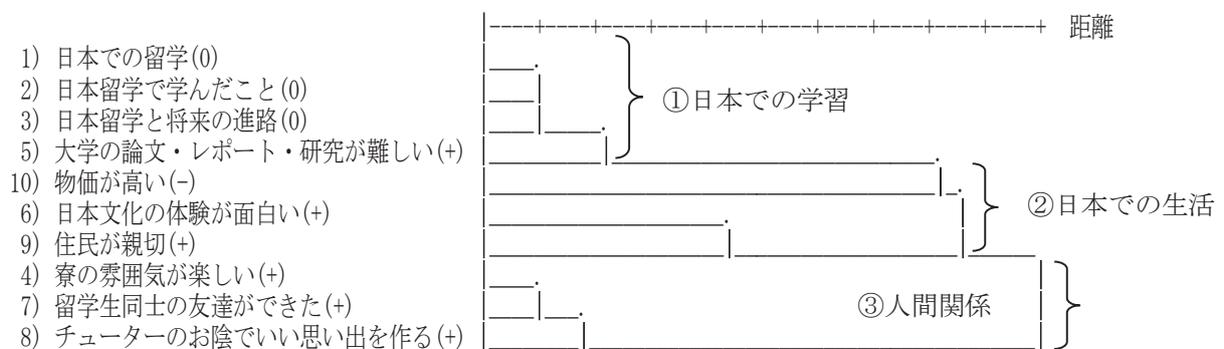
### 3. 結果

ここでは、まずクラスター分析の結果を示し、その結果に対する被調査者自身の解釈を述べてから、総合的な考察を行う。

#### 3.1. 被調査者 A

図1は被調査者A（以下、「A」とする）のデンドログラムである。このデンドログラムから3つのクラスターに分類して解釈した。

クラスター1は『1. 日本での留学 (0)』『2. 日本留学で学んだこと (0)』『3. 日本留学と将来の進路 (0)』『5. 大学の論文・レポート・研究が難しい (+)』の4項目でクラスター名は「日本での学習」とした。クラスター1は「主に日本に来て、日本の学習についてこのグループに分けます。例えば、論文、レポート、研究の書き方とか、それは全部日本に来て、そういうことを勉強しました。日本語で論文、レポート、研究を書くことは初めてなんです。来学期、中国のZ大学（Aの出身大学）では院生の推薦試験があります。そして、今回の目標はW大学（中国の大学）の日本語学科。多分、日本に来て、先生の意見を聞いて、私も自分で翻訳の教科書を買って、どんどん翻訳という日本語の勉強が好きになりました。日本に来る前に夏休みに私は字幕のグループに入りました。日本のアニメの字幕。大学4年の日本語の勉強は、私は足りないと思っています。（略）学部の授業は多分範囲が広いですから、日本文化、日本経済。（略）一番印象的なのは日本語での論文の書き方ですね。私は日本に来る前に論文を書くことができました。でも、数字は多分2,000字ぐらい、その程度の小レポートみたいなことで。今回〔の留学〕でもアンケート調査も含めて、先生から〔もらった〕論文の書き方の資料で、多分、最初はこの論文の書き方をまねて、レポートの書き方が分かるようになりました。（来日前後の変化は？）昔は中国で日本語を勉強したとき、先生も中国人でクラスメートも中国人で、日本人と日本語を話す機会が少ないですね。日本人の先生も学校に1人だけですよね。そして、情報の収集することも、昔は私はずっと何か書く前にインターネットで情報を探して、でも、インターネットの情報は本当のこととそうは半分半分で判断が難しいですね。そして、今回は私は図書館で資料を探して、論文集という大学の教授の論文集を



- 1) 左の数値は重要順位
- 2) 各項目の後ろ ( ) 内の符号は単独でのイメージ

図1 Aのデンドログラム

みて、本当に自分の論文を書くことに役に立ちました。」と解釈した。

クラスター2は『10. 物価が高い (-)』『6. 日本文化の体験が面白い (+)』『9. 住民が親切 (+)』の3項目でクラスター名は「日本での生活」とした。クラスター2は「多分、日本に住んで5か月ぐらいで日本の日常生活の全体的な雰囲気です。そして、この10番の物価が高いは多分、初めて日本に来たときのそれに関してのイメージです。(何を買った?) 例えば、トイレ用の洗剤とか、キッチンの鍋とか、調味料も。日本文化の体験は最近の〔納豆工場の〕見学とか、茶道とかの体験。日本人は自分の文化に関して自信を持っていますね。そして、見学は私は納豆工場、おととい、行きました。日本人は自分の特徴、代表的なものを本当に大切に、多分、この日本文化についてのものの存在をちゃんと守っていますね。何百年も。中国と比べて。中国は最近、経済の発展も早いし、中国文化の中に伝統的なことをちょっと失っています。中国の新年もお正月、昔は自分の家族と一緒にこの新年の行事とか〔祝ったけど〕、それは最近はどんどんみんな全部自分のスマホをみて、そういう感じがあります。日本文化は実は来る前に日本人は自分の文化を大切にするというイメージを持っていましたけど、(略) 例えば、茶道は本当に詳しいですよ。やることとか。(略) 9番は寮の近くに住宅街が〔あって〕、学校から寮に戻ったとき、いつも住宅街のおばあさんとおじいさんがいて、(略) みんないつも親切であいさつをしています。多分、ニュースを聞いて、東京の人は大都市ですから、近所の人との関係は冷たいという印象を持っていました。P (滞在都市)の地元のところはみんな本当に親切だと思います。(物価について) 特に以前は日本の物価が高いということを聞いたことありました。でも、日本の電気代とかガス代とかそういう料金の高さは以前は聞いたことなかったです。高いですね。」と解釈した。

クラスター3は『4. 寮の雰囲気が楽しい (+)』『7. 留学生同士の友達ができた (+)』『8. チューターのお陰でいい思い出を作る (+)』の3項目でクラスター名は「人間関係」とした。クラスター3は「実は日本に来る前の夏休みのとき、ずっとちょっと心配していました。日本に来てちゃんと友達ができますかって。来る前は学校で日本人の交流会みたいな活動がありました。そして、日本人との交流は結構楽しかったですけども、でも、相手の本当の気持ちが分からなかったんです。日本人は多分知らない人と話しているとき、日本人の反応は全部一緒です。そういうイメージがありますね。(略) でも、日本に来て、みんな寮に住みます。そして、一緒に食事をするとか、外に遊ぶこととか、みんな一緒に生活をします。そして、どんどんみんなの好き嫌いとか、どんな気持ちを持っているとか、そういうことをもっと詳しく理解したら、本当にいい友達ができたという気持ちがあります。ここに来て最初の目標は、多分、日本人と話す自分の日本語能力を伸ばすことですね。でも、ここに来て、私は初めて会った人はT〔留学生〕さん。(略) Tさんは今年の4月から〔日本に来ているので〕、ここで分からないこととか、本当にいろいろなことを教えて〔もらって〕、例えば、生活料金の払うことはどうするか、そして、(略) 炊飯器とか貸して〔もらって〕本当にいろいろ助けてもらった。そしてチューター<sup>1)</sup>のおかげですよ。(中国での) 交流活動のとき、日本人と話すときはみんなめっちゃ真面目なことを話して〔いました〕。でも、〔X大学の〕寮のチューターたちはみんな冗談を言って本当に面白いですね、みんな。来る前にチューターという存在を知りませんでした。クリスマスや節分のとき、チューターたちはイベントをして、例えば、クリスマスはチューターのHさんとLさんはみんなと一緒に横浜でクリスマスイブを過ごしました。」と解釈した。

各クラスター間の比較においては、クラスター1と2について「日本文化の体験もここに来て勉強したことです。生活と学習はこの日本に来てから最も重要なことです。来る前に生活とか学習と

かいろいろの目標を設置して「来ました」]、1と3について「1と3は人間関係、みんな留学生同士も私とチューターたちも同じ授業を選んで、多分、自分でこの授業を勉強するより効率的ですよ。日本語を考えるとという授業で、私とチューター2人と一緒に勉強して、何か理解できないこととか聞いて、本当に勉強になりました」、2と3について「2と3の関係はもっと密接だと思います。人間関係、私は最初の2カ月はあんまり交流室<sup>2)</sup>に行ったことなかったんです。どんどんTたちは直接私の部屋に来て、みんな誘って、どんどんみんなとの関係が良くなった。」と解釈した。

全体のイメージのイメージについては、「今回の留学は本当に人生の中でも大切な経験です。そして、まずはこれは私の初めての1人暮らしで、自分の自立ということも、私はもう21歳ですから、初めての自立ということを考えます。私たちは交換留学生で、そして、交換留学生として最も重要なことは人との交流です。留学生もチューターたちも日本人の友達も。実は今の寮で中国人同士なのに一緒に座っても、[学部の正規留学生は]全然私たちと話さないです。何となく壁がありますね。例えば、何か話題を言いたいとき、でも、反応が全然来ないんです。その逆も。多分、他の人といい関係をつくるということが面倒くさいと思っていますね。私たち交換留学生は半年、1年ぐらいで帰るから多分必要がないと思っている人が少なくないですね。留学は全体的には良かったです。いい経験になりました。」と解釈した。

表1は、Aの日本留学のイメージとそれを持つようになったきっかけをまとめたものである。Aの留学観は、プラスのものが多く、刺激語の3つ以外では1項目（「物価が高い」）、残りはすべてプラスイメージとなっており、留学生活に対する満足度も高かったことが窺える。

### 3.2. 被調査者 B

図2は被調査者B（以下、「B」とする）のデンドログラムである。このデンドログラムから3つのクラスターに分類して解釈した。

クラスター1は『1. 日本での留学 (0)』『2. 日本留学で学んだこと (0)』『3. 日本留学と将来の進路 (0)』『10. 日本は多文化社会 (+)』の4項目でクラスター名は「留学を通して学んだこと」とした。クラスター1は「これは留学を通して学んだこととか、(略)このようなイメージを持っています。留学と聞くと、X大学の先生と学生たちがいろいろ教えてくれました。日本留学で学

表1 Aのイメージを持つようになったきっかけ

クラスター1：日本での学習	
1. 日本での留学 (0)	—
2. 日本留学で学んだこと (0)	—
3. 日本留学と将来の進路 (0)	—
5. 大学の論文・レポート・研究が難しい (+)	日本研究の授業で初めて日本語で論文を書いた
クラスター2：日本での生活	
10. 物価が高い (-)	買物や生活費が高い
6. 日本文化の体験が面白い (+)	体験授業で日本人の日本人に対するプライドが感じられる
9. 住民が親切 (+)	町でおじいさん・おばあさんが親切に挨拶する
クラスター3：人間関係	
4. 寮の雰囲気が楽しい (+)	寮で皆で話したり遊んだりする
7. 留学生同士の友達ができた (+)	最初同期の留学生に誘われた
8. チューターのお陰でいい思い出を作る (+)	チューターはずっと助けてくれた

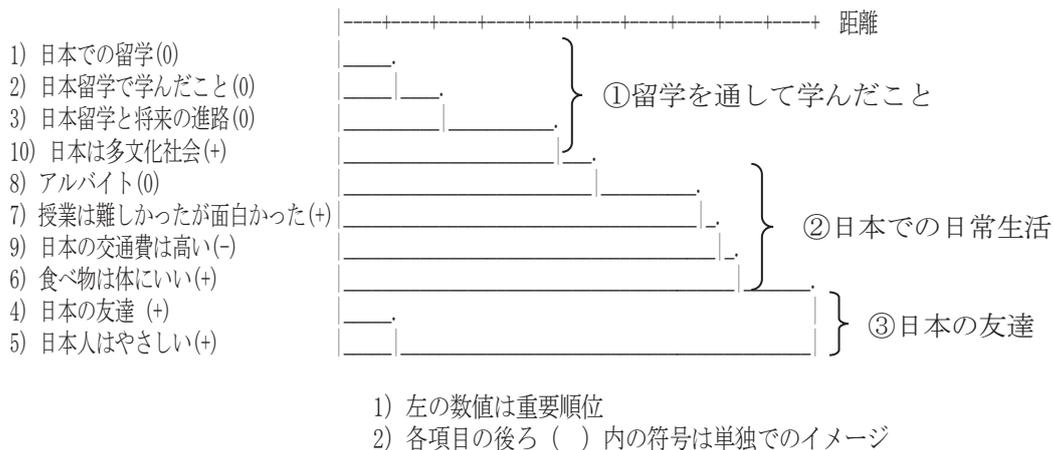


図2 Bのデンドログラム

んだことは中国と違って日本人というか、授業でいろいろな考え方とか〔を学んで〕、中国と全然違います。この点を学びました。例えば、国際関係の授業〔で〕、日本と中国の関係は日本側からの理解と〔中国側からの理解〕、この考え方が全然違います。(項目3について)日本に来る前に、将来は日本で就職とか日本で大学院に入って研究員とか、それとも、もし日本で留学の生活がそんなに楽しくないなら、中国に帰って公務員になるかとか〔考えていました〕。でも、今、留学生活もうすぐ終わって、日本の生活は楽しくていいなと思います。(略)例えば、北海道とか東京とかいろいろな日本の所も行きました。そこで、この旅行のときは観光客に対して日本人の態度とかいろいろな便利な設備を〔見ました〕。それで、大学の授業でも多文化社会に関する授業もすごく多いと思います。それは、日本が多文化共生を重視していると思っています。(来日前後の変化は?)さっき言ったとおりに、(略)日本に来る前には、クラスター1に関しては少しのイメージをしか持っていませんでしたけど、でも、日本に来てイメージが深くなりました。」と解釈した。

クラスター2は『8. アルバイト (0)』『7. 授業は難しかったが面白かった (+)』『9. 日本の交通費は高い (-)』『6. 食べ物は体にいい (+)』の4項目でクラスター名は「日本での日常生活」とした。クラスター2は「これは日本での日常の生活です。ちょっと寂しいですけど、いいと思います。特に食べ物が体にいい。(他には?)交通費がすごく高いと思います。大学が自転車を貸してくれました。私、アルバイトの店は中華料理の店なんですけど、中華料理の店では全部日本のお客さんで、アルバイトのときは日本人のお客さんが〔何を〕食べるとか、〔何を〕しゃべっていると、彼らの生活をみてました。お客さんが丁寧で、例えば、注文した〔とき〕とか『ありがとうございます』ってちゃんとあいさつする。(略)最初は、皆さん、先生とか学生とか話すスピードがすごく速くて理解が難しかった。(来日前後の変化は?)日本に来る前にはこの印象も持っていましたが、ちょっと本当かどうか分かんない、信じられなかった。でも、本当に実際、自分が身を置いて本当に体にいいと思います。果物とか野菜とか肉とか、本当に味が中国と違います。(出身)大学でも日本に関して授業とか先生もいろいろ教えてくれました。だから、大体の印象を持っていました。」と解釈した。

クラスター3は『4. 日本の友達 (+)』『5. 日本人はやさしい (+)』の2項目でクラスター名は「日本の友達」とした。クラスター3は「日本の友達、日本に来る前に日本の友達はいましたけど、でも、1回とか2回しか会ったことがない、そのような友達はそんなに深い友達ではなくて、普通の

友達だと思えます。でも、日本に来て留学して、いろんな日本の学生とかと友達になって、留学する前と印象が変わりました。日本に来る前は日本人は友達になるのは難しいと思っていました。でも日本に来て、人はいろいろ、どんな人もいます。友達になるのは思ったより簡単。来る前は日本人は全部に厳しくてルールは守って、そういうイメージを持って、すごく堅いイメージだと思っていました。でも、本当に〔日本に〕来て、ルールを守らない人もいますけれども、すごく面白い人、笑しやすい人も結構います。もう一つの面白い点は、例えば、旅行するとき、中国の友達、今日東京に行く〔となったら〕、何もプランとか全然なくて、楽しくてのんびりしてそのまま行きました。でも、日本の友達だったら、ちゃんと交通費とかどうやって行くか、バスの時間とか食べ物とか予約とか全部ちゃんと〔行く前に〕調べてちゃんと書いてくれました。』と解釈した。

各クラスター間の比較においては、クラスター1と3について「クラスター1を通して、クラスター3の友達とか、日本人が優しいというイメージができました」、クラスター2と3について「クラスター2は自分に関しての生活の内容で、クラスター3は自分だけではなくて周りの日本人とか友達をみればこういうイメージが持っています。』と解釈した。

全体のイメージのイメージについては、「大学の側もいろいろ準備というか、いろいろやってくれました。例えば、〔寮では〕チューターのような日本人の学生たち〔が住んでいます〕。そして、交流室もちゃんとあります。これは、〔日本の他の〕の大学と比べてX大学の制度、留学生に対しての制度が一番いいと思います。例えば、東京〔に留学している〕友達、この友達は1人ぼっち。(略) その友達はいつも授業とか遊びとか食べる時とかずっと1人。チューターもいなくて、活動とかイベントとか全然なかった。すごく厳しかった。彼は本当に2度と日本に行きたくない〔と言っている〕。』と解釈した。

表2は、Bの日本留学のイメージとそれを持つようになったきっかけをまとめたものである。Bの留学観も、Aと同様、プラスのものが多く、刺激語の3つのほかに「アルバイト」がマイナス・プラスのどちらでもない項目、「日本の交通費は高い」がマイナスのイメージとなっており、残りはすべてプラスイメージとなっていた。

表2 Bのイメージを持つようになったきっかけ

クラスター1：留学を通して学んだこと	
1. 日本での留学 (0)	—
2. 日本留学で学んだこと (0)	—
3. 日本留学と将来の進路 (0)	—
10. 日本は多文化社会 (+)	アルバイトであった人と多文化に関する授業で
クラスター2：日本での日常生活	
8. アルバイト (0)	自分がやってみて
7. 授業は難しかったが面白かった (+)	実際に授業を受けてみて
9. 日本の交通費は高い (-)	旅行の時に交通費で困ったから
6. 食べ物は体にいい (+)	買った野菜と果物が美味しいから
クラスター3：日本の友達	
4. 日本の友達 (+)	実際に日本人と友達になった
5. 日本人はやさしい (+)	旅行や生活で会った日本人は優しい

### 3.3. 被調査者 C

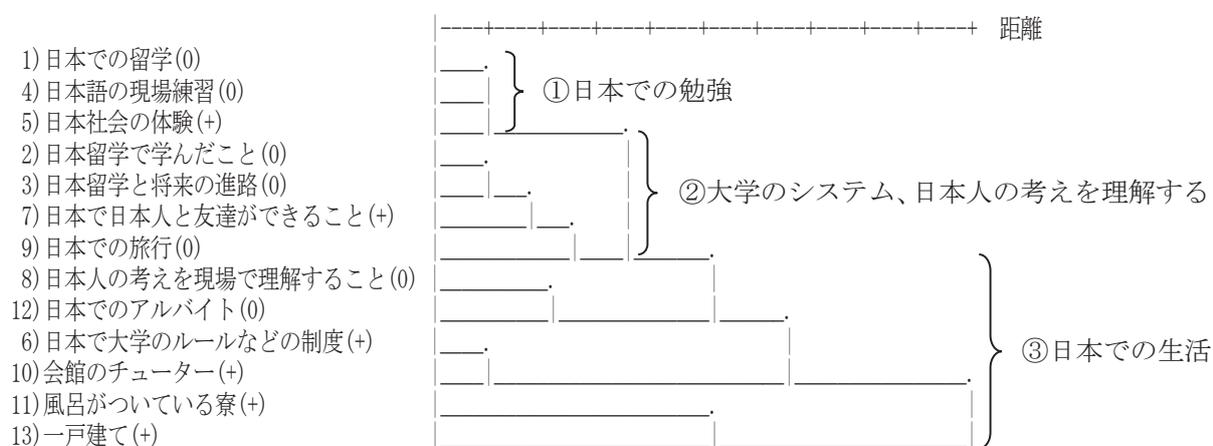
図3は被調査者C(以下、「C」とする)のデンドログラムである。このデンドログラムから3つのクラスターに分類して解釈した。

クラスター1は『1. 日本での留学(0)』『4. 日本語の現場練習(0)』『5. 日本社会の体験(+)]の3項目でクラスター名は「日本での勉強」とした。クラスター1は「日本での勉強することです。私は日本語能力を伸ばすために現場で勉強しなくてはいけないと思います。もし、ただ、中国で勉強すれば、何年間勉強しても多分コミュニケーションの能力は上達できないと思います。(来日前後の変化は?)中国にいた時も同じ考えを持っていました。よく先輩たちと交流したおかげで、私は大学2年生のときからよく準備して留学をしました。」と解釈した。

クラスター2は『2. 日本留学で学んだこと(0)』『3. 日本留学と将来の進路(0)』『7. 日本で日本人と友達ができること(+)]『9. 日本での旅行(0)]の4項目でクラスター名は「大学のシステム、日本人の考えを理解する」とした。クラスター2は「クラスター2はX大学のシステムや仕組みのことです。例えば、寮のチューター制度とか、そして、日本人の考えることを理解することとか、これは日本に来ないと多分分かりません。(来日前後の変化は?)これは来る前に分らなかったです。」と解釈した。

クラスター3は『8. 日本人の考えを現場で理解すること(0)』『12. 日本でのアルバイト(0)』『6. 日本で大学のルールなどの制度(+)]『10. 寮のチューター(+)]『11. 風呂がついている寮(+)]『13. 一戸建て(+)]の6項目でクラスター名は「日本での生活」とした。クラスター3は「クラスター3は日本での生活です。日本で寮に住んでいて、お風呂が付いています。そして1戸建てはホームステイのときに体験したことがあります。(どんな感想?)結構感動しました。(寮には満足?)はい。中国の寮は多分、今の寮と同じ広さで、6人が一緒に住んでいて結構狭いです。(X大学の寮は1人で住めるから便利?)はい。そして、中国では共同トイレとか1階の全員と一緒に使うので、朝の時間は人が混んでいて不便ですね。(来日前後の変化は?)来る前に先輩たちと交流して、日本の寮はそんなに素晴らしいなって思って、そして、これは日本に行きたい理由の一つでもあったと思います。」と解釈した。

各クラスター間の比較においては、クラスター1と2について「クラスター1とクラスター2



- 1) 左の数値は重要順位
- 2) 各項目の後ろ( )内の符号は単独でのイメージ

図3 Cのデンドログラム

表3 Cのイメージを持つようになったきっかけ

クラスター1：日本での勉強	
1. 日本での留学 (0)	—
4. 日本語の現場練習 (0)	寮のラウンジや部活で
5. 日本社会の体験 (+)	日本での生活
クラスター2：大学のシステム、日本人の考えを理解する	
2. 日本留学で学んだこと (0)	—
3. 日本留学と将来の進路 (0)	—
7. 日本で日本人と友達ができること (+)	X大は外国人に優しい (他の大学と比較して)
9. 日本での旅行 (0)	想像と同じ
クラスター3：日本での生活	
8. 日本人の考えを現場で理解すること (0)	いい点と良くない点がある
12. 日本でのアルバイト (0)	体験していないけど、アルバイト先の人が冷たいと聞いた
6. 日本で大学のルールなどの制度 (+)	留学生に優しい (無料の活動とか)
10. 寮のチューター (+)	いろんなことを手伝ってくれる
11. 風呂がついている寮 (+)	初めて体験した
13. 一戸建て (+)	ホームステイの時に体験した

は多分これは日本の現場で体験することです。主にクラスター1が一番重要で、クラスター2のシステムをよく活用して、日本語能力は上達します」、クラスター1と3について「クラスター1とクラスター3は、クラスター1は日本語の練習だけではなくて、日本社会の体験もあります。クラスター3はホームステイでよくホームステイのファミリーを交流していろんなことが勉強になりました。教科書と書いてたものが結構違うことがありました」、と解釈した。

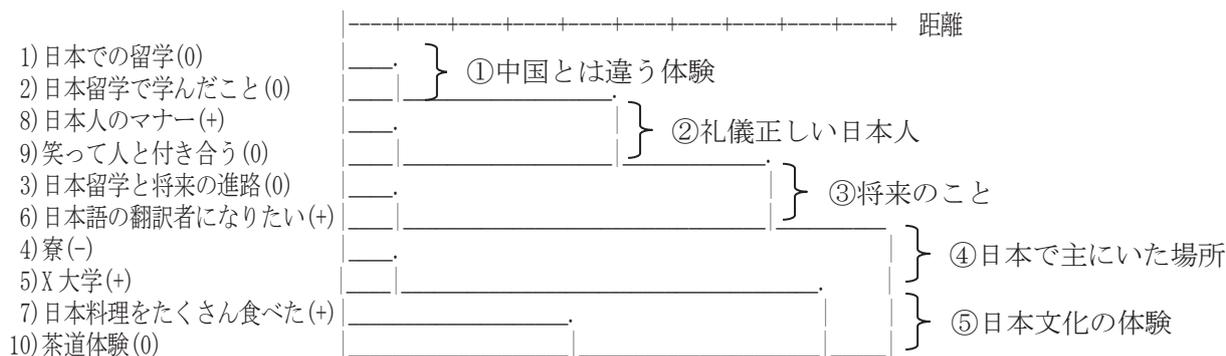
全体のイメージのイメージについては、「正直いって、日本人はいい点があるけど、悪い点もあります。例えば、チームワークをするとき、日本人、多分、半分以上が黙ってて、自分の意見は出さないで、そして、最後に本気でやる気が出てきます。それは、最初はどうなんだろう [と思った]。日本に来てこのような人間関係がよく分かりました。来る前に多分、そんなひどいわけではないね [と思っていた]。でも、本当にそんなにひどかったです。(留学してよかった?) 実際、G大学(出身大学)は結構小さい大学で社交的な活動があまりないですね。ですので、G大学にいるときは、多分、ただ、食堂、寮、教室、そしてジムで、毎日同じような生活をして。でも、X大に来て、多分、毎週1回、あるいは2回の活動があって、本当に大学のような感じです。そして、いろいろX大学は大学では〔国際交流の〕センターがあって、寮にラウンジがあって、みんなとコミュニケーションの機会があって、その点は良かったと思います。」と解釈した。

表3は、Cの日本留学のイメージとそれを持つようになったきっかけをまとめたものである。Cの留学観は、「どちらでもない」が刺激語以外では4項目、プラスのイメージが6項目となっており、留學生活や留學観は肯定的に捉えていることがわかった。

### 3.4. 被調査者D

図4は被調査者D(以下、「D」とする)のデンドログラムである。このデンドログラムから5つのクラスターに分類して解釈した。

クラスター1は『1. 日本での留学 (0)』『2. 日本留学で学んだこと (0)』の2項目でクラスター



- 1) 左の数値は重要順位
- 2) 各項目の後ろ ( ) 内の符号は単独でのイメージ

図4 Dのデンドログラム

名は「中国とは違う体験」とした。クラスター1は「中国とは全然違う体験です。例えば、中国では大学に中間試験がないです。期末試験しかないです。英語の授業なら中間試験がありますけど、他の授業は中間試験がないです。そして、中国の大学生は全員、学校の寮に住んでいます。日本は〔大学の〕外で自分で部屋を探します。そして、中国の大学生はほとんどがバイトしないです。でも、日本の大学生はバイトしないのはかえって少数派ですね。(他には?) 学んだことは日本語が上手になった。(来日前後の変化は?) ないです。特に、中国の学生にとって、〔大事なことの〕ランキングは第1位には必ず学習ですが、日本の学生は部活は大事ですね。日本の学生は何だか部活はすごく重視しています。日本の学生はこのランキングは第1は部活、第2はバイト、第3には学習、そうだと思います。」と解釈した。

クラスター2は『8. 日本人のマナー (+)』『9. 笑って人と付き合う (0)』の2項目でクラスター名は「礼儀正しい日本人」とした。クラスター2は「日本人、礼儀正しいです。例えば、コンビニに行くと店員が必ず敬語を使って、そして、お客さんが出るとき必ず頭を下げてお辞儀する。これは中国では多分ないと思います。(マナーがいい?) はい。そして、みんなは知らない人でもずっと優しい表情で。そういうことを(中国にいた時に)聞いたことがあるけど、本当に体験したことはないです。」と解釈した。

クラスター3は『3. 日本留学と将来の進路(0)』『6. 日本語の翻訳者になりたい(+)]の2項目でクラスター名は「将来のこと」とした。クラスター3は「将来のことに関わっています。私は日本語を勉強したから将来は日本語と関係がある仕事をしたいんです。そんなに強い関係がなくても日本語を使える仕事、日本語、自分のこの能力を生かすという仕事をしたいと思います。(仕事はたくさんある?) たくさんといえないけど、今は日本と中国の貿易とかいろいろの面で交流がありますから、こういうニーズがあります。(来日前後の変化は?) 今は中国の大学の日本語翻訳科、大学院に入る試験を準備していますから変化はない。」と解釈した。

クラスター4は『4. 寮 (-)』『5. X大学 (+)』の2項目でクラスター名は「日本で主にいた場所」とした。クラスター4は「クラスター4は日本に留学したとき、主に行っている場所です。寮は家のような感じです。X大学は勉強する場所です。多分、あとは、中国に戻っても日本のこの半年の留学を思うと、すぐこの二つの所を思い出すかもしれない。(来日前後の変化は?) 来る前は、以前はそんないろいろな国から来た人と交流とか一緒に暮らしてる経験がないですが、すごく面白いと思います。〔日本人以外の人とも〕異文化のコミュニケーションをして。」と解釈した。

クラスター5は『7. 日本料理をたくさん食べた (+)』『10. 茶道体験 (0)』の2項目でクラスター名は「日本文化の体験」とした。クラスター5は「日本文化の体験です。日本料理〔について〕は、中国では日本料理もあるけど、天井というものがありません。天ぷらがあるけど、天井がありません。そして、本物の日本料理は中国の日本料理と微妙な違いがあります。味が違います。茶道体験、これは全く新しい体験です。日本の茶道は今の中国とは違います。日本人の礼儀も表していますよね。日本人の人と接する考えとか気持ちとか。(来日前後の変化は?) 来る前はちょっと緊張していました。〔日本に来たら〕周りの人はみんな優しいから。そして、最初は自分の日本語は日本人に聞き取られるかとちょっと心配でした。そして、自分が日本人の日本語を聞き取れるかとちょっとドキドキしていました。でも、確か、最初は店員の日本語はすごく速いので、ちょっと聞き取れなかったけど、今は聞き取れるようになった。」と解釈した。

各クラスター間の比較においては、クラスター1と2について「日本への留学で、日本に来ると日本人のマナーを勉強するになります」、クラスター1と3について「日本語学部の学生で日本に行ったことがなかったらちょっと変ですよ。そして、日本語を勉強しているから、日本語学部の学生として自分の将来を考えているということです」、クラスター1と4について「1と思うと必ず4を思い出す。日本に留学するときはずっとこの2つの場所に行っている。主にこの2つの場所にいたからいろいろな思い出が残る」、クラスター1と5について「日本への留学で日本に来たら、日本の文化とか料理の文化、茶道や必ず体験したい」、クラスター2と3について「もし日本語の通訳になりたいなら、日本人と接する場合もあります。だから、そのときは日本人のマナーを身に付けていたら有用だと思います」、クラスター2と4について「寮やX大学でいろいろな日本人と接した。だんだん日本人のマナーや彼らの日常生活を見て、彼らはずっと笑顔で人と付き合い合うということを知るようになる」と解釈した。

全体のイメージのイメージについては、「多分、民族の性格が違うというところです。日本人はいつも本音と建前がありますよね。本音を言うことは少ないと思います。時々、本当に腹が立っても、そのときでも笑顔で人と話すとか。でも、そう考えると、ちょっと怖いと思います。だって、この人の本当の気持ちが分からなかったら、自分がどんな行動を取ったらいいか分からないと思います。中国の人は割とそんなに自分を隠す傾向がないと思います。(他には?) 日本の自然環境がすごくいいと思います。特に日本のごみの処理。日本は道でゴミ箱が少ないですよ。でも、ゴミがあんまり落ちてない。1人暮らしで寂しいと思います。中国の寮は1人ではなくて、4人とか6人とか…。8人の寮もあります。でも、もし仲が良かったら本当に楽しいです。中国にいたとき、時々ルームメイトが面倒くさいと思ったけど、本当に1人になると、かえって、こういう人たちに会いたい。〔X大学の〕寮の日本人たちはすごく、彼らはいろいろな外国人と接した経験があるから、そんなにステレオタイプがないと思います。でも、他の日本人も、道を聞くときとか、何か聞くときとか、すごく親切に案内してくれます。」と解釈した。

表4は、Dの日本留学のイメージとそれを持つようになったきっかけをまとめたものである。Dの留学観は、クラスター4の「寮」がマイナスイメージの他は、刺激語以外では「どちらでもない」が2項目、プラスイメージが4項目であった。「寮」がマイナスイメージになっているきっかけとして、「寮の人の付き合い」となっているが、インタビューでは「一人暮らしで寂しい」と述べられていたほかは、寮の人との付き合いにおいて特に悪い経験は語られなかった。

表4 Dのイメージを持つようになったきっかけ

クラスター1：中国とは違う体験	
1. 日本での留学 (0)	—
2. 日本留学で学んだこと (0)	—
クラスター2：礼儀正しい日本人	
8. 日本人のマナー (+)	人のつきあい、コンビニ
9. 笑って人と付き合う (0)	人との付き合い、日本人と一緒に受けた授業
クラスター3：将来のこと	
3. 日本留学と将来の進路 (0)	—
6. 日本語の翻訳者になりたい (+)	日本語翻訳の大学院の準備をしている
クラスター4：日本で主にいた場所	
4. 寮 (-)	寮の人との付き合い
5. X大学 (+)	大学の授業・環境
クラスター5：日本文化の体験	
7. 日本料理をたくさん食べた (+)	天丼、ラーメン
10. 茶道体験 (0)	茶道のマナー、正座は痛い

#### 4. 考察

第3章では中国人留学生4名の日本留学観についてみてきた。ここでは、4名の学生のPAC分析とインタビューから、(1) 日本留学の特徴、(2) 日本社会や日本人に対するイメージの特徴、(3) 留学先大学にける留学観の特徴の3点について考察を行う。

##### 4.1. 日本留学の特徴

###### (1) 日本語能力の向上と達成感

日本への留学は、「ここにきて最初の目標は、(中略) 日本人と話すことと自分の日本語能力を伸ばすこと」、「一番印象的なのは日本語での論文の書き方」(A)、日本に来たのは「日本語能力を伸ばすため」(C)、日本に来て「日本語が上手になった」(D)など、日本留学の大きな目的の一つが日本語能力の向上であることが分かった。また、日本人の考え方や、国際関係における日本側からの理解(B)といった、それまでとは異なる視点を学んだということが述べられていた。そして、最初は店の店員や学生が話すスピードが速くて聞き取れないこともあったが、聞けるようになったり、レポートを書けるようになったりすると述べていることから、日本語能力向上に対する達成感を感じているようだ。このように、中国人短期留学生は交換留学を通して日本語能力向上という明確な目標を持っており、その達成感を感じている様子が窺える。

###### (2) 留学と将来の進路

日本留学と将来の進路については、大学院でも日本語を専攻したいと考えているAはX大学の図書館で論文集を読んで、論文を書くための参考にしたことや、授業でも論文の書き方を習ったことが述べられていた。また、Dは大学院に進学して日本語翻訳を専攻し、日本語と関係がある仕事がしたいと述べていることから日本留学を通して学んだことが将来の進路とつながると考えているようである。Bは日本での就職や、日本の大学院で研究員になることを考えていたことから、留学と将来の進路が結びついていることが分かった。このように、中国人短期留学生は日本における交換留学が彼らの将来の進路や進学のための一つのステップになっているようである。

## 4.2. 日本社会や日本人に対するイメージの特徴

### (1) 本音を言わない日本人

日本人に対する評価について、Cのグループワークで日本人学生が「半分以上が黙ってて、自分の意見は出さない」という解釈や、Dの解釈にみられた「日本人はいつも本音と建前がありますよね。本音を言うことは少ないと思います。(中略) ちょっと怖いと思います」は、最初のイメージ項目には上がらなかったが、インタビューからは、本音を言わない日本人に対してマイナスのイメージを有していることが分かった。これらはこれまでの研究(安 2010; 2012; 2013、松田・安 2018)でもみられたことである。一方でBは、留学前は「日本人と友達になるのは難しいと思って」いたが、日本に来ると「どんな人もいます。友達になるのは思ったより簡単」と述べていることから、日本人との交流に対するイメージが変わっている様子が窺える。またBは、中国人の友人と日本人の友人を比較し、旅行の例を出して中国人の友人とは計画を立てずにのんびり旅行に行ったが、日本人の友人はバスの時間や食事の予約などを前もって調べて準備してくれたエピソードを紹介している。これは、松田・安(2018)のケースでもみられたように、日本留学を通して、日本人との付き合いが深まり、距離が近くなることによって、プラス・マイナスのイメージ評価にとどまらず、双方の違いを客観的に捉え、異文化の相違を相対的に理解しようとする姿勢へと変化したケースであると考えられる。このように、中国人留学生は、本音を言わない日本人に対してステレオタイプ化された表面的な理解から脱し、独自の異文化観を構築しようとする姿勢が窺え、交換留学が前述の日本語能力向上のみならず異文化理解を深めるきっかけとなっているようである。

### (2) 親切で優しい日本人

日本人に対するイメージとして、親切で優しいというイメージはこれまでの先行研究同様、今回の調査でも共通してみられた。Aは、寮の近くの住宅街の住民が「いつも親切であいさつをして」と述べており、Bは「日本人はやさしい」というイメージ項目があった。

### (3) 礼儀正しい日本人

Bは、アルバイト先で日本人の客が丁寧にあいさつをしていたと語っていたが、Dもまた、「日本人のマナー」のイメージ項目において、「日本人、礼儀正しいです。例えば、コンビニに行って店員が必ず敬語を使って、(中略)必ず頭を下げてお辞儀する」と述べていることから、礼儀正しい日本人のイメージが日本に来て強化されたことが分かった。上記二つの項目は、これまでの研究(安 2012, 2013)でもみられた。

## 4.3. 留学先大学における留学観の特徴

### (1) チューター制度

X大学の留学生に対する支援の特色として、チューター制度がある。X大学では、チューターは日本人である場合が多いが、交換留学生として約半年間という短い期間滞在する彼らにとって、日本人チューターの存在が影響していることが、Aのイメージ項目「チューターのおかげでいい思い出を作る」やCの「寮のチューター」が「いろいろなことを手伝ってくれる」という記述からも読み取れる。また、Bも他の大学と比較し、チューター制度や交流室の設置など、X大学の「留学生に対しての制度が一番いいと思います」とし、X大学のチューター制度を高く評価していたこと

が分かった。このように、チューターが存在が交換留学生の日本留学に大きな影響を与えており、国際交流室のように日本人学生と留学生が交流できる環境も彼らの日本留学において大きな意味を持つものと考えられる。

## (2) 居住環境

寮に対する評価は、中国の大学と比較してCの「風呂がついている寮」、Aの「寮の雰囲気が楽しい」や「初めての一人暮らしで、(中略)初めての自立ということを考えます」といったプラスイメージの評価と、Dの「一人暮らしで寂しい」のマイナスイメージに分かれた。Dは、「時々ルームメイトが面倒くさいと思ったけど、本当に一人になると、かえって、こういう人たちに会いたい」と思うようになったと述べていた。先行研究のインドネシア人交換留学生(安2016)の日本留学観では一人暮らしに対するマイナスイメージはみられなかったが、今回の中国人の調査ではその評価が分かれており、単身寮に対する評価に個人差がみられることが分かった。

## (3) 留学生同士の交流

Aのイメージ項目とインタビューでは、中国以外の国からの留学生との交流に対してプラスイメージを持っている一方で、X大学に正規留学生として在籍している中国人留学生に対しては、「中国人同士なのに一緒に座っても、(中略)全然私たちと話さないです。何となく壁がありますね」と述べていたことから、同じ中国人同士でも交換留学生と正規留学生の間に壁が存在する様子が窺える。

## (4) 日本での文化体験

A「日本文化の体験が面白い」(イメージ項目)、C「ホームステイで(中略)交流をしているいろんなことが勉強になりました」等から、X大学で行っている茶道体験やホームステイが中国人交換留学生の日本文化の理解に役立っているものと推測される。

## 5. まとめと今後の課題

本稿では、X大学に約半年間交換留学生として滞在した中国人留学生4名へのPAC分析から、日本留学観について分析した。その結果、先行研究同様、「本音を言わない日本人」「親切で優しい日本人」「礼儀正しい日本人」といった日本人像が示された。また、被調査者4名は、日本留学と、将来の進路を結び付けて考えており、日本留学を通して日本語能力を向上させたり、日本人の考えを学んだり、日本側に立った異文化理解を模索したりと、学業的な目的達成のみならず、それを将来につなげようとする積極的な姿勢がみられた。

もう一つの特徴として、X大学の留学生に対するサポートの特徴であるチューター制度や寮、日本文化体験学習に関するイメージ項目が挙げられる。特に、約6カ月という短期滞在をする学生にとって、チューターとの交流及び交流の場や、茶道体験、ホームステイなどの日本文化体験のイベントが日本社会や日本文化の理解に少なからず影響していると考えられる。その一方で、同じ中国出身の留学生でも、正規留学生との間に「壁」があると感じたという解釈がみられたことから、身分の違いが留学生活や留学生同士の人間関係に影響する可能性が示唆された。今後、留学生の身分や留学期間などの違いが彼らの人間関係の構築に及ぼす影響についても分析する必要があると考えられる。これを今後の課題にしたい。

## 付記

本論文は、日本学術振興会学術研究助成基金助成金基盤研究 C（課題番号：17K02838，研究代表者：安龍洙）の助成によるものである。

## 注

- 1) X 大学には、留学生を対象としたチューター制度がいくつかあり、そのうちのひとつでは、日本人学生が留学生向けの寮に住み、留学生の生活面や勉学面のサポートを行う。
- 2) X 大学内に設置している留学生と留学生をサポートするチューターが集まる交流室。

## 引用文献

- 安龍洙（2010）「外国人の対日観に関する研究－中国人非正規留学生の場合」『茨城大学留学生センター紀要』8, 1-17.
- 安龍洙（2012）「外国人の対日観する研究－中国の少数民族出身者の場合」『茨城大学留学生センター紀要』10, 1-14.
- 安龍洙（2013）「外国人の対日観する研究－中国人留学生の来日前後の対日観を比較して」『茨城大学留学生センター紀要』11, 1-15.
- 安龍洙（2016）「インドネシア人交換留学生の日本留学に関する一考察」『茨城大学留学生センター紀要』14, 1-18.
- 松田勇一・安龍洙（2018）「日本社会における中国人交換留学生の異文化理解に関する一考察」『茨城大学全学教育機構論集グローバル教育研究』1, 69-83.

# 元留学生のライフストーリーに見る留学評価 —家族と日本で生活する元留学生の場合—

八若 壽美子\*

(2018年10月1日受理)

## Life Story Interview of Former International Students Who Live in Japan with Their Families: How They Evaluate Their Study Abroad Experience

Sumiko HACHIWAKA\*

(Received October 1, 2018)

### 要旨

本研究では、日本の地方大学に1年間留学し、大学卒業後配偶者の仕事の関係で来日し家族と共に日本で生活する元留学生2名を対象にライフストーリー・インタビューを行った。2名の語りから、留学評価、留学と現在の生活との関連、日本語習得と留学評価の関連に焦点をあてて、分析を行った。その結果、以下のことが判明した。①学習環境は2名にとって万全ではなかったが、留学をきっかけに日本語力が向上した、②留学は自信を得、自己成長する場であった、③学内外の人との良好な人間関係が安心できる居場所として機能し、その関係は現在も維持されている、④日本人との関係構築には日本語力が寄与している、⑤留学経験で得た日本社会や文化に関する知識と理解は再来日後の生活に活かされている、⑥結婚、出産や育児によって勉学やキャリアを中断・縮小する選択をしたが、勉学への意欲と学んだことを出身国、日本、広く社会に還元したいという意志をもち続けている。

【キーワード】 留学評価、元留学生、ライフストーリー、家族、再来日

### 1. はじめに

近年、留学政策や大学での留学生教育の改善のため、大学・大学院時代という人生において大きな分岐点となりうる貴重な青年期に日本留学を選択した元留学生たちにとって、その選択がその後の人生においてどのような影響を与えたのかという長期的な留学成果を元留学生の語りから質的研

---

\*茨城大学全学教育機構 (〒310-8512 水戸市文京 2-1-1; Institute for Liberal Arts Education, Ibaraki University, 2-1-1 Bunkyo Mito-shi 310-8512 Japan)

究法で導き出そうという研究がなされている。田中 (2014) は、日本留学終了後日本・出身国以外の国で生活する元留学生を対象とした聞き取り調査から、専門性の深化、人間的成長や自信、他者からの評価などの留学成果が留学後も国や地域を超えて波及していることを指摘している。佐藤 (2013) は元留学生のライフストーリーから、元留学生が留学中いくつかの転機を経て自信を得、日本での就職という自己実現を果たす過程を描き出し、その自己実現は日本語を学ぶ自己の変容に支えられていると結論づけている。

本研究は、ライフストーリー研究<sup>1)</sup>の手法を用い、個々の元留学生が留学経験をどのように捉え、留学経験がその後の人生にどのような影響を与えたかを探るとともに、日本での学修や人間関係構築に大きな役割を果たす日本語習得と留学評価との関連を解明しようという一連の研究の一部である<sup>2)</sup>。

一連の研究では、多様な元留学生の語りから個々の留学評価と日本語習得の関連を検討し、元留学生が留学経験を肯定的に評価し、その評価に日本語習得が関与していることを示してきた。

日本で働く元留学生を対象としたものでは池田・八若 (2016)、池田 (2018) がある。池田・八若 (2016) では、日本の大学院修了後日本で働く元留学生2名がコミュニティ参加への意思決定を学びへの転機とし、多様なコミュニティ内での人との関わりから日本語を学び続けており、日本語習得が現在の良好な人間関係構築や肯定的な留学評価に結びついていることを示した。池田 (2018) では、英語によるプログラムで学位を取得し日本で生活する理系研究者夫婦を対象とし、学位取得や研究業績が留学評価の重要な指標であること、研究上の使用言語は英語で日本語学習歴も短い環境によって英語と日本語を使い分けてコミュニケーションをとっており、日本滞在の長期化に伴い出産や子育てなどによる日本語でのコミュニティ参加が増えていることなどを明らかにした。

出身国で大学教員として働く元留学生を対象とした池田・八若 (2017) では、研究分野が日本と密接にかかわっている文系元留学生は日本滞在経験そのものや日本語習得にも研究上の意義を見出し、研究内外で日本との関係を維持していることが明らかになった。一方、研究での使用言語が英語の理系元留学生は日本語学習は短い期間であったにもかかわらず日本語会話を保持し、研究上の日本との関係を維持していた。八若 (2018) では、インドネシアで日系企業社員や通訳・翻訳者として働く日本語専攻の元交換留学生3名を対象とし、1年間の交換留学が日本語の上達だけでなく自信の獲得や視野の拡大をもたらし、現在の仕事にも繋がる経験として高く評価されていることを明らかにした。

以上のように、留学評価及び留学後の日本との関わり方に日本語習得が寄与していることを明らかにしてきたが、一連の研究をはじめこれまでの研究は元留学生のキャリアと結びつけて議論されることが多かった。しかし、元留学生の留学後の人生は多種多様で、社会情勢や家族の都合などにより必ずしも自らが思い描いたように進んでいくわけではない。本研究では、日本語専攻で日本の地方大学に約1年間の短期留学<sup>3)</sup>し、出身国の大学卒業後配偶者の仕事の関係で再来日して家族と共に日本で生活する2名の元留学生を取り上げる。結婚、出産、育児などで自らが描いた研究やキャリアを中断または縮小する選択をして、日本で家族と共に暮らす元留学生である。2名のライフストーリー・インタビューをもとに、(1) 日本留学に対する評価、(2) 留学と現在の生活との関連、(3) 留学中・留学後の日本語習得と留学評価の関連の3点に焦点をあてて分析した。

## 2. 研究方法

2018年8月と9月に、元留学生2名にライフストーリー・インタビューを行った。2名は東南アジアの大学で日本語を専攻し、在学中に日本の地方大学C大学に約1年間の留学をした。出身国の大学の課程を終え、日本で働く夫との結婚を機に再来日した。インタビュー調査の依頼時に、「留学する前から現在に至るまでの生活やその時に考えていたことについて話してもらいたい」という教示と大まかなインタビュー項目<sup>4)</sup>を伝えておいた。インタビューは調査者と一対一で行い、必要に応じて調査者が質問を加えながらインタビュー項目に関する内容を自由に話してもらった。インタビューは協力者の了解を得て、ICレコーダーに録音し、文字化した。インタビューの内容の中から、上述の3点に関わる言及を中心に抽出し、時系列にまとめた。限られた紙面の中で、極力協力者の言葉をそのまま掲載するため、会話形式と引用を交えた要約の形式<sup>5)</sup>とを併用した。紙面の関係上、フィラー（あの、えっと等）や言い間違いは省略した。最小限ではあるが理解に支障があると思われる明らかな間違いはインタビュー協力者の了解のもと修正を加えた。また、個人や場所が特定されるような固有名詞は一般名詞や記号に変更した。

## 3. 語りと考察

本章では、各インタビュー協力者について、略歴を示し、その語りを「日本語学習及び留学のきっかけ」「留学中の生活」「人間関係」「留学生としての学修」「留学後から再来日まで」「再来日後の生活」「留学を振り返って」の項目に分けて具体的なエピソードを交えて提示した上で、それぞれの留学評価、留学と現在の生活との関連、日本語習得と留学評価の関連について述べたい。

### 3.1.1. インタビュー協力者Aさんの略歴

協力者Aさんは、出身国の大学日本語学科3年修了時に同大学の交換留学生募集に応募し、選考を経て約1年間C大学に留学した。留学終了後大学在学中に結婚し、日本で働く夫と生活するため大学卒業後來日し、約1年がたった。調査時の1か月後に出産予定であった。

### 3.1.2. Aさんの語り

#### 《日本語学習及び留学のきっかけ》

日本語に興味を持ったきっかけはアニメであった。アニメを通して敬語や女性語、男性語などいろいろな話し方がある日本語に興味を持った。高校で第二外国語として日本語を選択したが、日本語は難しい言語だと思われており、当時は3年間続けて勉強する学生は少なかった。出身国には日系企業も多く、日本語を学べば就職の可能性も広がるという母親の勧めもあり、出身地の大学の日本語学科に入学した。

留学した先輩の経験を聞き、自分自身も日本を実感したいと思うようになった。3年生になって「留学しなければ」というあせりもあり交換留学生募集に応募した。選考の結果C大学に留学することになった。

#### 《留学中の生活》

日本に来る前は、日本語が通じるかどうかなど不安と緊張があったが、分からないことは辞書で調べたり日本人に聞いたりして解決しながら、「実際にやればやれます」と徐々に自信を得ていった。

留学前は花火大会、お祭り、遊びなど日本で体験できることへの期待も多くあった。しかし、C

大学のあるD市は静かな地方都市で留学前の日本のイメージとは違い、留学当初は退屈を感じた。実際のところ、奨学金が得られなかったため最大の不安は経済面で、出身国に比べて物価が高いこともあってアルバイトをしなければならず、期待したような生活は難しかった。授業にも順調に参加できるという期待があったが、時間的に勉強に集中できなかった。

A： 私一つしか選べなかったんですよ、その時は。どちらか、生活か、勉強か。で、私はやっぱり生活のほうが一番必要かなと思って。やっぱり集中できなかったんです。

\*：<sup>6)</sup> 勉強に？

A： はい。人によって違いますけど、でも、私はそういうタイプです。

Aさんは先輩がアルバイトをしていた居酒屋でアルバイトをするが、大変なことも多かった。

A： 暇な時はすごい暇だし、お金も減らしますよね。ものすごいぎやかだったら、すごい疲れるし、仕事がお金がありますけど、やっぱりね、居酒屋は夜しか仕事がないので、次の日は大学に通って、眠い。ちょっと大変でした。で、店長は優しいですけど、でも留学生、外国人もやっぱり平等に扱うので、ちょっといろいろなカルチャーショックもありました。例えば、日本人は、人の前でしかるとか、注意するんですよ。(中略)ま、理由はたぶん他の人が同じ間違いをくりかえさないように、その人を叱る。でも、私の国の常識だったら、それはもう軽蔑される。

今は「日本の文化のほうがいいかな」と思うが、文化差に当初は驚いた。その居酒屋でのアルバイトをやめようと思ったこともあったが、C大学のある地方都市ではモスリムとしての問題もあった。

A： 私、その時期、やっぱりその居酒屋を出ようかなと思ったら、他のバイト先に連絡してみたら、やっぱりイスラム教とか、ヒジャブを被った人、そんなに理解がないので、D市は、ちょっとね、困ります。

結局Aさんは留学期間を通して留学生の雇用慣れしている同店でアルバイトを続け、自信や達成感を得ていった。

A： 日本で学んだことはやっぱり survive みたいな、人生の survive。日本語で何というの？

\*： 生き抜く？

A： 生き抜くという知恵、もらいました。頑張ればやっぱり自分の目的、例えば遊ぶところ、ディズニーシーとか、自分のお金で行けるようになって、すごいうれしい。

勉強との両立は難しかったが、アルバイトを通して日本社会についても多くを学んだ。

\*： 日本の社会のことは実際に。

A： はい、今分かります。例えば、日本人と話す時のマナーとか、いろいろな地域の人に教え

られたりします。日本の、仕事のこととか、環境とか、店長が教えたこと。

一方、期待外れだったことの一つは、日本人の友達を作るのに時間がかかったことだ。留学生同士は本音対本音で話せる友人がすぐできたが、日本人と同じような関係になるのには約半年はかかった。

### 《人間関係》

しかし、Aさんは留学中に印象に残っていることとして、まず人間関係に関することをあげた。

第一は、いろいろな国から来た留学生と交流できたことである。留学生寮で共に生活する留学生の数人とすぐに打ち解けて、よく一緒に話したり行動を共にしたりした。今もSNSで連絡をとりあっている。

次に、アルバイト先の店長に日本での仕事について多くのことを教えられたことだ。

A： 店長がやさしくて、日本人の仕事環境、仕事のマナーとか、今でもまだ残っています。例えば、私、料理をするたびに、必ず店長のやり方、店のやり方、今でもまだやっています。残っています。例えば、作業が終わった時に必ず清潔にする。

三番目は、大学周辺に住む地域の人々に大変お世話になったことである。最もお世話になったZさんは出身国と交流のある先生から紹介された老婦人で、Aさんはその家族や友人とも交流が持てた。

A： (Zさんは) いつも困った時、自分のお金がない時に、いつもおごったりします。ごちそうとか、で、人生相談も。そのほうがすごい助かりました。お米がなかったら、Zさんから、いただきました。すごいやさしいです。

\*： そうですか。そういう人、ありがたいですね。

A： で、またZさんの輪からいろいろ紹介してもらって。例えば、三味線のイベントとか、日本にある関係のプログラムとか、連れて行ってくださったりします。ピクニックとかも。

さらに、日本人学生についても6カ月ぐらい過ぎると個人的なことも話せる友人がチューターをはじめとして数名でき、再来日時に再会するような関係が築けた。教員や同じ授業をとるクラスメートとの関係は問題はなかったが、主として授業だけの関係だった。

### 《留学生としての学修》

留学時の学修については、経済的な問題から生活に重点を置き、勉強に集中できない自分自身に不満だった。

日本語のクラスは4レベルのうち最も上のクラスで難しかったが、ついていけた。日本人学生向けの日本語教育や異文化理解に関する専門科目はあまり考えず選択したこともあり、難しくてもよくわからなかった。

A： なので、それがやっぱり精神的にもね、影響があります。なんか自信がないなって、行きたくないなっていうあれもありますけど。

出身国と日本との教育の差も感じた。授業方法について日本の授業はよく計画されていて時間もぴったり終わった。国での教育方法をもっと改善しなければならぬと感じた。

日本語については、留学中に受けた日本語能力試験 N2 に合格できず、上達を実感できなかった。上達を感じられたのは、帰国直前に出たスピーチコンテストで優勝した時だった。出身国との違いなど日本で感じたことをまとめた内容だったが、聞き手である日本人に伝わったと感じた。スピーチの練習でも数名の地域の人に添削してもらったり、発音などについてアドバイスをもらったりして、約2カ月間週3回くらい練習に付き合ってもらった。

#### 《留学後から再来日まで》

留学終了後は出身国の大学で卒業に必要な授業を履修した。留学先で履修した科目に単位互換ができないものがあったり、留学先にはない科目があったためだ。婚約者が日本で働くことになったため、卒業を待たずに結婚した。その後教育実習を終え、卒業論文を提出して、留学終了後約1年半で卒業した。

専門分野の知識については帰国後のほうが得られたと感じている。3年次修了の留学時は研究について何も知らず無計画だったので、研究については先生から「留学で何を学んだか」と聞かれても答えられなかった。

A： 自分で自分の国で勉強しました、研究ってどんなことをするのか。その時もまた、自分の国だからもっと時間がありますよね。なので私、ゆっくりと研究論文とか、いろいろ読みましたけど、帰国後上達しました、逆に。時間がありますよね。バイトがない。

\*： なるほど。専門的なことは国のほうがゆっくり勉強できた。

A： はい。はい。逆。その時先生からの授業も、論文指導も受けましたし、講義も受けましたし。なので、自分で習って、学んで、分かったこと、たくさんあります。

論文作成を通して日本語も上達したと感じている。

A： いろいろな先生に「留学したからあなたは日本語がもっと誰よりも上達しなきゃ」と期待されました。なので、私も頑張らなければ。それがきっかけです。

留学経験者に対する周囲の期待がきっかけとなり、帰国後さらに日本語の勉強に熱心に取り組むようになった。

#### 《再来日後の生活》

卒業の2か月後、夫が働いている日本の地方大都市E市に来た。来日後は妊娠したこともあって、主婦として生活している。日本人との交流は夫の会社の人とはあるが、一般的な話をする程度である。アパートでの近所づきあいもあまりない。

A： 今も、主人の会社の友達も、日本人、いろいろなレベルの人がいらっやいますけど、今も日本人はそんなに、私たちもそんなに

\*： 深く関わることはない

A： 関わることはない。私たちはやっぱり、二人のほうがいいかな。

現在最も交流があるのは夫の会社の外国人社員である。会社には同国人は夫以外に1名だが、ドイツ、タイなどからの外国人社員がいる。

A： やっぱり主人の友達とかはよく交流します。

\*： 例えばどういう交流？

A： 食事会とか。例えば、イタリアのレストラン行ったり、スペインとかイタリアとか、いろいろなレストラン、いろいろな国のレストランとか、行ったりする。

\*： ああ、なるほど。いろいろな国の人と

A： それもなんか、なつかしいですね。留学のようにみんな交流しています。

また、大都市E市は地方都市D市と違って、留学生、技能実習生、介護士など多くの同国人がいるので安心である。

妊娠を期に「病院」という新たなコミュニケーションの場が加わった。外国人に対応してくれる病院を探すのは費用面のこともあって苦労したが、何とか見つけられた。

A： 先生との交流は順調です。いつもチェックする時には必ず主人が来て、で、三人で日本語話すのもちょっと大変なこと。また専門用語が出ますね。婦人科的なあれ。出ましたけど、自分も妊娠に関係ある言葉を暗記します。なので、もし先生が難しく説明したら、必ず主人が私とまたディスカッションしたり。意外と先生に私たちの日本語、通じてます。たまには、英語も話します。

病院はこれまでに外国人の出産に対応してきた実績があるので大丈夫だと思う。ただ、Aさんは具体的には語らなかったが、外国人ということで一人の看護師から差別を受けたという。

A： でもだいたい大丈夫です。みんなやさしい。今母親のクラスとかにも参加しなければならぬし、ちょっと緊張して。

今後、夫の仕事の関係で数年は日本にいる予定である。男の子なのでヒジャブなどの服装の問題がないため女の子ほどではないが、子育てにも不安がある。

A： 宗教と、食べ物、たぶん一番難しい。

\*： 言葉。

A： ま、言葉もですね。みんながここに長く住むと日本語しか知らないなので、家でたぶん自国語とか地元の言葉とかも教えなければなりません。それも大変かもしれないです。

#### 《留学を振り返って》

Aさんは留学経験を次のように評価している。

A： 全体的にはやっぱりさっきのように、私、勉強よりも社会のこと、日本の社会を学ぶことができました。勉強はたぶん45%くらい。日本の生活は55%くらい残っています。気持ち的には不満ですね。自分に不満でした。

\*： 自分自身に。

A： なぜなら、専門的なこと、専門的な授業はそんなにマスターできなかったの、ちょっと残念でした。

しかし、留学を通して日本での日常生活や日本人との接し方について分かるようになったことを評価している。

A： 最終的に、やっぱり日本を知るには、まず社会のことを学んだほうがいいと思います。勉強はいつでもできるんですけど。

日本で働く夫ともよく話すが、留学で学んだことや地域の人に教わったマナーなどを実際に適用すると「日本の常識が分かる人」だと言われることもある。留学で得た「survive」する「知恵」は失われず、現在の生活に活かされていると感じる。

再来日時には日本の大学院に進学したいという計画があった。今は出産、育児を中心に考えているが、将来的には育児が一段落したら奨学金を探して勉学に集中できる形で日本の大学院に進学したいと思う。そして国に帰ったら出身大学の日本語教育を発展させたいと思っている。

### 3.1.3. Aさんの語りのまとめ

先輩の話を聞いて応募し選抜されて期待に胸を膨らませて来日したが、奨学金なしで留学したAさんは経済的な問題から生活を支えるアルバイトに時間をさかざるを得なくなった。性格的にも両立は難しく、勉学に集中できたとはいえ不満を残す結果となった。特に、専門科目については問題意識の低いまま履修したことや日本語のレベルが十分でなかったこともあって修得できたことは少なかった。

しかし、留学終了後、留学経験者に対する周りの期待から、さらに熱心に日本語学習に取り組んだ。専門分野や研究に関してはアルバイトの必要がない留学後のほうが時間的な余裕もあり、十分に組み合わせたという。留学中は不満が残った勉学面だが、留学に対する他者の評価が留学後の学習の動機づけとなり、結果的に日本語の上達を実感できることになった。

一方、Aさんは留学経験を通して「survive」するための「知恵」を得たと語っている。居酒屋でのアルバイトでは文化差や時間的な面で苦労があったが、アルバイトを通して日本の社会や仕事への取り組み方、日本人との接し方などを知り、再来日後の生活に役立っている。自分の力で得たお金でやりたいことができたという経験もし、「やればできる」という達成感や自信に繋がった。

また、留学で最も印象に残ったこととして「人との出会い」をあげた。その中でもまず留学生寮で共に生活する世界各国からの留学生との交流をあげた。数名とは来日後すぐに打ち解けて共に多くのことを語り合い、行動を共にする関係が築け、最もいい思い出であるとした。次に、アルバイト先の店長から学んだことである。アルバイトは時間的にも体力的にも大変だったが、店長から教わった日本人の職業意識や就労姿勢などは現在の生活に活かされている。三番目に地域の人々から生活面、勉学面の双方で多くの支援を受けたことだ。困った時の相談からスピーチコンテストの練習まで様々な形で支えられ、安心して頼れる場となった。最後に、日本人学生の友人作りには時間がかかったが、半年くらいを経て数名であるが仲のよい友人ができた。これらの人々と現在も連絡を取り合い、関係を保持し再来日時に数人と再会をはたしている。

Aさんの留学生活は、留学前の期待とは異なり、宗教や経済的な問題、文化差など様々な困難に直面したが、留学生仲間、日本人学生や地域の人々など学内外の人々に多層的に支えられ、日本の社会への理解を深め、困難を乗り越え、自信や自己肯定感を獲得していった体験であったと言える。

再来日をし主婦として生活し始めたAさんは留学時と同様日本で生活する外国人とまず交友関係ができるが、日本人とは深く関わっていない。日本人との交流については、関係作りに時間がかかるという留学中の経験に加え、夫と二人であることや大都市E市には同国人が多いことなどから留学時ほど気にしていない。妊娠、出産で、新たなコミュニティ参加と日本語が必要となったが、一部差別的な扱いも経験したものの、日本語でのコミュニケーションも良好で多くの人が好意的である。出産後の子育てでも、宗教や食べ物、言葉の教育など、外国ならではの不安もある。しばらくは育児中心の生活になるが、日本にいる間に奨学金を得て大学院への進学することを模索している。

Aさんの留学評価は、大学卒業後の進路は異なるが、八若（2018）の奨学金を得られなかった交換留学生と酷似している。両者ともに外国生活で様々な困難を乗り越えたことによって自信を得たが、経済的な理由からアルバイトに時間をとられ勉学に集中できなかったという後悔を残している。しかし、共に留学終了後も勉学への意欲を失わず、勉学に集中できる環境での進学チャンスを追い求めている。経済的格差のある国からの留学生に対する経済支援のあり方は検討の必要のある課題である。

### 3.2.1. インタビュー協力者Bさんの略歴

協力者Bさんは、出身国の大学の日本語学科1年次修了時に選抜試験を受け、奨学金を得てC大学に約1年間の留学をした。大学卒業時には結婚を考えていたので、就職せず自営業などをして、3年後日本で働く夫との結婚を期に来日した。調査時には夫が働く東京で、7歳と1歳8カ月の2児の育児をしながら、翻訳や通訳の仕事をしていた。留学終了後十数年が経過していた。

### 3.2.2. Bさんの語り

#### 《日本語学習及び留学のきっかけ》

Bさんの父親が日本留学経験者だったため、子どもの頃から日本の本や絵本などが身近にあり、日本に興味があった。日本から来た父のお客さんとの接触経験から、「大きくなったら日本語や日本文化が勉強したい」と考えるようになった。

高校卒業時は国内情勢の影響で大学が閉鎖されていた時期ですぐに大学に進学できなかった。パソコンの専門学校に行ったり、ボランティアの先生が教える私塾で日本語を勉強したりしていた。大学が選べるようになって、大学で日本語を専攻することになった。日本語学科の一期生だった。

1年次に日本への短期留学の選抜試験があったが、日本語の既習歴のあったBさんは有利だった。面接や書類審査を経てたった一人の奨学生として選ばれ、地方都市D市にあるC大学に1年間留学することになった。奨学生に選ばれたのは「宝くじに当たるみたいな感じ」だった。

#### 《留学中の生活》

外国に行くのも、一人暮らしも初めてだった。大学で1年間教科書で勉強しただけの日本語だったので、留学前は不安だったが、期待も大きかった。

B：自分がテレビとかで見てる日本が実際に見れることとか、そういうことで、すごいわくわくしてました。不安もありますが、すごいいっぱい楽しみにしてました。

実際に見た日本は、空気や道路もきれいで交通も便利だったが、出身国との違いも多く驚くこともあった。到着直後は留学生担当の教職員に暖かく迎えられ、「自分の親戚のところに行った」ように感じ、安堵した。日本語は教科書でしか勉強していなかったので、最初は早口や小さい声で話されると聞き取れず困ったが、「やればできる」と思って頑張った。

日常生活で困ることはあまりなかった。寮も立派で、居心地がよかった。

B： 寮で一緒に生活する友達もみんな優しいから、ほんとに楽しい一年間でした。寮の中でも、イベントをやったりして、ウェルカムパーティとか最初やってて、すごい楽しかったです。ハロウィーンとか。そう、いろいろ自分の国の料理を作ってみんなで食べたりとかして、とてもいい思い出がいっぱいできました。

10月に来日したので慣れない寒さに苦労したが、父親の友人に炬燵をもらおうと、炬燵のない留学生の多くがBさんの部屋に来て過ごしたのもいい思い出である。

Bさんが留学した当時奨学金受給者はアルバイト禁止と言われていたので、アルバイトはしなかった。家族からも1年だから仕事よりもいろいろな体験をして帰るようにと言われていたので、父親の友人を訪ねたり、北海道、京都、名古屋などを旅行した。

思っていたことと違ったのは、C大学にはBさんのような1年間の短期留学の留学生がいなかったことだ。

#### 《留学生としての学修》

Bさんが留学した十数年前は、大学の受入体制もまだ十分ではなく、日本語の授業は学部留学生向けの上級と、大学院入学前予備教育としての初級しかなく、Bさんのレベルに合う日本語クラスは開講されていなかった。仕方なく上級の授業をとったが、日本滞在・日本語学習歴の長い学部留学生と一緒に勉強するのは大変だった。

B： 私はまだ初級なんですけど、上級や中級の人たちと一緒に混ざってやることになって、ちょっと大変でした。でも、大変というか、自分が追いつくようにやらなければと思って、一生懸命できるかぎりまた勉強して、帰る時にはそれなりに、日本語は身につくようになってきました。

また、人前で発表したり意見を言ったりする機会がない自国の教育システムとの違いにも戸惑った。

B： 最初は人の前に立つのも勇気がなくて、それにプラス、自分が書いた文章をみんなの前で言うというのは、すごい大変なことでした。恥ずかしかったです。あとは、パソコンですね。パソコンの使い方なんかも、私の国はそんなに発達してなかったので、向こうでもあんまり私はできなかった。ここに来てパソコンのことやったりしたんですが、それはすごい難しかったです。

日本人学生向けのクラスも聴講した。聴講だったため試験をうける必要がなかったので、プレッシャーはなかった。

B： 指導教員の先生の授業とかすごい楽しくて、あの時交流がいっぱいできましたし。

この授業のグループ活動で、Bさん自身がテーマとなって国の文化、食、服装などについていろいろ聞かれたりしたのも楽しかった。

1年間の留学を通して自分自身の日本語の上達も感じたが、留学は自分そのものが変わるような経験であった。

B： 最初に比べれば、やっぱり、人の前でちゃんと話せるようになったし、大きい声で話せるようになって、自信をもって生活できるようになりました。新しい自分ができたみたいな感じになりました。

\*： 来る前と、日本語だけじゃなくて自身が変わったってことですね。

B： そうですね。全部変わらして、自分自身が。日本語もやっぱり最初の頃に比べたら、すごい聞き取りもできるようになって、普通のトーンで話しても少しわかるようになって、自分の方からもちゃんと少しはできるようになりました。

### 《人間関係》

別のプログラムであるが同国人2名と一緒に来日したことは心強かった。留学生や日本人学生との友人関係も良好だった。

B： 友達の関係も、みんなは優しく、日本人の友達も優しいんですが、寮で一緒に生活する友達もみんな優しいから、ほんとに楽しい、一年間でした。

\*： 日本人の友達もけっこういました？

B： 日本人の友達もいました、けっこう。私のところにも遊びに来たりして。でも、日本人よりは一緒に住んでる寮の友達とか、もっと会う機会が多かったです。一緒にどこか遊びに行ったりとか。

日本語の授業でも中国人留学生に漢字の勉強を手伝ってもらったりした。今も連絡を取り合う留学生仲間もいる。

留学生サポートのボランティアとして寮に毎週来ていたXさんにもお世話になった。

B： Xさんが毎週来たりして、分からなかったこととか、聞いたりして、あとXさんがいろいろなところに連れて行って、実際に教えたりしてました。

Xさんとは今でも年賀状のやり取りをしており、東京に引っ越した後Xさん宅で当時の留学生仲間が集まったりして交流が続いている。

また、近隣住民のVさんに花火大会に浴衣を着せてもらったり、二十歳になったBさんの成人式に着物を着せてもらったりしたことが最も印象深い思い出の一つになっている。Vさん夫妻とはよく連絡をとっており、D市を訪問すると今も暖かく迎えてくれる。

指導教員をはじめ教員との関係も良好だった。指導教員には授業外でもいろいろな所に連れて行ってもらったり、帰国前には国で習っていた竖琴の演奏会を開いてもらったりした。指導教員と

は今でも Bさんの自宅で会ったり、一緒に出身国にも行ったりするなどの繋がりがある。

#### 《留学後から再来日まで》

留学後は出身大学の2年生に復学した。留学による日本語の上達と言う点では、留学しない学生と比べて発音がきれいで自然な話し方だと言われた。スピーチコンテストでも優勝した。3年後出身大学の日本語学科を卒業した。

日本語教師になりたいという気持ちもあったが、結婚を考えていたので就職はせず自営業になった。当時は出身国と日本との関係もそれほど盛んではなく、日本語学科を卒業してもツアーガイドなどしか就職の選択肢がなかったこともある。父の勧めもあって小さな酒屋やレストランを経営した。大学卒業の3年後に結婚し、日本の地方大都市 E市で働く夫と生活するため来日した。

#### 《再来日後の生活》

来日直後は特に何もしていなかったが、和食を学びたいという気持ちからほどなく日本料理店でアルバイトを始めた。日本での初めてのアルバイトだったが、システムになかなか慣れず苦労した。妊娠したため約1年でアルバイトをやめ、第一子を出産した。

リーマンショックの影響を受けて夫が E市の会社をやめ、新たな仕事が見つかった東京へ引っ越した。そのまま専業主婦を続けることに不安を感じ、自分のできる仕事を探した。

B: 私もそのまま子育てとか主婦になるのが、ちょっと不安で。自分が勉強したこと、大学まで卒業できて、何も役に立たないのはちょっとつまらなくなって、不安で。それで、ある会社で面接することになりました。そこは、日本語翻訳とか通訳、出身国の言葉の先生、募集しているところ。もともと先生になりたかったので、日本人に自分の言葉教える先生もすごいと、考えてて。それでそういう会社に最初に登録して、面接も受かって、そこで日本人たちに国の言葉を教えることになりました。

\*: そうですか。しばらく先生をしてたんですね。

B: それから、通訳もやったり、簡単なことから翻訳もやり始めたりしてて。私も自分が大学まで卒業して何もやらないと、自分の国のためにも日本にも何も役に立たない。自分が架け橋になりたかったから、自分の国のためにも何かできることはやりたいですね。それで、やっと就職できて、仕事できて、楽しかったです。

\*: けっこうニーズもあるんですね。

B: そうですね。私がやり始めた頃からどんどん日本と国の関係もよくなって。前よりは政治も変わったりして、それから仕事もどんどん増えてきて。(中略)

\*: 今も続けて。

B: 続けてやっています。翻訳とかはお家でもできる。通訳はあんまり、子どもが二人になって。預けられる時間帯なら、ちょっとだけ下の子にも一時保育、預けたりしてやっていますが。翻訳の仕事が多いですね。

福祉関係からアニメ、ビジネス関係など幅広い翻訳を手掛けている。

B: 勉強していても使わないと忘れてしまいますので。翻訳とかすることによってもっと字とか、漢字とかわかるようになって、すごい。だいたい見たらすぐわかるようになって。それはとてもいい仕事です。勉強にも繋がってるから。

この他、大使館などのイベントで声がかかれば豎琴の演奏などもやっている。

### 《日本での子育て》

第一子が5歳になる前に夫婦で今後のことをいろいろ考えた。出身国の情勢も変わり、日本にいた同国人も帰国して転職する人が増えた。国に帰ることも考え、母語と日本語の2言語で育てた子どもの発話が遅いのが心配だった。Bさん夫婦は子どものことを中心に考え、教育でより手厚い支援が受けられる日本を選んだ。子どもたちが自分で進路を決める大学進学くらいまでは日本にしようと考えている。

今は二人の子どもの子育て中心の生活だが、日本での子育てにも苦労がある。

B： 学生の人に比べたら、今は苦労。全部が初めて初体験みたいなことで。(子どもの)先生たちと今でも面会していろいろ話して。あと、ママ友との付き合い。

\*： ママ友。けっこう難しいらしいですね。

B： 幼稚園の時は、かなりひどいママとか会ったことがあります。でも周りにも優しい方が多いから、あの方たちが守ってくれて助かったことが。

\*： 日本人同士でも難しいらしいから。

B： そうですね。私は最初F区に住んでいて、息子が通っていたところは、外国人が珍しくて、息子しかいなかったのでも外国人の私は少し日本語できるほうだったので、そんなにだったんですが。ママ友は日本人同士でも難しい。いいママもいれば、ちょっと。

\*： 合わない人もいます。

B： でも、あの時からずっと付き合い今でも姉妹みたいになっている方もいます。それで去年彼女と娘さんと女性ばかり、おばあちゃんと三人で私の国に。

\*： 行ったんですか。へえ。

B： どこの国でもいい人、悪い人が。そういうのあるから、それは気にしないようにしてます。

そして、日本での生活について次のように付け加えた。

B： どんなことでも日本は基本があるから、慣れれば大丈夫なので。規則とかルールとか守れば、そんなに大変なことはないかなと思って。

### 《留学を振り返って》

Bさんは1年間の留学に非常に満足していると、振り返った。

B： あの時若かったし。でも大冒険でしたね、私にとっては大冒険でした。いろいろなことが初体験ばかりで。でも、それがあって私は今のように自信を持って言えるようになったから、それが自分にとってはほんとに宝物のような体験でした。あとは、あの時周りの方々とか、先生方がすごく優しくしてたから、それがあって、心も強くなって、日本はもっと好きになって。東京はやっぱり全然違います。なんか付き合い方が違って。

\*： 最初はD市のほうがよかった。

B： もし東京だったらそんなにいい印象があったかわからないですが。みんながすごいあった

かいから、自分がどんなに不安があっても、そういうことがあるから、乗り越えられました。いろいろな苦勞を。今でもD市が大好きです。

留学前にもっと日本語ができればよりコミュニケーションがとれたかもしれないと思うこともある。

B： ちょっとだけの日本語だけで、でもずいぶんコミュニケーションもできて、ずいぶん一年間楽しく過ごせたので、何よりもよかったと思っています。

\*： 留学中やっておけばよかったと思うようなことはありますか。

B： 私は、かなり怖がり屋なので、自分のほうから声をかけたり、苦手なタイプで。なかなか友達が。恥ずかしがり屋だから。自分からもっと自分の方から挨拶して、コミュニケーションとってれば、もっと友達とかできたかなと思って。それだけ後悔しています。

日本で子育てをしながら翻訳などに携わっている現状にも満足している。

B： 自分ができること、海外にいながらでも国のためにとか、日本のためにとか、両国のためにやりたかったので、それが実現できて、今満足しています。

今後の希望は、子育てが一段落したら、大学などで勉強しもっと活躍できるようになりたいということである。

B： まだまだ日本語は難しいから、これからも勉強したいことがたくさんあるから、もっともっとできるようになりたいです。私は結婚することを選んだから。実はほんとは大学とかで続けて勉強したかったです。(中略) もしこの子たちはちょっと楽になったらまた自分が勉強したいなって。大学とかで。

### 3.2.3. Bさんの語りのまとめ

Bさんの留学中の学習環境はいいとは言えなかった。日本語学科の1年次終了時点で留学したBさんの日本語レベルは初級修了程度であった。Bさんが留学した十数年前はC大学の受入体制は整っておらず、Bさんのような短期留学生向けの授業はなくやむなく上級クラスをとったため、授業についていくのは大変だった。また、講義中心の出身国の教育システムと違って、人前で意見を言ったり発表したりしなければならぬことにも戸惑った。クラスメートに助けをもらいながら、追いつけるように努力した結果、帰国時には自分自身で上達が実感できた。

Bさんの留學生活で特筆すべきは多くの人とよい関係を築き、その関係を十数年後の調査時にも維持していることである。留学生仲間をはじめ、大学の近隣住民や留学生寮のボランティアの方には勉學上の支援だけでなく、地域の行事などへの招待や着物の着付けなど様々な形でお世話になった。指導教員との関係も良好で、授業外でもいろいろな所に連れて行ってもらうなどした。留学直後の少ない日本語の知識でもコミュニケーションを何とかとり、暖かく接してくれた人々のおかげで、多くの苦勞も乗り越えられた。

Bさんにとって、日本留学は「宝くじにあたった」ようなもので「宝物のような」経験であると

振り返り、高い満足を示している。また、留学は「新しい自分」になるような体験だったという。留学を通して、自信を持って行動できるようになり、現在の自分があると評価している。

Bさんの人生は国内情勢や家族の状況などの関係でBさんの意志だけで決められないことが多かった。日本語教師になりたい、大学院に進学したいという思いもあったが、結婚を選び再来日し、子どもが生まれ、子育て中心の生活になった。自国の国内情勢が改善したので帰国することも考えたが、子どものことを中心に考え、日本で教育を受けさせることを決めた。日本での子育てでは子どもの学校とのやり取りやママ友との付き合いなど苦勞も多いが、周りの人々に助けられることも多く、姉妹のような関係の友人も得た。

日本での人間関係構築には日本語力が助けになっているとBさんは感じている。また、「どこの国でもいい人、悪い人が」いるから「気にしないようにしてます」という発言に見られるような対人意識も功を奏していると考えられる。また、「どんなことでも日本は基本があるから、慣れれば大丈夫」「規則とかルールとか守れば、そんなに大変なことはないかな」という発言からは適応力の高さも窺える。

主婦を続けることには不安があり、自国語を教える仕事を得たのをかわきりに、育児をしながら翻訳や通訳を中心に仕事をしている。Bさんは翻訳・通訳という学んだことを活かせる職業を得た現状に満足している。海外にいながら自分の国と日本の双方に貢献ができ、翻訳・通訳を通してさらに多くのことを学べる点が今の自分にとっていいという。Bさんは子育てが一段落したら大学などで勉強し、さらに両国間で活躍できるようになりたいという意欲を示している。

#### 4. 考察と今後の課題

本章では、2名の語りから読み取れる留学の意義、再来日した現在の生活との関連、留学評価と日本語習得との関連について考察を加え、今後の課題を述べたい。

日本語専攻の2名にとって、大学在学中に選抜されて実現した1年間の日本留学はまたとない貴重な機会であった。しかし、留学中の学習環境という点ではAさんもBさんも恵まれなかった。十数年前に留学したBさんは短期留学生の受入体制が整っておらず、自分の日本語能力に合う授業が受けられなかった。奨学金が得られなかったAさんは経済的不安のためアルバイトに時間をさき、勉学に集中できなかった。Bさんは上級レベルの授業についていくのは大変だったが、帰国前には自分自身の上達が実感できた。一方、Aさんは勉学とアルバイトの両立が出来なかった自分自身に不満が残ったが、「留学経験者」への周りの期待から帰国後奮起して日本語を勉強したことがその後の上達に繋がった。留学前の期待とは異なる形であったが、日本語専攻の学生にとって留学をきっかけとした日本語力の向上は成果の一つと言える。

また、両者は、大学での学修以外にアルバイトや地域コミュニティとの関わりを通して日本社会や日本文化について多くのことを学んでいる。1年間という限られた期間の留学では、日本での経験一つ一つが日本に対する理解を深めるものとして認識されていることが窺える。留学経験から得た日本社会への理解と知識は再来日後の生活にも役立てられている。

さらに、経済面や学修面での苦勞、教育システムや宗教、生活習慣の違いなどの文化差を克服し、「やればできる」という自信や自己成長を感じたことも大きい。Aさんは留学を通して生きるための「知恵」が身についたという。Bさんは留学によって「新しい自分ができたいな感じ」と評し、留学を経験したからこそ自信を持って生活できる今の自分があると述べている。Bさんは様々な経緯を経ながらも学んだことを活かせる翻訳・通訳という仕事に就けたことに満足している。さ

らに、2名はもっと学びたいという意欲と、自らが学んだことを出身国、日本、広く社会に還元したいという強い意志を持ち続けていることも確認できた。

日本人学生を対象としたものであるが、奥山(2017)は約1年間の留学体験の効用を質的に分析し、留学生活でのコミュニティ参加とそこでの活動や達成感が大きな意味を持ち、留学後も自信と人生に対する前向きな意欲となるとし、これが留学経験の最大の効用であると指摘している。日本留学を通して自信を得、現在も学習意欲や向上心を持続し、新しい局面に前向きに挑んでいる2名にも同様の留学経験の効用が認められよう。

また、2名が様々な困難を克服し達成感や自信を得ていく過程には様々なコミュニティの人々との良好な人間関係があった。一つは留学生寮で生活を共にした世界各国からの留学生である。両者ともに寮生活を最も楽しい思い出として語り、そこで得た友人関係を保持している。もう一つは、地域コミュニティの人々との交流と支援である。2名ともにキーとなる人物がいた。Aさんの場合はアルバイト先の店長と近隣住民Zさんである。店長からは日本で仕事をするにあたって多くのことを学んだ。Zさんからは勉学、生活双方の支援を受けただけでなく、Zさんを通して人との繋がりを広げられた。Bさんは近隣住民のV夫妻と寮のボランティアXさんから様々な支援を受けた。これらの人々は2名にとって留学中安心して身を置ける居場所としての機能を果たし、現在も続く関係となっている。

久野(2017)は、編入留学生のライフストーリーを大学から仕事へのトランジッションという観点から分析し、留学生のキャリア教育を考える上で卒業後転職等に際して抱える問題を共有する複数の他者の存在や居場所の必要性を提言している。再来日後問題を共有できる者として夫や同国人コミュニティなどの存在も心強いが、留学中に築いた良好な人間関係が引き続き同様の機能を果たすとともに新たな日本人コミュニティとの関係構築に踏み出す礎となっていることも観察された。

2名が留学中に構築した人間関係は大学が提供した接触機会が必ずしもきっかけではなく、先輩の紹介や偶発的なものである。日本人との人間関係を構築する上で日本語力が寄与したことは2名の語りから窺えるが、良好な人間関係を2名が築けた要因や構築のプロセスは本研究では十分に描出できなかった。追調査によって明らかにし、留学生教育の一環として人間関係構築に有効な方策を検討していく必要があるだろう。

留学終了後の人生は直線的ではなく、社会情勢などの外的要因によって方向転換を迫られることもあるだろう。2名のように自身が思い描いていたものとは異なる選択を迫られた時、それぞれがその時その時遭遇する課題に対して決断をし、自らの道を拓いていかなければならない。本研究において留学がそのための自信や自己肯定感を得る場であることが示唆されたが、それをどのようにライフコースを通じて維持し、発展させていくかも探る必要もあると考える。

少子化に伴う労働力不足を解消するため、日本は外国人雇用の拡大へと舵をきった。日本の労働の担い手となる元留学生への期待はますます高まるだろう。日本を外国人にとって魅力ある就労の場、生活の場にしていくためにも、引き続き多様な元留学生のライフストーリーを収集し、個々の人生の豊さに繋がる留学生教育の在り方や日本社会の新たな方向性を探っていく予定である。

## 注

1) ライフストーリーとは「個人のライフ(人生、生涯、生活、生き方)についての口述の物語」であり、「個人

のライフに焦点をあわせてその人自身の経験をもとにした語りから、自己の生活世界そして社会や文化の諸相や変動を全体的に読み解こうとする質的調査法の一つ」(桜井 2012)である。

- 2) 本研究は平成 29 年～平成 32 年度科学研究費補助金基盤研究(C) (課題番号 17K02839 研究代表者: 八若壽美子) による研究成果の一部である。
- 3) プログラムによって「短期」の捉え方は様々であるが、本稿では学位取得を目的とした正規留学との区別から 1 学期 (セメスター) ～2 学期の留学を便宜的に「短期留学」と呼ぶ。
- 4) インタビュー項目:
  - ・ 留学前: 留学したいと思った動機やきっかけ / どうやって日本語を学んだか / ○○大学を選んだ理由 / 留学前の不安・期待していたこと
  - ・ 留学中: 来日時の様子 / 期待していたこととの違い / 留学生としての生活 (勉学・日常生活・友人関係) / 印象に残っているエピソード / 先生・クラスメートとの関係 / 地域の人との交流 / 日本語学習について (授業中・授業外) / 自身の日本語に対する意識 / 日本語上達の実感
  - ・ 帰国後: 帰国後から卒業、再来日まで / 再来日の経緯 / 現在 (日本での) の生活 / 現在及び将来設計において留学経験が役に立ったと思うこと / 日本語に対する意識 /
  - ・ 全体: 自身の日本留学経験をどう評価するか / やってよかったこと、やればよかったこと / 現在の生活との関連
- 5) 要約した部分の「」は協力者の言葉を引用したものである。
- 6) 「\* :」は調査者の発言。

## 引用文献

- 池田庸子 (2018) 「元留学生のライフストーリーにみる留学評価－研究者夫婦の場合」『茨城大学全学教育機構論集 グローバル教育研究』 1, 45-55.
- 池田庸子・八若壽美子 (2016) 「日本で働く元留学生のライフストーリーに見る留学評価」『茨城大学留学生センター 紀要』 14, 49-66.
- 池田庸子・八若壽美子 (2017) 「元留学生のライフストーリーに見る留学評価－出身国の大学教員の場合」『茨城大学留学生センター 紀要』 15, 13-28.
- 奥山和子 (2017) 「留学経験がもたらす効用としての自己効力感の形成プロセス－質的研究法を使って－」『神戸大学大学教育推進機構大学教育研究』 25, 83-101.
- 桜井厚 (2012) 『ライフストーリー論』 弘文堂.
- 佐藤正則 (2013) 「留学経験の意味と自己実現についての考察－元留学生のライフストーリーから」『早稲田大学日本語教育研究センター言語文化教育研究会』 11, 318-327.
- 田中京子 (2014). 「日本留学の長期的成果－第三国に住むラテンアメリカ出身者の場合」『名古屋大学国際教育交流センター 紀要』 創刊号, 5-11.
- 八若壽美子 (2018) 「インドネシアで働く元交換留学生のライフストーリーに見る留学評価」『茨城大学全学教育機構論集 グローバル教育研究』 1, 29-43.
- 久野弓枝 (2017) 「中国人編入留学生のキャリア形成に関するライフストーリー研究 (3)－トランジションと agency に着目して－」『札幌大学総合論叢』 44, 61-71.

# 元日本留学生のライフストーリーにみる留学評価 —交換留学から英語教育の道へ—

池田 庸子\*

(2018年10月1日受理)

## Life Story Interview of Former Exchange Students: How They Became English Teachers in Japan

Yoko IKEDA\*

(Received October 1, 2018)

### 要旨

日本の大学で約1年間交換留学生として学び、卒業後に日本に戻って英語教育に携わっている元留学生を対象に、ライフストーリー・インタビューを行った。2名の語りから、人生における留学の意義、留学生活における日本語の学習と使用、現在の生活との関連に焦点をあてて、分析を行った結果、以下のことが明らかになった。2人に共通している点として、1) 日本への最初の興味はゲームやアニメなどのコンテンツがきっかけであった、2) 日本留学中は日本語能力の高い留学生が多くいるため、日本語に対し一種の劣等感を抱いていた、3) 日本語に自信を持つようになったきっかけは家庭教師や部活動などの授業外での交流であった、4) 英語教育者として、生徒たちに留学経験のすばらしさを伝えたいと考えている、5) 日本語を身に着けたことで積極的に職場や地域等の日本人コミュニティとの交流を行っており、良好な人間関係を築いている。交換留学を終え、帰国した学生が再び日本に戻って就職するケースも増えている。彼らの声に耳を傾け、長期的な視野に立って、短期留学生に対するどのような日本語教育や留学生支援が効果的か検討が必要である。

【キーワード】 ライフストーリー、元留学生、留学評価、日本語学習、交換留学生

### 1. はじめに

近年、日本語教育の分野でライフストーリー研究が注目されている。日本語学習者の学習動機や学習環境など学習者を取り巻く状況が多様化する中で、日本語授業という時間的にも空間的にも限られた事象に留まることなく、言語を学ぶとはどのようなことか学習者の語りから、より包括的に

---

\*茨城大学全学教育機構 (〒310-8512 水戸市文京 2-1-1; Institute for Liberal Arts Education, Ibaraki University, 2-1-1 Bunkyo Mito-shi 310-8512 Japan)

明らかにしていこうという試みがなされている。三代 (2015; 1) は日本語教育学としてのライフストーリー研究の意義を「人は、社会・文化の中でどのように日本語を学んでいるのか。日本語を学ぶことは、人にとってどのような意味があるのか」を探求することであると述べている。また、河路 (2014; 39) は「彼らの語りをきくことは、人が新しい言語を学ぶことの意味を考える手立てにもなる。言語教育の果たす役割や教師の仕事の意味を確認することもできる」とその意義を述べている。さらに、川上 (2014) は日本語教育におけるライフストーリー研究に関して、それぞれの語りから何を感じとるか、さらには日本語教育へどのように還元していけるのかという視点が重要であると指摘している。

日本語教育におけるライフストーリー研究としては、教師に対する研究と学習者に対する研究の両方が行われている。韓国人留学生のライフストーリーから、コミュニティ形成過程と日本語の学びを分析した研究 (三好 2009)、学部留学生を対象に、自分らしさや職業選択などのアイデンティティに関わる問題と日本語習得との関連性を分析した研究 (中山 2007、2011)、日本で学位を取得し、日本で働いたり、帰国後に研究者となったりしている元留学生に関する研究 (池田・八若 2016、池田・八若 2017、池田 2018) など多様な元留学生を対象としている。これらの多くの研究は日本の大学で学位を取得した元留学生を対象にしている。しかし、近年、数週間から1年未満の短期留学プログラムが増えており、日本で学ぶ留学生の多くが学位取得を目的としない短期の留学生である。短期留学生にとって、留学がどのような意義を持つのか、どのように自身の留学経験を振り返り、評価するのか、プログラム改善のためにも短期留学生の声にも耳を傾ける必要がある。

本研究では、日本の地方大学で交換留学生として約1年間過ごし、母国の大学を卒業した後に日本に戻り英語教育に携わる北米出身の元交換留学生を対象にライフストーリー・インタビューを行い、その語りの中から、人生における留学の意義、留学生活における日本語学習と使用、留学終了後の日本語及び日本との関係を中心に検証する。

## 2. 研究方法

2017年7月に、日本で英語教育関連の仕事に就いている北米出身の元留学生2名にライフストーリー・インタビューを行った。インタビューを依頼する前に、「留学する前から現在に至るまでの生活やその時に考えていたことについて話していただきたい」という大まかなインタビューの内容を伝えておき、協力者の了解を得て、ICレコーダーにインタビュー内容を録音し、それを文字化した。インタビューで語られた内容から、主に1) 人生における留学の意義、2) 留学生活における日本語の学習と使用環境、3) 留学後の日本語及び日本との関係、の3点に関わる内容を中心に抽出し、時系列にまとめた。インタビューはほぼすべて日本語で行われたが、一部英語になる場面があった。英語の発話は筆者が日本語に訳して掲載した。協力者の言葉を極力そのまま伝えるため、会話形式と引用を交えた要約の形式とを併用した。読みやすくするために、助詞等の明らかな間違いは一部修正を加えた。協力者が日本語で回答している場合は、普通の字体で、筆者が翻訳した内容はイタリック体で示した。また、個人や場所が特定されるような固有名詞は一般名詞や記号に変更した。

## 3. 語りと考察

### 3.1.1. インタビュー協力者 A さんの略歴

協力者の A さん (男性) は北米出身で、約5年まえに来日し、交換留学生として約1年間日本

の X 大学で日本語等を学ぶ。交換留学終了後に帰国し母国の所属大学を卒業する。卒業後しばらくして交換留学生として住んだ Y 町に戻り、英語講師として民間の英会話学校に勤めている。

### 3.1.2. インタビュー協力者 A さんの語り

#### 《留学以前》

A さんが日本に興味を持ち始めたきっかけはゲームだった。中高生のころ、最初は日本のゲームであることを知らずに、ただゲームをしていたが、そのゲームを日本の会社が作っていることを知り、次第に日本を意識し始めたという。「どこの会社だろう、もっと同じ会社のゲームがやりたい、日本だって気がついて、じゃあ日本のゲームが好きなんだって気がついた。最初はゲーム、それで日本に繋がって、・・・日本に興味があるかもしれない、それで日本のことを調べて、面白いねって、僕にとって日本と僕の国は結構違うから面白い。」次第にゲームからアニメにも興味が広がってくる。「高校の時ぐらいアニメとか見始めて字幕と吹き替えどっちが好きっていう話になって、やっぱりみんな字幕。日本の声優さんがすごくて日本人はそんなに思っていないけど、声もありますけど言語的に全く違うから、これかっこいいね」と述べており、意味は分からないが字幕のアニメを見るようになり、全く未知の言語である日本語への興味を持つようになる。

\* 高校の時は日本語を勉強しようとはまでは思わなかったんですか。

A：そうですね。高校でスペイン語を2年間勉強して、大学1年生の時に何の授業をとるかっていう話になって、やっぱりスペイン語を続けたかったけど、(履修者が) いっぱいで、それで前から興味があったから日本語ちょっと面白そうだなと思って。

\*：もしもスペイン語のクラスに入っていたら日本語は勉強してなかったんですね。

A：そう。それほんと毎日思ってた。その前に他の大学に行きたかった。音楽の。でもそれはちょっとお金がかかりすぎて、そっちは行けなかった。それがあってこの大学があって、スペイン語に入れなくて、日本語を学んだって言う。面白いのは日本語を勉強したから留学できて、また音楽と繋がりができたから、もう本当に。

\*：大学で日本語を勉強したのは授業で勉強しただけですか。

A：そう。でも勉強としてみてなかったかな。そんなに好きだった。勉強というより趣味として勉強した。自分で面白くて。最初は「あいうえお」をこの週が終わったらこれ覚えてくださいって言われたけど、好きで、1日でこれはいけるかなって予習しようって思って気が付いたらもう半分ぐらい終わって。それを毎日一生懸命書きの練習をやって。

\*：何が面白かったんですか。

A：違うから。友達に見せたら全くわからないからそれが面白い。他の人に見せてこれわかる？そしたらわかんない、そして教えてあげる。なんだろうね、そういう面白さを伝えたかったから、先生っていう仕事に興味を持ち始めたかな。新しい情報を伝えるのが面白いって気がついて。それから T 先生(母国の大学の日本語教員)の影響を受けて、T 先生は日本語の先生だけじゃなくて、先生として結構学びました。

出身大学の日本語の教員からも影響を受けたという。また大学間の交流として日本の大学生と英語と日本語を用いた交流を行っており、「趣味とか家族とか音楽とかゲームが好きとか・・・そういう話がありました。で友達になって。友達に会いたい、日本語が使える、そして日本に行ける、いろんなポイントがあって、それで(日本に)行きたかった」と徐々に日本へ行くことに興味を持ったと話している。その教員らが中心となって行っている3週間の日本研修に参加し、地方都市に1

週間滞在し、東京に2週間滞在する。3週間の研修で、一人で電車に乗ったり、日本人学生と交流したりしたことで、日本で生活する自信がついたという。帰国後、留学アドバイザーや日本語教員の支援を受けながら、交換留学に向けた準備を整え、翌年1年間の交換留学生として日本の大学で学ぶ。

### 《留学中の日本語習得》

来日直後は日本語が上手な留学生も多く、また交流のある日本人学生は英語や海外に興味がある学生が中心だったため、日本語によるコミュニケーションに自信を持てなかったという。

\*：日本に来て、最初はどうか。

A：日本語を聞くのはできたけど話すのはまだまだ自信がなくて、最初の3ヶ月ぐらいは日本語を聞いて英語で話すという感じでした。

\*：サークルは入っていましたか。

A：国際交流サークル。楽しかった。楽しかったけど、やっぱり日本語を使わなくていいよって言われたから。日本人の学生が英語を学びたいとか留学生を困らせないためだったようなサークルだったから、話さなきゃっていう気持ちはなかった。

日本人学生との交流では、日本語を話す機会はさほど多くなかったようである。しかし、アジアからの留学生との交流でよく日本語を話したという。「他の留学生に手伝ってもらって、それで他の留学生だと英語は通じない、共通は日本語だから日本人じゃなくても簡単な日本語をお互いに使って、それで自信がついた。相手も頑張って日本語を勉強してるからお互いに頑張ろうっていう感じがよかった。」大学の国際寮には様々な国の学生が住んでおり、お互いに助け合って交流を深めている。英語圏からの留学生が少なく、共通の言語が日本語であったことがよかったようである。

Aさんの生活や人間関係が大きく変わるのが2学期目に吹奏楽部に入部してからである。Aさんは10月に来日し、1学期目の留学を終えた4月に部活動やサークル活動に新入生を勧誘するイベントがあり、そこでAさんは以前から興味があった吹奏楽部に入部することを決める。

A：吹奏楽部の人に会って、それで勇気を持って、楽器がないんですけどって言って。・・・それで日本人の友達とここにちょっと行きたいんですけどと言ったらじゃあ一緒に行こうって。行ったらやっぱり音楽は言語みたいなものだからこれでいけるかなって思って。それで一緒にやっている人が留学生に興味がないと言うか音楽のために来ているから、それで英語できないから日本語をもっと勉強してもっと伸びて。

最初は練習だけの参加だったが、演奏会や最終的にはコンクールにも参加し、交友関係も吹奏楽部中心となる。

\*：吹奏楽部に入って変わった？

A：やっぱり個人として本当に日本語が上手になりたいならサークルに入った方がいい。普通の日本人って言ったらおかしいけど、外国に興味がない日本人と友達ができたら、それが本当に大切。

\*：外国人一人だったのに、部活動を続けられたのはどうしてですか。

A：音楽に興味があって。最初は音楽の専攻やりたかったけどできなかったから。3年間吹奏楽をずっとやらなくて。日本に来て吹奏楽できるんだって。アメリカだと本当に音楽の専門じゃないと入れない・・・たぶん音楽教室に入れない。専門の人だけ。それで音楽が好きだったから、でも3年間ずっとやらなくて忘れちゃったやつを練習したいっていう気持ち

ちが日本語と同じぐらいあったから。以前の友達との時間が少なくなったかなって。日本語の勉強してるか音楽の練習してる。

吹奏楽部入部後は授業以外は吹奏楽部の仲間と過ごすことが多くなる。Aさんは、先輩後輩の上下関係のあるサークル内で、新入生ではあるが、実際の学年は上という複雑な位置であった。先輩には敬語を用いたり、年齢的には下の学生と同期生として遊びに行ったり、日本的な人間関係を客観的に観察しつつ、サークルコミュニティの中で交友を深めていたようである。

### 《留学後の生活》

9月に帰国し、その年の12月に卒業するが、その間母国の大学で日本語の授業の手伝いや日本人留学生のサポートなど積極的に日本語を用いて日本との関りを継続している。卒業後、母校の日本語教員の紹介で日本人の駐在家族の子供に英語を教える機会を得る。英語を教えることに関しては、日本留学中から興味があり、英語教育に関する授業を履修するなど、将来のキャリアとして考慮にいれていた。ただ、日本での英語教師は児童生徒を対象とすることが多いため、子供に対する教育に関しては、当初自信がなかったという。しかし、駐在家庭の子供に教える経験を経て「これ楽しい。やっぱり子供は好きかな」と思えるようになったという。日本での就職に関しては以下のように回答している。

\*：いつ日本で就職しようと思ったんですか。

A：留学の最後の半年で英語教育の授業を二つぐらいとって、それでいろんな大学の先生と繋がりができて、・・・それで楽しかったから、その時は英語の先生はどうかと思って。だんだん興味があがってきて。それで英語の先生になろうかなって。

\*：就職活動はどうしたんですか。

A：ウェブサイトがあって、そのサイトは半分以上英語の先生だけど、いろんな仕事もある・・・応募して面接に来てくださいと言われてたけど、〇〇県（留学していた県）のほうに就職したい、それで1個、2個ぐらい見つかって、今の会社。

現在は交換留学していたY市にある英会話学校で幼児から中学生を対象に英語を教えている。Y市での就職を希望したのは吹奏楽部の仲間がいるためである。日本に戻って、大学の吹奏楽部には所属できないが、地域の吹奏楽団に入り、演奏活動を続けている。職場で中学生と話す際も、吹奏楽の話題が役に立っているという。「中学校だとみんな部活に入るから、吹奏楽やってる人と結構話が合って。一人の生徒がフルートをやりはじめたけど、お母さんも吹奏楽団入っていて僕の演奏を聞きに来てくれて。中学生から見るとその共通点があるから話しやすい。他の先生は先生だけど僕は話せる大人。」中学生との共通の話題があり、その保護者とも音楽を通じて交流があり、良好な関係を築けている。その一方で、「自分が勇気を出さないと友達を作れないっていう感じ、日本に住むと・・・本当に仕事行って帰る。吹奏楽の仲間がないと多分無理かもしれない」と社会人になってから友人を作る難しさも感じている。

### 《日本留学を振り返って》

日本での勉強、生活、人間関係などに関して振り返ってもらった。

\*：振り返って日本留学の経験はどうでしたか。

A：よかった。自分で払うのが問題だったから親に助けてもらったけど、親のおかげでと言うかX大学のおかげで幸せっていう感じ。多分国でこういう生活はできない。こういう仕事は簡単に見つからない。他の大学に行ったらこういう友達は多分作れなくて、日本語も伸びてなくて、それでアメリカに帰って同じ年の人と同じぐらいに、大学卒業したのにバ

イトを二つ三つぐらいして。本当にやりたいことができるってそれが一番いいかな。X大に来てからいろんな繋がりが出て、それに日本語も自然と上がって、やりたいことに気づいて、それでまた戻ってきて、できるって言うのは珍しくて、びっくりした。

\*：やればよかったことは？

A：やっぱりもっと早く吹奏楽をやればよかったかなって思う。半年だけでそんなにできるなら1年間どんだけできるかって。

\*：留学で印象に残っているエピソードは？

A：サークルに入って、全く外国に興味ない人に興味を持たせるって言うのが。今の中学生でも何で英語学ばないとといけないのって。いつも言われたら地図を見せて、これ日本でしょ、これ日本以外だよ、どちらの方が大きいって。やっぱり外国に興味ができるって言う影響ができたら本当によかった。日本人と話して、その留学生がこんなに上達できるんだって思ったら、じゃあ自分もどっか行ったらこんなにできるかもしれない。そうなったらそれがいいかな。

### 3.1.3. Aさんの語りに関する考察

Aさんが最初に接した「日本」はゲームであった。最初は日本製であることを知らず、ゲームそのものに興味を持ち、どこの会社の製品か調べて、たどり着いた先が日本であったが、次第に日本のゲームはアメリカのゲームと様々な点で異なることに気づき、「日本のゲーム」として意識するようになる。その対象はアニメにも広がり、アニメ声優の話す未知の言語である日本語に触れる機会が多くなる。しかし、中学高校の時代はゲームやアニメの分野に限られた興味であったといえよう。Aさんが大学で日本語を履修したのは、希望のスペイン語クラスに入れず仕方なく選んだためである。しかし、単なる偶然ではなく、その他の選択肢の中から日本語を選んだのは、中高生の時の日本のアニメやゲームへの興味が影響している。逆の見方をすれば、大学で日本語授業が開講されていなければ、日本への興味はアニメやゲームに限定されたもので終わっていたのかもしれない。大学等で本格的に日本語を学ぶ機会があることがアニメやゲームへの興味を日本語への興味に転嫁する上で重要な要素となっている。

大学で日本語を学び始め、「趣味として勉強した」と言うほど日本語学習に没頭する。日本語担当の大学教員との出会いから、最初のステップとして3週間の研修に参加するが、最初は行く気がなかったという。教員に声を掛けられ、友人が参加することが分かり、短期であればと行くことを決意する。結果的には3週間での経験が日本で生活することへの自信に繋がり、長期の交換留学へ進むこととなる。さらに、協定大学との学生交流も日本を身近に感じるきっかけとなっている。いきなり長期の留学を不安に思う学生にとっては大学の仲間と参加できる短期研修は最初のステップとして有効であると言えよう。

日本における留学生活は最初から順風満帆だったわけではない。日本語で話しかけられても英語で答えたり、日本語能力の高い他の国からの留学生と自身を比較したり、英語を話す留学生としての居場所は見つけられたものの、同時に物足りなさも感じていた。2学期目に入り、大学の吹奏楽部に入ったことが大きな転機となる。部活動では、日本人学生と音楽が好きな仲間としての交友関係が広がり、日常的な使用言語も日本語になる。日本人学生が英語を話さないことも、Aさんがもっと日本語を勉強したいと思う動機付けになっており、日本語も上達していく。

Aさんが留学を振り返る中で、その当時の小さな選択や出会いが現在につながっていると実感し

ている。もしスペイン語の授業には入れていたら、今の生活はなかったし、先生との出会いがなければ日本にも来ていないだろうとよく考えるという。大学選択の際、音楽を勉強することを諦めたが、結果的には日本に来て音楽活動を再開することができた。吹奏楽部や留学時代の仲間との交流は現在も続いており、英語教師として同じ町で働く今の生活の重要な部分を占めているという。また Aさんは留学中に英語教育の授業も履修するなど、異なる言語や文化を学ぶ立場から今度は教える立場に立って自身の留学経験を生徒たちに伝えようとしている。

### 3.2.1. インタビュー協力者 Bさんの略歴

協力者の Bさん（男性）も Aさんと同様に北米出身で、交換留学生として約4年まえに来日し、約一年間日本の X大学で日本語等を学び、その後帰国し所属大学を卒業する。卒業後しばらくして交換留学生として住んだ Y市に戻り、英語指導助詞として公立の小学校と中学校に勤務している。

### 3.2.2. インタビュー協力者 Bさんの語り

#### 《留学以前》

Bさんが日本に漠然とした興味を持ったきっかけは日本のアニメだったという。子供のころドラゴンボールなどの日本のアニメを見て、日本アニメが好きになり、その興味は高校時代も変わらず日本文化や日本へと関心が広がっていった。

\*：たくさんの子供たちが日本のアニメを知っていますか。

B：ドラゴンボールとかセーラームーンとか私の歳だとみんな知っています。

\*：どうして日本に行きたいと思ったんですか。アニメが好きな人がみんな日本に行きたいと思うわけではないですよね。

B：たぶん高校生の時（ほかの人は）他の興味がある。でも私いつもずっと好きだったから日本の文化とか。日本に行きたいと思った。本当の理由は多分分からない。私のおじいさん日本に来たから。戦争とビジネスで。

Bさんの祖父の一人は戦争で日本にいいイメージを持っていなかったが、もう一人の祖父が90年代にビジネスで日本に来日して、Bさんが13歳のころ、その祖父から「日本はきれいで、面白い建物とかある、行ってください。経験してください」と言われたという。アニメだけでなく祖父からのそう言った言葉も影響しているかもしれないと述べている。日本への興味はあったが、日本語を勉強し始めたのは大学に入ってからだった。大学で日本語のクラスを受講する前に独学で学び始めたという。

\*：どうやって勉強したんですか。

B：インターネットで日本語の教科書を買って自分で勉強して。インターネットで話して勉強しました。会話パートナー。その時にたくさん時間があったから毎日3時間ぐらい勉強した。ひらがなとカタカナ自分で勉強した。

\*：どうして自分で勉強しようと思ったんですか。

B：その時私の生活新しい趣味が欲しかったから。日本語面白かったから私勉強してみたい。だから自分で勉強した。その時にまだアニメを見ていたから、いつも日本語を聞いていたから。あまりわからない、でも勉強みたい。だから勉強した。あとは自分で勉強したら、楽しいです。

アニメで日本語を聞いている延長線上に日本語の語学学習があり、インターネット等を利用しながら独学で学び始める。その後大学でも日本語の授業を履修し、本格的な勉強を始める。子供のころからの日本に行きたいという想いと、周囲に日本語を話す相手がいないため、日本に行って日本語を勉強したいという両方の想いから交換留学を決める。

### 《留学中の生活と日本語学習》

Bさんは日本での協定校を選ぶ際に、大学の評判を聞き、また東京のような大都市でない地方大学への留学を希望し、X大学に留学を決める。

\*：留学する前に不安なことがありましたか。

B：ちょっと不安でした。でも留学した人を知ってる。その前にちょっと心配した。でも1か月後、5月は心配しなかった。みんな優しいから楽しかった。

\*：日本に来て、最初のころはどうでしたか。

B：4月は大変だった。例えばシティホールとか全然わからなかった。私なんですか？全然わからない。新しい友達まだいない。だからちょっと寂しい。でも4月の後で友達作ったからもっと楽しくなって、心配しなかった。

\*：4月に困ったことは何ですか。

B：たぶんお金とか料金。漢字読めないからどうしようその感じ。どこで払う。スーパーでこれは何ですか。多分初めてスーパーに行った時に塩を買いたかった。漢字が読めなかったから砂糖を買った。

来日当初は何が起きているか理解できず困ったことも多かったが、日本人や他の留学生の友達もできて、楽しくなったという。学生交流の場としては、国際寮が重要な社交の場になっていたようである、食事会やパーティーの場で他の国の留学生や日本人学生と友達になり、交流の輪が広がっていった。寮のことを「家族、ファミリー」と言い、良好なコミュニティが形成されていたようである。

留学中の日本語学習に関しては、自信が持てず積極的ではなかったと振り返っている。

\*：自分の日本語についてどう思っていましたか。

B：留学して私の友達ももっと日本語が上手だった。・・・授業であまり質問を聞かなかった。

よ：どうして聞かなかったんですか。

ベン：たぶん緊張して、心配したから。

\*：緊張したのはずっとですか。

B：それはずっとじゃなくて。上のレベルのクラスに入った時。初めての教科書だったから、難しかったから。緊張の気持ちがあった。

自分より日本語能力の高い学生と比較してしまい、授業で質問をしたり、日本語を話したりするときにも緊張していたようである。結局1年間の留学を通して、自身の日本語に自信を持つことはなかったという。

### 《留学後の生活》

日本での留学を終えて、数か月後に母国の大学を卒業する。その後はAさんと同様に日本人駐在員の子供に英語を教えるアルバイトを約1年間行う。ほぼ毎日日本人家庭を訪問し、子供に英語を教え、お母さんとは日本語で会話をしたという。帰国してから、日本人と話す機会を得たことがBさんにとっては重要な転機となる。

\*：国に帰ってから、もっと日本語を使ったんですか。

B：そうね、漢字書けない。でも話すのはもっと上手になった。まだ読めるもちろん。でも書くのはへた。

\*：日本語を話す自信がつかえましたか。それはいつですか。

B：去年。家族とたくさん話したから。日本人の家族は優しいから「頑張って頑張って」。

Bさんは自身の性格を「静かな性格で、みんなとあまり話さない」と考えており、日本語を流暢に話す留学生が多数いる日本の環境よりも、アメリカで日本語話者が少なく、日本人家族と個人的にじっくり話す機会が持てたことが日本語を話す自信につながったという。

母国に帰って数カ月は、日本に戻ってきたい思いが強く、「ずっと悲しかった」という。「日本語大好きになったから、ここ（Y市）はホームタウンだから、たくさん友達がいるから好き。その生活は大好きだから」とその時の気持ちを述べている。そして、留学時代の友人から都道府県単位で採用している英語指導助手のを知り、応募する。希望通り、かつて交換留学生として学んだY市で英語指導助手の仕事を得ることができ、現在も充実した日々を送っている。

\*：今の生活は楽しそうですね。子供たちはかわいい？

B：かわいい。子供のことを気に掛けるようになってきた。みんな知っているから。顔を覚えているから。（子供たちの）未来も気になる。

\*：中学生はどうですか？難しくない？

B：生徒は優しい。本当に優しい学校。いい学校。3クラスある。たぶん生徒は300人ぐらい。あんまり大きくない、いいサイズ。みんな顔を知ってる。

\*：日本で働いて日本語はどうですか。

B：私は生徒とあまり日本語を話さない。英語の先生だから。日本人の先生は日本語で話します。そして私の校長先生と教頭先生は関係いいです。教頭先生と校長先生は英語を話さないから、私はいつも日本語。例えば毎朝、学校の前で挨拶。私は英語を話す。でも生徒がいない時に一緒に日本語で話します。

日本語が話せることにより、生徒だけでなく、英語を話さない教員とも円滑なコミュニケーションが取れている。校長先生等と部活動の応援に行ったり、活動に参加したり、通常は英語指導助手が参加しない学校行事等にも参加しているという。

### 《留学を振り返って》

現在から過去の留学経験を振り返ってどう考えるか聞いた。

B：本当によかった。私ラッキー。留学したから、たくさんチャンスがみつかりました。交換留学生だったことは私の人生で最良の選択だったと思う。

\*：やってよかったことは何ですか。

B：留学。交換留学生だったから、たくさんの人に出会えた。

\*：仕事をするのに留学したことは役に立ちましたか。

B：そうです。留学経験はすごく役に立った。今中学生とかに、大学入った時に留学はいいです（と伝えている）。私が中学生の時にそのアドバイスはなかった。他の国に行くイメージはなかった。

\*：それって大事ですね。中学の時に先生に留学したほうがいいよって言われたら、チャンスがあったら考えると思います。

B：今から若い人に会った時に、大学生例えば、「留学して」「留学いい経験です」「絶対に」

どこでも。おすすめは日本。日本人だったら、アメリカとかヨーロッパとかオーストラリアとか。

自分の留学経験を中学生に伝えて、生徒が大学生になったときに留学していい経験をしてほしいと折に触れて伝えている。また、Bさんが勤務する小学校や中学校には、Bさんが交換留学生として学んだ大学から学生がボランティア等で来ることも多く、そこからも人間関係が広がっている。

### 3.2.3. Bさんの語りに関する考察

Bさんが日本へ興味を持つようになったきっかけはアニメであった。子供の時、ドラゴンボールが人気で、他の多くの子供たち同様に、Bさんも興味を持つようになったという。中学や高校になり、アニメに関心を持たなくなる人も多い中で、Bさんはずっと興味を持ち続け、それは日本へ行きたいという強い気持ちになっていく。まず独学で日本語を学び、大学でも授業を取って勉強を始める。「趣味がほしかったから」と述べているように、強制されるのではなく、自分の意志で学ぶのは楽しかったという。現在は、インターネットなどで無料の日本語学習ビデオや教材アプリなども容易に入手できる時代である。Bさんも大学の授業で日本語を履修していたが、他方で、「趣味」のように学んでいた。学習者が授業以外にどのようなリソースを用いて学んでいるのか、授業外の学びの可能性について知ることも必要であろう。

Bさんにとって初めての一人暮らしが日本での留生活だった。母国の大学では両親と住んでおり、いわゆるキャンパスライフをあまり経験していなかったが、日本で寮に住み、日本人や留学生仲間など、多くの友人を作ることができた。しかし、最初は自分の日本語に自信が持てずあまり積極的に日本語を話さなかったという。Bさんは自身の性格がシャイで、緊張したからと述べている。1年の留学で日本語は上達したものの、他の留学生と比較してしまい、結局自分の日本語に自信を持てるようにはならなかったという。

Bさんが日本語話者としての居場所を見つけたのは帰国後の日本人駐在の家庭であった。Bさんは子供たちの英語の先生として、そして数少ない日本語話者として、家庭内で頼りにされ、さらに家族がBさんの日本語を常に褒めてくれたことで話す自信をつけていく。シャイな性格のため緊張して日本語がなかなか話せないという経験があるBさんだからこそ、北米で苦勞している子供たちの気持ちに寄り添うこともできたのだろう。この経験はBさんにとって重要な経験となる。

英語指導助手として日本に戻ってからも、英語で話すことが恥ずかしいと思う児童・生徒たちの気持ちをよく理解したうえで、英語で話すことが楽しくなるようにゲームなども積極的に取り入れながら教えているという。また、中学生には、これからの人生の中で留学という選択肢もあることを自分の経験を踏まえて説得力を持って伝えている。英語指導助手として児童・生徒には英語を話す一方で、職場では日本語でコミュニケーションを取り、他の教職員とも円満な人間関係を構築できている。BさんにとってY市は「ホームタウン」になっている。

## 4. 考察と今後の課題

2人に共通する点としては、子供から高校時代にかけてゲームやアニメなどの日本のポップカルチャーに関心を持ったことが挙げられる。近藤・村中(2011)がポップカルチャーへの関心と日本語学習動機に関する関連を指摘するように、彼らもゲームやアニメをきっかけに日本に興味を持ち、次第にアニメキャラクターの話す日本語自体にも興味を持つようになっていく。しかしなが

ら、実際に日本語学習を始めたのは、大学に入ってからであった。Aさんは大学の日本語担当教員の薦めで3週間の短期研修に参加して、X大学を知り、長期の交換留学への参加を決める。また、BさんはX大学留学経験者の上級学生から情報を得ることで、特に不安もなく留学を決めることができたという。継続的な学生交流や最初のステップとしての短期留学が交換留学を決める重要な要素となっていることがわかる。

日本留学中は日本人学生だけでなく、他の国から来た留学生とも盛んに交流している。留学先で多様な国籍や文化背景を持つ友人が作れたことに意義を感じながらも、日本語能力の高い留学生や日本語を専攻として学んでいる学生などと自身を比較して、日本語を話すことに自信が持てなかったとも述べている。これはAさん、Bさん両方に共通していた。交換留学プログラムでは、学習歴や母語の異なる多様な学習者が同じプログラムで学んでいる。日本語のレベルや母語の影響等による習得速度に差があることは当然であり、あまり問題視してこなかったが、学習者が抱くそういった感情にも配慮が必要であることが分かった。友人関係では、外国に興味があり英語を話したいと考える日本人学生と交友関係が広がっている。多くの友人ができてよかったと考える半面、外国人だからではなく、共通の趣味でつながれる友人ができたことに満足感を覚えている。Aさんは吹奏楽部の仲間と自然に日本語で会話するようになり、日本語に自信が持てるようになり、Bさんは母国での家庭教師を通じて自信が持てるようになったと述べている。どちらの場合も、他の日本語学習者と比較することなく、日本語コミュニティの中で必要とされる居場所を見つけているといえよう。留学生にとってコミュニティへの参加が非常に重要な役割を果たしているという報告がされているが(三好2009、池田・八若2017)今回の調査でもコミュニティ参加の重要性が再確認された。

2人は帰国後日本人家族の子供に英語を教えるアルバイトをする。Aさんは留学中も英語教育関連の授業を履修するなど、キャリアとして英語教育を考えていたようである。Bさんは日本に戻りたいという強い想いがあり、日本での就職の可能性を模索する中で、アルバイトを通じて英語教育に興味を持つ。2人ともY市に戻り、Aさんは民間の英語教師として、Bさんは公立小学校・中学校の英語指導助手として活躍している。2人は英語を教えるだけでなく、留学経験者として、外国語を学び異文化で生活することがどのような学びをもたらしてくれるか、そして人生においてどのような意義があるか生徒たちに伝えようとしている。それは彼らにとっても留学の意義を再確認する重要な機会となっている。Bさんが留学を「私の人生で最良の選択」というように、生徒たちにも留学という選択肢があることを示し、未知の世界があること伝えようとしている。

ライフストーリー研究において、日本語が話せることが日本人との交流に重要な役割を果たしていることが報告されているが(池田・八若2016, 2017、佐藤2013、中山2011、三代2009)、2人も日本語によるコミュニケーションが図れており、職場や職場以外の日本人と良好な交友関係を築いている。交換留学の時と同じY市に戻って働いているため、学生時代に築いた人間関係や、特にAさんは音楽を通じたコミュニティで文字通り言葉を超えた付き合いができており、日本の生活における満足度は高い。その一方で、社会人になってから新たな友人ができにくいことに対し、母国の友人付き合いとの違いも感じている。学生として、現在は社会人として日本のコミュニティで生活していく中で、日本語能力に関する自己評価や人間関係も変化している。交換留学生として留学した時は、当然のことながら、日本語能力もさほど高くなく、自身の日本語能力に対する自己評価も高くなかった、しかしそれぞれ日本人コミュニティの中で必要とされる居場所を見つけ、それに伴い日本語にも自信が持てるようになり、十分なコミュニケーションがとれるまでに日本語も上達している。元留学生が教室外の多様な日本語コミュニティの中でどのように成長し、それがど

のような自己実現へとつながっているか留学生の総合的支援の立場から今後も検証していきたい。

## 付記

本研究の一部は日本学術振興会学術研究助成基金助成金基盤研究 (C) (課題番号 17K02839, 研究代表者: 八若壽美子) の助成を受けて行われた。

## 引用文献

- 池田庸子 (2018) 「元留学生のライフストーリーに見る留学評価—研究者夫婦の場合」『茨城大学全学教育機構論集グローバル教育研究』1, 45-55.
- 池田庸子・八若壽美子 (2017) 「元留学生のライフストーリーに見る留学評価—出身国の大学教員の場合」『茨城大学留学生センター紀要』15, 13-28.
- 池田庸子・八若壽美子 (2016) 「日本で働く元留学生のライフストーリーに見る留学評価」『茨城大学留学生センター紀要』14, 49-66.
- 川上郁雄 (2014) 「あなたはライフストーリーで何を語るのか—日本語教育におけるライフストーリー研究の意味」『リテラシー』14, 11-27.
- 河路由佳 (2014) 「学習者・教師の〈語り〉を聞くということ」『リテラシー』14, 29-44.
- 近藤裕美子・村中雅子 (2010) 「日本のポップカルチャー・ファンは潜在的日本語学習者といえるか」『国際交流基金日本語教育紀要』6, 7-21.
- 佐藤正則 (2013) 「留学経験の意味と自己実現についての考察—元留学生のライフストーリーから」『早稲田大学日本語教育研究センター言語文化教育研究会』11, 3018-327.
- 三代順平 (2009) 「コミュニティへの参加の実感という日本語の学び—韓国人留学生のライフストーリー調査から」『早稲田日本語教育学』6, 1-14.
- 三代順平 (2015) 「日本語教育学としてのライフストーリーを問う」『日本語教育学としてのライフストーリー』くろしお出版, 1-22.
- 中山亜紀子 (2007) 「韓国人留学生のライフストーリーから見た日本人学生との社会的ネットワークの特徴: 『自分らしさ』という視点から」『阪大日本語研究』19, 97-127.
- 中山亜紀子 (2011) 「学部留学生対象の日本語教育を考える—中国人男子学生のライフストーリーを通して」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』3, 78-85.

# 東南アジア出身留学生は日本のサブカルチャーを通して 日本をどう捉えているか

石鍋 浩\*・安 龍洙\*\*  
(2018年10月1日受理)

## How Do the International Students from South-East Asian Countries Understand Japan through the Japanese Subculture?

Hiroshi ISHINABE\*, Yong Su AN\*\*  
(Received October 1, 2018)

### 要旨

日本のサブカルチャーは、学習者の日本語学習動機の一つである。一方、留学生が日本のサブカルチャーを通して日本をどのように見ているかは不明な点が多い。PAC分析を用いて検討した結果、東南アジア出身留学生はサブカルチャーをアニメ・マンガに代表される若者文化からだけではなく、伝統文化や日常の習慣までを含めた広い視野から捉えている傾向が示された。「外国人がサブカルチャーを特異なジャンルとして捉えている」とする「日本人の留学生に対する理解」が一部異なる可能性が示された。

【キーワード】 東南アジア出身留学生、サブカルチャー、PAC分析、対日観

### 1. 背景と目的

留学生30万人計画（文部科学省ほか2008）を契機に、日本国内においても文化背景の異なる人たちの交流が盛んになりつつある。異文化間交流の基盤となる外国人の対日観および日本人の外国観については、PAC（Personal Attitude Construction）分析（内藤1997）を用いて質的に検討が行われてきており、いくつかの特徴が示されている（安2009、安2010a、安2010b、安2011、安・池田2012、安2012）。

サブカルチャーはもともと社会学の用語として使われ始めたが、現代日本においては「オーセンティックなハイ・カルチャーや広く一般大衆を対象とするマス・カルチャーとは一線を画した、あ

---

\*東大阪大学短期大学部介護福祉学科（〒577-0044 大阪府東大阪市西堤学園町3-1-1; Department of Social Care, Higashiosaka Junior College, 577-0044 Nishizutsumi-gakuencho 3-1-1 Higashiosaka-shi Osaka Japan)

\*\*茨城大学全学教育機構（〒310-8512 水戸市文京2-1-1; Institute for Liberal Arts Education, Ibaraki University, 2-1-1 Bunkyo Mito-shi 310-8512 Japan)

る特定の若者向けの作品、コンテンツ]「クラシック音楽や純文学、ファイン・アートなどの正統文化・高級文化以外のものすなわち大衆文化の同義」として用いられることが多い(難波 2006)。

難波(2006)に従うと、現代日本においてアニメ・マンガもサブカルチャーの一種として捉えることができる。アニメ・マンガを中心とした日本の若者文化は世界中の広い地域で受け入れられ、日本語学習の極めて強い動機となっている(熊野 2010)。国際交流基金など公的機関も日本を世界に発信するコンテンツと位置づけ、アニメ・マンガによる交流を促進している(国際交流基金 2007)。アニメ・マンガなどの日本のサブカルチャーは、学習者の日本語学習を始める大きな要因の一つであり、調査時期や地域などを問わず類似した傾向が繰り返し認められ、日本のサブカルチャーが学習者の日本語学習動機付けや自律的学習にポジティブな影響を与えていることが示されている(熊野 2010)。

その一方、学習者が日本のサブカルチャーを通して日本をどのように見ているかについての検討は多くない。今後、「外国人」と「日本人」の異文化相互理解の重要性が高まることが予測される中、学習者がどのように日本を見ているか認知的・情意的な観点から検討し「外国人」と「日本人」の相互理解と相互交流の課題と問題点を明らかにしていく必要がある。本研究では、東南アジア出身(マレーシア、インドネシア、タイ)留学生6名を対象にPAC分析を用い、日本のサブカルチャーを通し、彼らが日本をどのように見ているかを明らかにすることを目的とした。

## 2. 方法

日本国内の大学で学ぶ東南アジア出身(マレーシア、インドネシア、タイ)留学生6名を対象(対象A～対象F)に、PAC分析を実施した。PAC分析は多変量解析を取り入れ、少数事例の詳細で客観的な分析が可能である(内藤 1997)。連想刺激の操作的手続きにより、対象の内面へのアプローチも可能であり、被験者自身の問題について気づきをもたらすこともできる(内藤 1997)。

本研究への協力に当たり、研究の目的、研究協力の任意性、匿名化によるプライバシーの保護、協力同意撤回の自由について文書および口頭で説明し同意を得た。対象が特定されることを回避するため、出身地域、性別、年齢等が推測される箇所は削除、伏せ字、あるいは記号とした。

本研究では、「日本の漫画やアニメ・ゲーム・テレビなどのサブカルチャー」「若者文化」の2つのキーワードをあらかじめ連想刺激として指定し、東南アジア出身留学生が、サブカルチャーを通して日本をどのように捉えているか質的に探るアプローチを採用した。

研究は第1部の質問紙調査と第2部の口頭調査から構成した。第1部の質問紙調査では、以下の刺激を与えイメージ項目を質問紙に記入するよう教示した。イメージ項目記入の際、連想刺激中の①日本の漫画やアニメ・ゲーム・テレビなどのサブカルチャー、②若者文化を含めてイメージ項目が10個以上になるよう教示した。

**【刺激文】** サブカルチャーとは、日常的に人々に親しまれている文化です。例えば、娯楽、スポーツ、芸能、ファッション、若者文化などを指します。茶道や歌舞伎などの伝統文化はサブカルチャーに含まれません。

あなたは「日本のサブカルチャー」に対してどのようなイメージを持っていますか。思い浮かんだイメージを「単語(例:花、綺麗、綺麗だ)、または短い文(例:花は綺麗だ、花は綺麗)」で記入してください。

対象が記入した連想イメージを重要と思われる順序に並べるよう教示した。次に、各順位のイメージ項目の組み合わせが、直感的イメージでその意味内容においてどの程度近いのか7段階尺度で評定するよう教示した。評定結果に対し対象ごと個別にクラスター分析（Ward法；HALBAU for Windows Ver. 6.24 使用）を実施した。その後、クラスター分析の結果に対する対象自身の解釈を求めた。最後に連想項目のイメージについて、プラスイメージの場合は(+)、マイナスイメージの場合は(-)、どちらともいえない場合は(0)を記入するよう教示した。①日本のサブカルチャー、②若者文化は著者が予め設けた項目のため、(+)(-)のイメージ評価はさせず、全て(0)として解釈するよう対象に教示した。

第2部の口頭調査において、(1)各クラスター及びクラスター全体の解釈、(2)各イメージ項目に対してそのイメージを抱くようになったきっかけについて尋ねた。口頭調査は、2018年7月から8月に第2著者が実施した。得られた結果に対し形成されたクラスターを中心に、次の2点について検討した。

- (1) サブカルチャーを通じた対日観は、留学生の出身地域により異なるか
- (2) サブカルチャーを通じ、留学生は日本社会をどのように見つめているか

### 3. 結果

#### 3.1. 対象 A(出身地 X)

図1は、対象Aのクラスター分析から得られたデンドログラムである。縦軸は連想項目順位、横軸は連想項目間の距離を示している。各連想項目の内容、連想項目イメージ(+)(-)(0)、各クラスターの解釈がデンドログラム内に示されている。表1は対象Aのクラスター番号と解釈、サブカルチャーイメージとイメージ形成のきっかけの一覧である。

対象Aは7個の連想イメージを3つのクラスターに分類した。クラスター1は連想項目順位1、3、4、7の4項目であった。クラスター2は連想項目順位5、6の2項目であった。クラスター3は2の1項目であった。

以下の斜体で示した箇所は図1を対象Aに提示しながらクラスター1についてインタビューを行った際のスクリプトである。スクリプト( )内はインタビューアの発言である。対象が特定されないように地名、国名、大学名、施設名などはすべて伏せ字にした。

クラスター1は、1. 日本のサブカルチャー(0)、3. 秋葉原はエンターテインメントの天国(+)、4. アニメや漫画の商品はみつきりやすい(+)、7. アニメは面白い(+)<sup>1)</sup>の4項目であった。インタビュー結果から、クラスター名を「アニメ・マンガ」とした。

「私は日本のサブカルチャーの中で、アニメが一番イメージが大きいです。そして、アニメは秋葉原とマンガです。どうして秋葉原かという、アニメに興味があるときに行く秋葉原とい

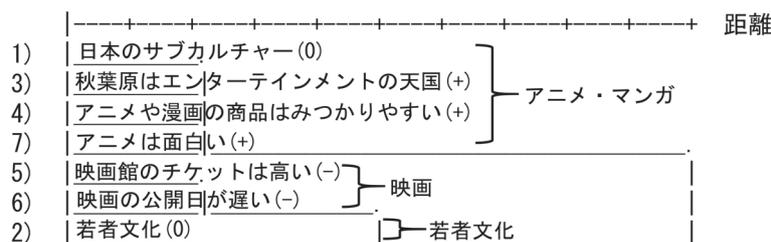


図1 対象Aのデンドログラム

表1 対象Aのクラスター名、サブカルチャーイメージとイメージ形成のきっかけ

クラスター番号 解釈	サブカルチャーイメージ (順位、項目、評価)	イメージ形成のきっかけ・媒体
1 アニメ・マンガ	1. 日本のサブカルチャー (0)	なし
	3. 秋葉原はエンターテインメントの天国 (0)	そこに行ったとき、エンターテインメントの店はとても多い
	4. アニメや漫画の商品はみつきやすい(+)	●●でもアニメや漫画を売っている店は多い
	7. アニメは面白い	テレビやネットで見て
2 映画	5. 映画館のチケットは高い (-)	映画館に行ったとき
	6. 映画の公開日が遅い (-)	公開日は間に合わない
3 若者文化	2. 若者文化 (0)	なし

う場所はとても面白いと思います。ですから私は日本にきてもう2回も秋葉原に行きました。それに●●でもアニメやマンガの商品は見つけやすいと思います。なぜなら私の出身の町ではアニメやマンガの商品が全くないからネットで買わなければなりません。マンガは大きな街にありますけど、アニメの商品は全くありません。そして、私はアニメが面白いですから、とても興味があります。(いつから興味があった?) 高校生のときからです。

クラスター2は、5. 映画館のチケットは高い(-)、6. 映画の公開日が遅い(-)、の2項目であった。インタビュー結果からクラスター名を「映画」とした。

日本に来るとき映画館に行くときは、その映画のチケットがとても高いと思います。なぜならそのときは1500円ぐらいです。私の国では普通は、ただ500円ぐらいですね。(3倍ぐらい高いですね) そうです。そして日本の映画の公開日は遅いと思います。なぜなら1カ月、2カ月ぐらい遅いと思います。(どのくらい遅い?) 1カ月はちょっと遅いと思いますね。例えば、この一つの映画は4月に公開します。でも日本では8月とか9月とかに公開します。

クラスター3は、2. 若者文化(0)の1項目であった。インタビュー結果から、クラスター名を「若者文化」とした。

「私はそんなに興味がありませんね。」

### 3.2. 対象Bの結果(出身地X)

図2は、対象Bのクラスター分析から得られたデンドログラムである。対象Bは11個の連想イメージを3つのクラスターに分類した。クラスター1は連想項目順位1、8、10の3項目であった。クラスター2は連想項目順位2、9、7、11の4項目であった。クラスター3は3、5、6、4の4項目であった。表2は、対象Bのクラスター番号と解釈、サブカルチャーイメージとイメージ形成のきっかけの一覧である。

以下の斜体で示した箇所は図2を対象Bに提示しながらクラスター1についてインタビューを行った際のスクリプトである。クラスター1は、1. 日本のサブカルチャー(0)、8. みんな、いそが

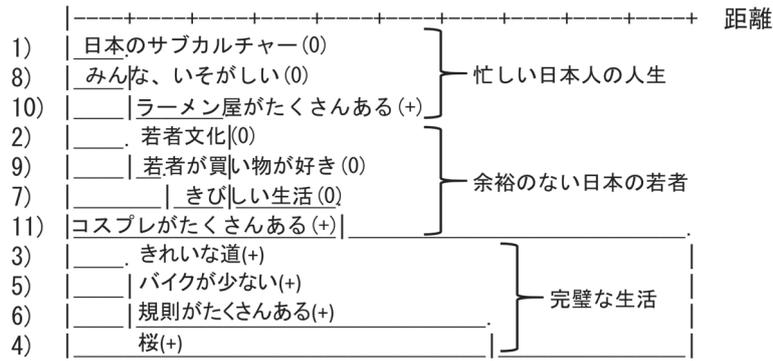


図2 対象Bのデンドログラム

表2 対象Bのクラスター名、サブカルチャーイメージとイメージ形成のきっかけ

クラスター番号 解釈	サブカルチャーイメージ (順位、項目、評価)	イメージ形成のきっかけ・媒体
1 忙しい日本人の 人生	1. 日本のサブカルチャー (0)	なし
	8. みんな、いそがしい (0)	ドラマから見て皆、夜10時まで仕事をする
	10. ラーメン屋がたくさんある (+)	皆忙しいからラーメンはかんたんに食べられる
2 余裕のない 日本の若者	2. 若者文化 (0)	なし
	9. 若者が買い物が好き (0)	●●に来る日本人は買い物が好き
	7. きびしい生活 (0)	見えない規則がたくさんあるから
	11. コスプレがたくさんある (+)	日本はアニメ漫画の国
3 完璧な生活	3. きれいな道 (+)	世界中に日本はきれいな国と言われた
	5. バイクが少ない (+)	ドラマから見た
	6. 規則がたくさんある (+)	きびしい国
	4. 桜 (+)	日本の代表／特徴

しい(0)、10. ラーメン屋がたくさんある(+)<sup>3</sup>の3項目であった。インタビュー結果から、クラスター名を「忙しい日本人の人生」とした。

日本人の人生のイメージがあります。苦しい人生のイメージだと思います。日本にはラーメン屋がたくさんあります。それはみんな忙しいから、ラーメン屋さんがたくさんあると思います。●●の大学でいろいろな日本の文化を勉強しましたが先生が「日本人は忙しいよ」って言っていました。ドラマでも見たからそんなイメージがあります。なんか立って食べられるラーメン屋があるんじゃないですか。それも時間がないから立って食べると思います。

クラスター2は、2. 若者文化(0)、9. 若者が買い物が好き(0)、7. きびしい生活(0)、11. コスプレがたくさんある(+)<sup>4</sup>の4項目でであった。インタビュー結果から、クラスター名を「余裕のない日本の若者」とした。

クラスター2は若者のイメージです。若者文化、若者は買い物が大好きだから、若者も厳しい生活をしている。時間がないし、みんな時間を守ってるから、なかなか余裕がない。(そういう日本人はどう?) ちょっとなんか、いいと思いますけど、楽な生活とか幸せなこととかあまりないから、ちょっとかわいそうだなと思いました。

クラスター3は、3. きれいな道(+)、5. バイクが少ない(+)、6. 規則がたくさんある(+)、4. 桜(+)  
の4項目であった。インタビュー結果から、クラスター名を「完璧な生活」とした。

クラスター3は完璧な生活をするために、必要なものです。また、きれいで完璧なイメージ  
があります。日本は道がきれいだし、バイクもあんまりないし、桜もたくさんあるからきれい  
です。

### 3.3. 対象Cの結果(出身地Y)

図3は、対象Cのクラスター分析から得られたデンドログラムである。対象Cは12個の連想  
イメージを4つのクラスターに分類した。クラスター1は連想項目順位1、3、4、9の4項目であっ  
た。クラスター2は連想項目順位2、5、6、7の4項目であった。クラスター3は8、10の2項目  
であった。クラスター4は連想項目順位11、12の2項目であった。表3は、対象Cのクラスター  
番号と解釈、サブカルチャーイメージとイメージ形成のきっかけの一覧である。以下の斜体で示し  
た箇所は図3を対象Cに提示しながらクラスター1についてインタビューを行った際のスクリプ  
トである。クラスター1は、1. サブカルチャー(0)、3. 寿司(+)、4. 富士山(+)、9. 相撲(0)の4項  
目であった。インタビュー結果から、クラスター名を「典型的な日本イメージ」とした。

1番のサブカルチャー、3番のすし、4番の富士山、9番の相撲は日本の特徴を表します。例  
えば富士山というと日本を思い出します。また、すしは日本の有名な料理だと思います。

クラスター2は、2. 若者文化(0)、5. アニメ(+)、6. まんが(+)、7. コスプレ(0)の4項目であった。  
インタビュー結果から、クラスター名を「日本の若者文化」とした。

クラスター2は若者文化でアニメとか漫画とかコスプレです。若い者はアニメが好きの人がた  
くさんいると思います。だからコスプレの人がコスプレ会とコスプレ祭りのとき、みんなが一  
緒に行ってアニメと同じ服を着て参加します。日本ではおたくの言葉が生まれました。また、  
漫画はアニメに似ていて、好きな人もいます。私はアニメのほうが好きです。漫画は絵がきれ  
いじゃないと思います。アニメはキャラクターがもっときれいです。私の国ではコスプレがあ

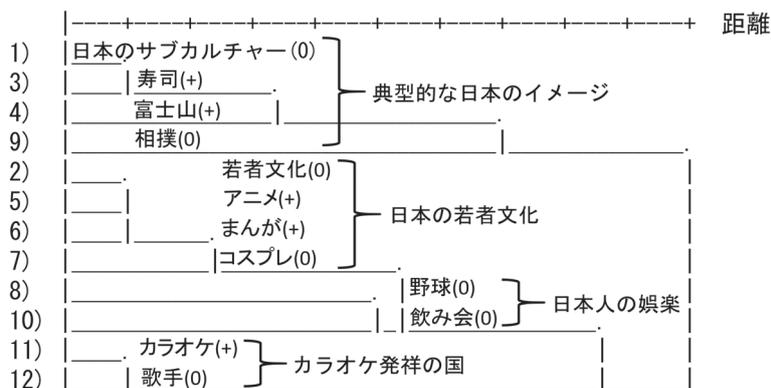


図3 対象Cのデンドログラム

表3 対象Cのクラスター名、サブカルチャーイメージとイメージ形成のきっかけ

クラスター番号 解釈	サブカルチャーイメージ (順位、項目、評価)	イメージ形成のきっかけ・媒体
1 典型的な日本の イメージ日本の	1. 日本のサブカルチャー (0)	なし
	3. 寿司 (+)	世界中に知られました。作り方、形
	4. 富士山 (+)	冬になるときれいになる
	9. 相撲 (0)	なし
2 日本の若者文化	2. 若者文化 (0)	なし
	5. アニメ (+)	見るたびにいいことをもらいます。言語 話し方
	6. まんが (+)	子供のころ、よく人気があります。現在はアニメになった 好きなことができる。恥ずかしくない
3 日本人の娯楽	7. コスプレ (0)	好きなことができる。恥ずかしくない
	8. 野球 (0)	日本で一番有名なスポーツ
4 カラオケ発祥の国	10. 飲み会 (0)	会社員に知られます
	11. カラオケ (+)	日本で発明されたもの
	12. 歌手 (0)	アニメを見るとき、歌手の歌が分かるようになる

んまり人気がありませんけど、少しだけコスプレをする人がいます。

クラスター3は、8. 野球(0)、10. 飲み会(0)、の2項目であった。クラスター名を「日本人の娯楽」とした。

クラスター3は飲み会と野球についてです。日本人は実は野球だけでなく他の活動も終わってから飲み会をやります。例えばアルバイトを終わったとき、休日のとき、日本人は飲み会が好きです。私の●●は金曜日の夜、みんなビールとか酒とか買ってきて、そして一緒に飲みます。ゲームをしたり歌を歌いながら酒を飲みます。私は酒とビールがあまり好きじゃないから参加したくないです。

クラスター4は、11. カラオケ(+)、12. 歌手(0)の2項目であった。クラスター名を「カラオケ発祥の国」とした。

クラスター4はカラオケと歌手。日本はカラオケを発明した国です。だからカラオケに行くとよく分かります。歌う人は好きな歌手の好きな歌を選んでカラオケをします。私はアニメが好きなので、大体カラオケに行くとアニメの歌を歌います。

### 3.4. 対象Dの結果 (出身地Y)

図4は、対象Dのクラスター分析から得られたデンドログラムである。対象Dは12個の連想イメージを4つのクラスターに分類した。クラスター1は連想項目順位1、2、5、6、7の5項目であった。クラスター2は連想項目順位10、12、11の3項目であった。クラスター3は3、4の2項目であった。クラスター4は連想項目順位8、9の2項目であった。表4は、対象Dのクラスター番号と解釈、サブカルチャーイメージとイメージ形成のきっかけの一覧である。以下の斜体で示した箇所は図4を対象Dに提示しながらクラスター1についてインタビューを行った際のスク

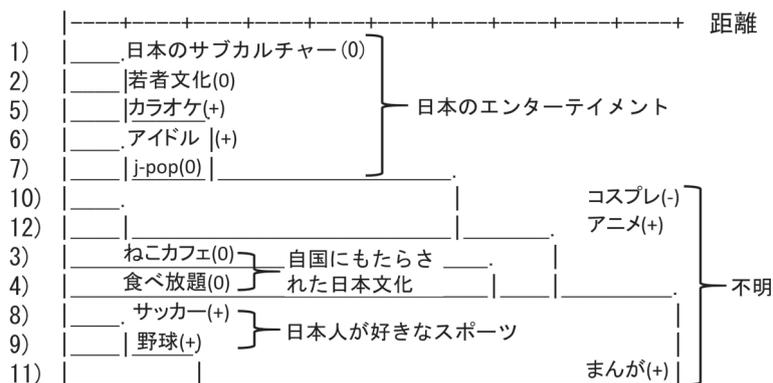


図4 対象Dのデンドログラム

リプトである。クラスター1は、1. 日本のサブカルチャー(0)、2. 若者文化(0)、5. カラオケ(+)、6. アイドル(+)、7. j-pop(0)の5項目であった。インタビュー結果からクラスター名を「日本のエンターテインメント」とした。

曲は若い者に影響を与えています。例えばJ-POPとか。でも最近はK-POPは影響がたくさんあります。最近の日本の歌は●●とちょっと似てます。アイドル、例えばAKB48とかは●●にいます。日本のJ-POPは影響がたくさんあるから、●●にもJ-POPがあります。

クラスター2は、10. コスプレ(-)、12. アニメ(+)、11. まんが(0)、の3項目であった。11. まんが(0)は、インタビュー時に対象がクラスター2に入れるよう提案したため、クラスター2に含めた。インタビューの結果、クラスター2に関し具体的な言及はなかった。そのため、クラスター名を「不明」とした。

クラスター3は、3. ねこカフェ(0)、4. 食べ放題(0)の2項目であった。クラスター名を「自国にもたらされた日本文化」とした。

クラスター3は最近の若い者がよくしていることです。私は猫が好きだからとても好きです。食べ放題は焼き肉とか、しゃぶしゃぶとか、おいしいと思います。おいしいものはたくさん食べたいから食べ放題はいいと思います。食べ放題とか猫カフェは●●にもあります。多分、日本の影響を受けたと思います。

クラスター4は、8. サッカー(+)、9. 野球(+)、の2項目であった。クラスター名を「日本人が好きなスポーツ」とした。

サッカーと野球は世界中で人気があるけど、日本でも人気もあります。特に野球は日本人に人気があります。私は野球を見るのは大丈夫だけど、やるのが無理です。

### 3.5. 対象Eの結果(出身地Z)

図5は、対象Eのクラスター分析から得られたデンドログラムである。対象Eは13個の連想イメージを4つのクラスターに分類した。クラスター1は連想項目順位1、2、9、3の4項目であっ

表4 対象Dのクラスター名、サブカルチャーイメージとイメージ形成のきっかけ

クラスター番号 解釈	サブカルチャーイメージ (順位、項目、評価)	イメージ形成のきっかけ・媒体
1 日本のエンターテインメント	1. 日本のサブカルチャー (0)	なし
	2. 若者文化 (0)	なし
	5. カラオケ (+)	カラオケほど友だちの活動はない
	6. アイドル (+)	かわいい
	7. j-pop (0)	
2 不明	10. コスプレ (-)	おかしい
	12. アニメ (+)	日本文化を学べる
	11. まんが (0)	なし
3 自国にもたらされた日本文化	3. ねこカフェ (0)	とてもかわいい
	4. 食べ放題 (0)	おいしい食べ物をたくさん食べられる
4 日本人が好きなスポーツ	8. サッカー (+)	なし
	9. 野球 (+)	なし

た。クラスター2は連想項目順位6、8の2項目であった。クラスター3は4、5の2項目であった。クラスター4は7、4の2項目であった。表5は、対象Eのクラスター番号と解釈、サブカルチャーイメージとイメージ形成のきっかけの一覧である。以下の斜体で示した箇所は図5を対象Eに提示しながらクラスター1についてインタビューを行った際のスクリプトである。クラスター1は、1. 日本のサブカルチャー(0)、2. 若者文化(0)、9. まつり(+)、3. アニメ(+)<sup>1)</sup>の4項目であった。インタビュー結果から、クラスター名を「自国と異なる文化」とした。

日本のサブカルチャーは敬語やマナーに●●と違いがある。マナーが特に●●と違います。二つ目は日本のサブカルチャーは●●と全然違いますから、それは特に注目されます。日本のサブカルチャーは大体、踊りが多いです。そういう踊る祭りが多かったと思います。それは●●と違います。

クラスター2は、6. 家のデザイン(0)、8. 和食(+)<sup>2)</sup>の2項目であった。インタビュー結果から、クラスター名を「日本の生活の中の文化」とした。

クラスター2は、私はいつもテレビとかインターネットで見ることです。まずは、家のデザインですが、日本の家のデザインは他の国とちょっと違います。例えば、日本の家のドアは面白

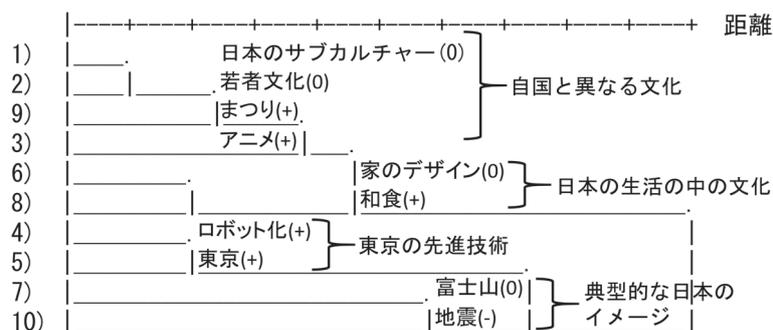


図5 対象Eのデンドログラム

表5 対象Eのクラスター名、サブカルチャーイメージとイメージ形成のきっかけ

クラスター番号 解釈	サブカルチャーイメージ (順位、項目、評価)	イメージ形成のきっかけ・媒体
1 自国と異なる文化	1. 日本のサブカルチャー (0)	なし
	2. 若者文化 (0)	周りの人とくに日本に行ったことがある人
	9. まつり (+)	●●に行った“BON ODORI”とアニメで見た 子どものときからマレーシアに普及した
	3. アニメ (+)	インターネットや映画でよく見る
2 日本の生活の中の文化	6. 家のデザイン (0)	
	8. 和食 (+)	●●にある和食の店
3 東京の先進技術	4. ロボット化 (+)	テレビ
	5. 東京 (+)	テレビ
4 典型的な日本のイメージ	7. 富士山 (0)	先輩たちの話
	10. 地震 (-)	周りの人たちの話

いと思います。また、和食のすしとかラーメンとかも個性が強いと思います。それと日本の伝統的な文化に近いと思います。

クラスター3は、4. ロボット化(+)、5. 東京(+)<sup>2</sup>の2項目であった。インタビュー結果から、クラスター名を「東京の先進技術」とした。

クラスター3は主に日本の技術についてです。例えば、東京と●●はどちらでも大きな街だが東京のほうが技術が進んでいる。それはロボット化でロボットの進化です。●●ではロボットを町ではあまり見かけないが東京でちょっと多いと思います。

クラスター4は、7. 富士山(0)、10. 地震(-)<sup>2</sup>の2項目であった。インタビュー結果から、クラスター名を「典型的な日本のイメージ」とした。

クラスター4は日本の地理のことです。地震に関しては日本に来る前に、いつも親戚に聞かれていました。日本に行っても大丈夫か、地震が多いじゃないかとか。最初は私もあまり知らなかったですが、その質問を聞いて調べてみて日本は地震が多いことがわかりました。でも親は、地震は問題ないと言いました。また、富士山は登る意味があるといつも先輩が言っていました。1回だけでも登らないと日本に来た意味がないと言いました。(登る予定は?) 多分、夏休みの始めに登ると思います。

### 3.6. 対象Fの結果 (出身地Z)

図6は、対象Fのクラスター分析から得られたデンドログラムである。対象Fは13個の連想イメージを4つのクラスターに分類した。クラスター1は連想項目順位1、3、7の3項目であった。クラスター2は連想項目順位2、4、12、9、13の5項目であった。クラスター3は連想項目順位10、11の2項目であった。クラスター4は連想項目順位6、8、5の3項目であった。表6は、対象Fのクラスター番号と解釈、サブカルチャーイメージとイメージ形成のきっかけの一覧である。以下の斜体で示した箇所は図6を対象Fに提示しながらクラスター1についてインタビュー

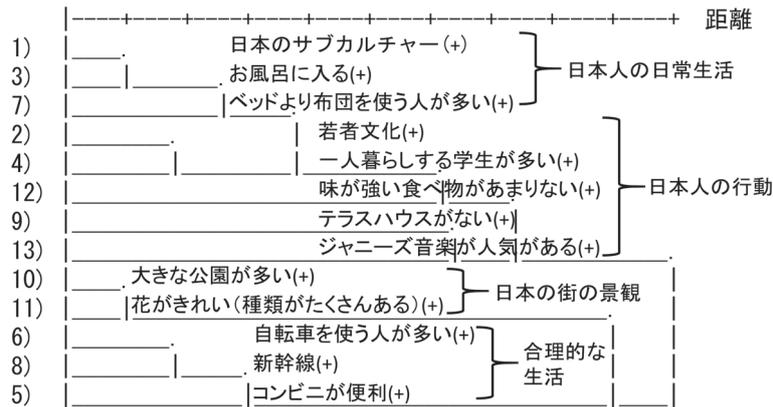


図6 対象Fのデンドログラム

を行った際のスクリプトである。クラスター1は、1. 日本のサブカルチャー(0)、3. お風呂に入る(0)、7. ベッドより布団を使う人が多い(0)の3項目であった。インタビュー結果から、クラスター名を「日本人の日常生活」とした。

クラスター1は家にあるものです。お風呂と布団のことです。お風呂は家族が順番で同じ風呂に入ると聞いたことがあります。面白いです。家族と一緒に使うことがおもしろいです。布団は多分、季節と関係あるから、寒いときは布団がいいと思います。

クラスター2は、2. 若者文化(+)、4. 一人暮らしをする学生が多い(+)、12. 味が強い食べ物があまりない(+)、9. テラスハウスがない(0)、13. ジャニーズ音楽が人気がある(0)の5項目であった。インタビュー結果からクラスター名を「日本人の行動」とした。

クラスター2は日本人の生活で、1人暮らしをする学生が多いです。あとは食べ物ですが、あまり強い味がしない食べ物が多いです。また、家にテラスハウスがありません。

表6 対象Fのクラスター名、サブカルチャーイメージとイメージ形成のきっかけ

クラスター番号 解釈	サブカルチャーイメージ (順位、項目、評価)	イメージ形成のきっかけ・媒体
1 日本人の日常生活	1. 日本のサブカルチャー (0)	なし
	3. お風呂に入る (0)	先生から聞いた (マレーシアで勉強した時)
	7. ベッドより布団を使う人が多い (0)	友達から聞いた
2 日本人の行動	2. 若者文化 (+)	なし
	4. 一人暮らしをする学生が多い (+)	友達から聞いた
	12. 味が強い食べ物があまりない (+)	なし
	9. テラスハウスがない (0)	なし
	13. ジャニーズ音楽が人気がある (0)	インターネットで知った
3 日本の街の景観	10. 大きな公園が多い (+)	なし
	11. 花がきれい (種類がたくさんある) (+)	先生から聞いた (マレーシアで)
4 合理的な生活	6. 自転車を使う人が多い (+)	なし
	8. 新幹線 (+)	インターネットで読んだことがある
	5. コンビニが便利 (+)	なし

家は一個一個でこういう感じですか。好きなのはジャニーズ音楽です。●●ではジャニーズはあんまり人気ないけど日本では人気があります。●●にはダンスしながら歌う、そういうグループはあんまりないです。それから、若者言葉があるし、女子はグループになることが多いかな。人によってかも。でも日本はグループ行動が多いと思います。

クラスター3は、10. 大きな公園が多い(+), 11. 花がきれい(種類がたくさんある)(+)の2項目であった。インタビュー結果から、クラスター名を「日本の街の景観」とした。

クラスター3は、公園と自然を大切にすることで、日本には大きい公園が多いことです。季節があるから花の種類もたくさんあってきれいです。それは日本の特徴だと思います。

クラスター4は、6. 自転車を使う人が多い(+), 8. 新幹線(+), 5. コンビニが便利(+ )の3項目であった。インタビュー結果からクラスター名を「合理的な生活」とした。

クラスター4の6と8は transportation。これが自転車を使う人が多い。●●はあんまりないですから。新幹線がすごいと思いますね。この国だったらすごい便利だと思います。なんかいろいろ払うとかできるし、プリントもできるし、食べ物だけじゃない。

#### 4. 考察

##### 4.1. サブカルチャーを通じた対日観は留学生の出身地域により異なるか

表7は、対象Aから対象Fの出身と連想イメージのうち刺激文で定義した「サブカルチャー」に該当する連想を○、「サブカルチャー」に該当しない連想を×、どちらにも含まれると考えられる項目を△で表した一覧である。対象Aを除き、サブカルチャーに該当しない項目の連想が認められる。出身による特異性は認められない。連想イメージを特定せずに対日観を検討した研究においても、出身地域を問わず類似の傾向が示されている(安2009、安2010a、安2010b、安2011、安・池田2012、安2012)。東南アジア3地域出身留学生を対象とした本研究においても同様に傾向が

表7 対象Aから対象Fの連想項目傾向一覧

出身地 X		出身地 Y		出身地 Z	
対象 A	対象 B	対象 C	対象 D	対象 E	対象 F
○	○	○	○	○	○
○	×	×	○	○	×
○	×	×	△	×	×
○	○	×	○	○	○
△	○	○	○	×	×
△	×	○	○	×	×
○	○	○	○	×	×
	×	○	○	×	△
	×	×	×	×	×
	×	×	×	×	×
	×	△	×		×
		△	○		×
					×

(サブカルチャーに該当: ○、該当しない: ×、どちらにも含まれる: △)

認められた。サブカルチャーを通じた対日観は、本研究の対象からは出身地域による異なる可能性は低いと考えられる。

#### 4.2. サブカルチャーを通し留学生は日本社会をどのように見つめているか

表8は、対象Aから対象Fにおいて形成されたクラスターの一覧である。本研究では、サブカルチャーを連想刺激とし留学生の対日観について検討を試みた。結果、対象Aから対象F共通して、伝統文化も含め日本を総合的に見つめている傾向がみられた。外国人を対象とした先行研究では、(1)日本人との接触頻度の多さがポジティブな対日観への変容に影響すること、(2)多様な経験により来日当初（または以前）の対日観が具体化、組織化され独自の異文化観を構築すること、(3)日本滞在経験により複眼的な視点を身につけ他者の受容と自己理解を伴う人間的成長がみられたことが示されている（安 2009、安 2010a、安 2010b、安 2011、安・池田 2012、安 2012）。連想刺激をサブカルチャーに絞ってPAC分析を行った本研究においても、先行研究と類似の傾向が認められた。伝統文化と近代的な文化が混在した見つめ方は、外国人の対日観として繰り返し出現することを示唆していると考えられる。近年の世界的なアニメ・マンガブームを背景に、“Cool Japan”が注目されている（国際交流基金 2007）一方、留学生は総合的な視点で日本を捉えていると考えられる。本研究の結果は、留学生の対日観を客観的に捉える1つの素材となりうると考えられる。

### 5. 結論

本研究では、学習者が日本のサブカルチャーをどのように受容しているか留学生に対しPAC分析を用いて検討した。2つの問いに対し、以下の示唆が得られた。

#### (1) サブカルチャーを通じた対日観は留学生の出身地域により異なるか

サブカルチャーを通じた対日観は、本研究の対象に限った場合、出身地域により異なる可能性は低いと考えられる。サブカルチャーの捕らえ方は多様であると考えられる。他地域出身者を対象とした研究も同時に進めていく必要がある。

#### (2) サブカルチャーを通し留学生は日本社会をどのように見つめているか

サブカルチャーを連想刺激とした対日観においても、本研究の対象である東南アジア出身留学生は伝統文化も含め日本を総合的に見つめている傾向がみられた。

表8. 対象Aから対象Fのクラスター一覧

対象A	対象B	対象C	対象D	対象E	対象F
アニメ・マンガ	忙しい日本人の人生	典型的な日本のイメージ	日本のエンターテイメント	自国と異なる文化	日本人の日常生活
映画	余裕のない日本の若者	日本の若者文化	不明	日本の生活の中の文化	日本人の行動
若者文化	完璧な生活	日本人の娯楽 カラオケ 発祥の国	自国にもたらされた日本文化 日本人が好きなスポーツ	東京の先進技術 典型的な日本のイメージ	日本の街の景観 合理的な生活

マンガ・アニメ等に代表される“Cool Japan”が注目を浴び、学習者の日本語学習動機としても認められているが、本研究の対象となった留学生は、伝統文化を含め、文化を総合的に捉えている可能性が示唆された。

## 付記

本研究は、日本学術振興会学術研究助成基金助成金基盤研究C（課題番号：17K02838、研究代表者：安龍洙）の助成を受けた。

## 引用文献

- 安龍洙 (2009) 「外国人の対日観に関する研究－韓国人短期留学生の場合」『茨城大学留学生センター紀要』7, 1-13.
- 安龍洙 (2010a) 「外国人の対日観に関する研究－中国人短期留学生の場合」『茨城大学留学生センター紀要』8, 1-17.
- 安龍洙 (2010b) 「外国人の対日観に関する研究：日本滞在歴の長い韓国人の場合」『ユーラシア研究』7(4), 373-392.
- 安龍洙 (2011) 「外国人の対日観に関する研究－ベトナム人留学生の場合」『茨城大学留学生センター紀要』9, 1-18.
- 安龍洙・池田庸子 (2012) 「日本人の外国・外国人観に関する研究－茨城県在住の主婦の場合」『茨城大学留学生センター紀要』10, 15-28.
- 安龍洙 (2012) 「外国人の対日観に関する研究－中国の少数民族出身者の場合」『茨城大学留学生センター紀要』10, 1-14.
- 安龍洙 (2015) 「日本留学経験者の韓国帰国後の対日観の変化に関する一考察」『茨城大学留学生センター紀要』13, 1-14.
- 安龍洙 (2016) 「日本で就職した元韓国人留学生の対日観の変化に関する一考察」『茨城大学留学生センター紀要』15, 93-105.
- 熊野七絵 (2010) 「日本語学習者とアニメ・マンガ－聞き取り調査結果から見える現状とニーズ」『広島大学留学生センター紀要』20, 88-103.
- 国際交流基金 (2007) 「特集マンガから MANGA へ」『をちこち』19, 10-55.
- 内藤哲雄 (1997) 「PAC 分析の適用範囲と実施法」『人文科学論集』31, 51-88.
- 難波功士 (2006) 「サブカルチャー概念の現状をめぐって」『社会学部紀要』101, 161-168.
- 文部科学省・外務省・法務省・厚生労働省・経済産業省・国土交通省 (2008) 「『留学生 30 万人計画』骨子」[https://www.jsps.go.jp/j-kokusaika/data/meibo\\_siryoku/06\\_kosshi.pdf](https://www.jsps.go.jp/j-kokusaika/data/meibo_siryoku/06_kosshi.pdf) 2018 年 9 月 10 日閲覧

# 中国出身留学生は日本のサブカルチャーを通して 日本をどう捉えているか

松田 勇一\*・安 龍洙\*\*

(2018年10月1日受理)

## Perceptions of Japan by Chinese Students in the Country as Seen in Japanese Subculture

Yuichi MATSUDA\* and Yong Su AN\*\*

(Received October 1, 2018)

### 要旨

本稿では、中国人留学生在日本のサブカルチャーを通じて日本文化をどのようにとらえているのかを明らかにするために、中国人留学生4名に対してPAC分析法を用いて調査を行った。その結果、中国人留学生は日本のサブカルチャーと若者文化を同類のものとして捉えることがあること、サブカルチャー・若者文化から流行が産み出されると考えていること、サブカルチャー・若者文化として「SNS」、「お笑い」、「風俗」、「漫画」、「音楽」、「東京」というイメージを抱いていること、サブカルチャー・若者文化は伝統的な日本の文化や特徴とは異なると考えていること、サブカルチャーの中でも特に漫画やアニメが日本語学習や日本留学の動機になっていること、オタクについてはマイナスイメージを持っていること、等が示唆された。

【キーワード】中国出身留学生、サブカルチャー、若者文化、異文化理解、PAC分析法

### 1. はじめに

独立行政法人日本学生支援機構(2018)によると、2017年に日本の外国人留学生数は267,042人となり、2008年に策定された「留学生30万人計画」の目標数値に近づいている。中でもアジアからの留学生は全体の93.3%を占め、特に中国からの留学生が全体の40.2%と大きな割合を占めている。このような外国人留学生が増加している状況において、外国人留学生が日本、日本人、日本文化をどのようにとらえているのかを考察することは、相互交流、あるいは共生に必要なことだ

---

\*宇都宮共和大学シティライフ学部 (〒320-0811 宇都宮市大通り 1-3-18; Faculty of City-life Science, Utsunomiya-kyowa University, 1-3-18 Ohdori Utsunomiya-shi 320-0811 Japan)

\*\*茨城大学全学教育機構 (〒310-8512 水戸市文京 2-1-1; Institute for Liberal Arts Education, Ibaraki University, 2-1-1 Bunkyo Mito-shi 310-8512 Japan)

と考える。本研究は日本社会における「外国人」と「日本人」の異文化相互理解の実態とその特徴について認知的・情意的な観点から質的に検証し外国人と日本人の相互理解と相互交流の課題と問題点を検討する一連の研究の一部である。

中国人を対象とした対日観の研究は、安 (2010b, 2012, 2013)、松田・安 (2018) がある。安 (2010b) は中国人非正規留学生 4 名を対象に、安 (2012) は中国の少数民族出身者 4 名を対象に、安 (2013) は中国人留学生 4 名を対象に、松田・安 (2018) は中国人交換留学生 4 名を対象に、それぞれ個人別態度構造分析法 (Analysis of Personal Attitude Construct : PAC 分析法) を用いて、考察を行っている。これらの先行研究では、被調査者に対して刺激語を与え、対日観について調査している。安 (2010b, 2012, 2013) は、刺激語「日本、日本人、日本社会についてどんなイメージを持っているか」を与え、全体的な対日観を尋ねた。松田・安 (2018) は、刺激語「私が生活する日本の社会」、「私と日本人がつきあうこと」、「私の国の人と日本の人が分かり合うこと」を与え、留学生本人が日本という異文化をどのように理解しているのかに焦点を当てた。本稿では、これらの先行研究とは異なった観点、つまり「サブカルチャー」と「若者文化」という観点から考察を行い、先行研究では指摘できなかった留学生の異文化理解に関して明らかにしたい。

本研究において「サブカルチャー」と「若者文化」を取り上げる理由は、それらが外国人留学生にとって日本や日本語について興味を持つ大きな動機になっているからである。大塚 (2018) は、海外のアカデミックな場において漫画やアニメに強い影響を受けている日本語学習者、研究者に会うことが少なくないとしている。また、外国人留学生だけではなく、海外からの旅行客も日本のアニメ等のサブカルチャーを目当てに訪日することも指摘されている (付・方 2017)。これらの先行研究で指摘されているだけではなく、日本語教育の現場に立つ者であれば、留学生の学習動機や興味関心の中に日本の漫画、アニメ、サブカルチャーがあることは自明の理であろう。

以上の理由により、本研究では「サブカルチャー」と「若者文化」を取り上げるが、サブカルチャーと言っても宮沢他 (2017) で示されている通り、その範疇は広く、また時代により異なるものである。したがって、本研究では「サブカルチャー」を特定のジャンルに限定することなく、伝統文化ではなく日常的に親しまれている文化とし、留学生が「サブカルチャー」をどのように捉えているのかも同時に観察していきたい。

## 2. 方法

本稿では、中国出身大学院生 4 名を対象に PAC 分析法を用いて研究を進めた。被調査者 4 名は、来日後 2～3 年が経過しており、現在は日本の大学院で研究活動を行っている。

調査は第 1 部と第 2 部に分けられるが、第 1 部は被調査者本人の同意を得てフェイスシートに被調査者の属性を記入させてから、質問紙を用いて以下のように調査を実施した。

まず、被調査者に以下の刺激語を与え、「①日本のサブカルチャー、②若者文化」を含めてイメージ項目が 10 項目以上になるように記入させた。

**【刺激文】** サブカルチャーとは、日常的に人々に親しまれている文化です。例えば、娯楽、スポーツ、芸能、ファッション、若者文化などを指します。茶道や歌舞伎などの伝統文化はサブカルチャーに含まれません。

あなたは「日本のサブカルチャー」に対してどのようなイメージを持っていますか。

思い浮かんだイメージを「単語 (例：花、綺麗、綺麗だ)、または短い文 (例：花は綺

麗だ、花は綺麗)」で記入してください。

その後、その連想イメージを重要と思われる順序に並べさせた。更にそれぞれのイメージ項目の組み合わせが、直感的イメージでその意味内容においてどの程度近いのかを7段階尺度で評定させた。この尺度での回答をもとに、ワード法でクラスター分析し、その結果に対する対象者自身の解釈を求めた。最後に連想項目のイメージについて、プラスイメージの場合は (+)、マイナスイメージの場合は (-)、どちらともいえない場合は (0) の記号を記入させた。

第2部は口頭により、1) 各クラスター及びクラスター全体の解釈、2) 各イメージ項目に対して、そのイメージを抱くようになったきっかけや媒体を尋ねた。

調査は2018年7月から8月に第2著者が実施し、被調査者の誤用については正しい日本語に直し分析を行った。また、本稿では被調査者が特定されないように地名、国名、大学名、施設名などはすべて○にした。

### 3. 結果

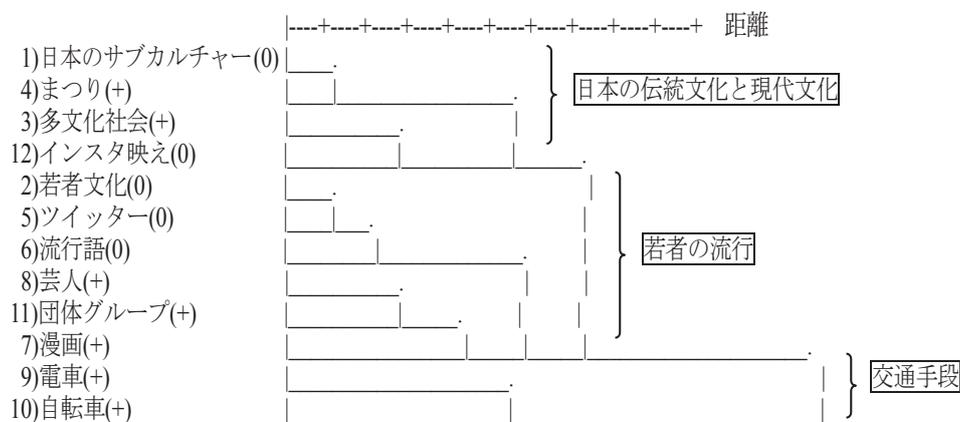
ここでは、まずクラスター分析の結果を示し、その結果に対する被調査者自身の解釈を示す。

#### 3.1. 被調査者 A の場合

図1は、被調査者 A のデンドログラムである。

クラスター1は『1. 日本のサブカルチャー(0)<sup>1)</sup>』『4. まつり(+)]『3. 多文化社会(+)]『12. インスタ映え(0)]の4項目でクラスター名は「日本の伝統文化と現代文化」とした。クラスター1は「私から見ると、主に日本の古いものっていうか、伝統的なもの、かつ、今の日本の社会のもの、大きなくくりでくくったものかなっていうふうに考えてます。外国人として日本に来た結果っていうか、クラスター1の祭りとか多文化社会とかをテレビとかいろんなマスメディアから知った上で、日本に対するイメージがワッと強くなったのかもしれないというふうに今、感じています。」と解釈した。

クラスター2は『2. 若者文化(0)]『5. ツイッター(0)]『6. 流行語(0)]『8. 芸人(+)]『11. 団体グ



- 1) 左の数値は重要順位
- 2) 各項目の後ろ ( ) 内の符号は単独でのイメージ

図1 被調査者 A のデンドログラム

ループ(+)]『7.漫画(+)]の6項目でクラスター名は「若者の流行」とした。クラスター2は「クラスター2は今やっているものっていうか、主に若者が主流となっていて、それを知らない自分も若者だしっていうこともあって、若者が使っている言葉とか、ものとか文化っていうものがこれからは日本を知る上では最も必要だしっていうことはあるし。あとは周りの友達をつくる時にも同じ話題としてはこういうことを知るべきではないかというふうに考えてます。」と解釈した。

クラスター3は『9.電車(+)]『10.自転車(+)]の2項目でクラスター名は「交通手段」とした。クラスター3は「クラスター3は単に日本に来る前っていう感じは、一番ドラマとかアニメの中では電車とか自転車のイメージが強かったの。自転車は自分の故郷ではあんまり乗っていなかったし、電車ってそもそも何なのかなっていうふうに感じて。単に見ただけでは全然そういうイメージも付かないし、感じはしないから、来てすごく便利だっていう感じですね。」と解釈した。

クラスター間の比較においては、クラスター1と2について「クラスター1は単に私が考えると、クラスター2よりもっと古いっていう、もっと伝統に向けたもので、クラスター2のほうは今若者が使っているもので、両方知らないと駄目だしっていう感じはしますね。」と解釈した。なお、クラスター1と3、2と3の比較においては、関連がないと回答した。

全体のイメージについては、「全体のイメージとしては、日本を知るためにもこれらが必要だし、昔のことはクラスター1の昔的なもので、クラスター2のほうは今使っているとかやっていることで、クラスター3は日本にいる時にはこういう交通手段とかを使うのが普通っていうか、そういう感じはします。(サブカルチャーと日本留学との関係は?)日本に留学するときは、ほとんど若者が一番主流となってるし、その人たちはまず日本語の教育を受けて、また自分でそういう日本について興味があったときにマスメディアやマンガとかいろいろ日本のことを知りたいと思ってこういうものを調べたりするし、例えば、この中の団体グループの音楽を聴くし、結構、関係してくると思います。アニメとかマンガとかあります。最初は日本語や日本に興味を持ったのも、多分、マンガですね。」と解釈した。

表1 被調査者Aのイメージを持つようになった切っ掛け

クラスター1	
1. 日本のサブカルチャー (0)	×
4. まつり (+)	体験した
3. 多文化社会 (+)	自分で感じた
12. インスタ映え (0)	テレビを観て
クラスター2	
2. 若者文化 (0)	×
5. ツイッター (0)	友達から聞いて
6. 流行語 (0)	メディアで
8. 芸人 (+)	テレビを観て
11. 団体グループ (+)	ネットで
7. 漫画 (+)	本で
クラスター3	
9. 電車 (+)	ネットで
10. 自転車 (+)	ネットで

### 3.2. 被調査者 B の場合

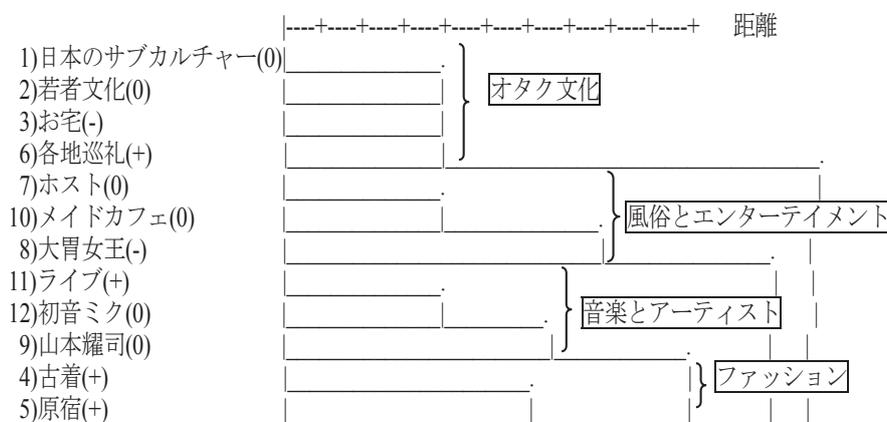
図2は、被調査者Bのデンドログラムである。

クラスター1は『1.日本のサブカルチャー(0)』『2.若者文化(0)』『3.お宅(-)』『6.各地巡礼(+)<sup>2)</sup>』の4項目でクラスター名は「オタク文化」とした。クラスター1は「まずは先生が提示した1番と2番、あとこういう部分の対象者はオタクが多いと思います。各地巡礼とはアニメとか現実に体験したいオタクとして重要な一部だと思います。こういう活動で若者は自分の文化を楽しめると思います。多分、各地巡礼とはアニメ限定ではない。映画とかドラマとか、こういう撮影したのを見てみると、こういう場所に憧れる、こういう普通の一般のイメージがあると思います。多分、中国で6番があると思います。オタクも中国で若者の中にいっぱいある。ただ、オタク、今は悪いイメージでニートと関連するかもしれないから、悪いイメージではないんですけど、こういう部分の中で一部の人を指摘するかもしれない。以上です。」と解釈した。

クラスター2は『7.ホスト(0)』『10.メイドカフェ(0)』『8.大胃女王(-)』の3項目でクラスター名は「風俗とエンターテイメント」とした。クラスター2は「クラスター2は実際、友達が9月来るって聞いて、日本のレジャーに関して考えているときに、ホストとかこういうメイドカフェとか考えていて、この質問紙をもらいました。だから、書きました。あと、大胃女王(大食い女王)、こういう人たちのYouTubeの動画はよく見ますから印象に残りました。まずはこういう人は芸能人の感じがあるんですけど、でも、実際は彼らの仕事です。」と解釈した。

クラスター3は『11.ライブ(+)'』『12.初音ミク(0)』『9.山本耀司(0)』の3項目でクラスター名は「音楽とアーティスト」とした。クラスター3は「クラスター3はライブ、あとは未来。こういう人、実際の。芸能人ではないんですけど、パソコンで作られたアイドルのイメージがある。あと、9番はアーティスト、服をデザインする人、なんかすごく有名で分かります。あと、11番と12番は音楽に関して自分が好きだからこういうものは気になります。」と解釈した。

クラスター4は『4.古着(+)'』『5.原宿(+)'』の4項目でクラスター名は「ファッション」とした。クラスター4は「クラスター4は、9番を書いた後でこういうファッションに関すること、日本人は中古屋さんが好き。中古の服装はすごくセンスがいいというイメージを持ってますよね。あと、原宿は他のファッション、あるいは新しい普段着れないものでも、こういう場所でいっぱい集まっ



- 1) 左の数値は重要順位
- 2) 各項目の後ろ ( ) 内の符号は単独でのイメージ

図2 被調査者Bのデンドログラム

ているイメージがあります。」と解釈した。

各クラスター間の比較においては、クラスター1と2について「クラスター1とクラスター2はクラスター1のほうがもっと範囲が大きいと思います。クラスター2はこういうサブカルチャー、文化の中で従事者の感じがあります。」、クラスター1と3について「クラスター1とクラスター3は代表者かな。こういう人たちは別に人ではない。キャラクターでもこういう文化を代表する人たち」、クラスター1と4について「クラスター1とクラスター4は多分、クラスター4はクラスター1の中の一部で、こういう若者たちはこういう服装とか好きだという感じです。」、クラスター2と3について「クラスター2とクラスター3は、一つはレジャーで、もう一つはもっと実際の音楽とか服装。クラスター2のほうはサービス業界で、クラスター3のほうはもっと自分の日常で楽しめるものだと思います。」、クラスター2と4について「クラスター2とクラスター4は多分、クラスター4の範囲はもっと大きいと思います。クラスター2のホストは女性向けの感じが強い、メイドカフェは男性向け、大胃女王（大食い女王）は多分グルメ向けの感じで、でも、クラスター4のほうに服装だからもっと一般の人向けだと思います。」、クラスター3と4について「クラスター4は服装だから実際毎日着ているから実感があるんですけど、クラスター3は個人が好きなの事なので、把握できない感じが強いですね。」と解釈した。

全体のイメージについては、「日本人は日本文化の範囲が大きいし、でも、中には矛盾の部分がいっぱいがあると思います。（矛盾？）矛盾ではない。対抗する部分があると思います。例えば、一部の人は古着が好き、一部の人はこういう新しい風潮が好き人が多いとか。あと、伝統的な文化、華道とか武道とかが好きなの人もいるし、新しいライブとかあるいはミクさんのような偽物、偽のアイドルが好きなの人もいるから。（サブカルチャーと日本留学との関係は？）あんまり関係ないです。」と解釈した。

### 3.3. 被調査者 C の場合

図3は、被調査者Cのデンドログラムである。

表2 被調査者Bのイメージを持つようになった切っ掛け

クラスター1	
1. 日本のサブカルチャー (0)	×
2. 若者文化 (0)	×
3. お宅 (-)	ニートのイメージを持っている
6. 各地巡礼 (+)	実際に文化を楽しめる
クラスター2	
7. ホスト (0)	一応仕事だ
10. メイドカフェ (0)	一応仕事だ
8. 大胃女王 (-)	無理やり食べ物を浪費するイメージ
クラスター3	
11. ライブ (+)	音楽が好きだから
12. 初音ミラ (0)	仮装の人物で実感が足りない
9. 山本耀司 (0)	ファッションがよく分からない
クラスター4	
4. 古着 (+)	服を再利用してセンスがいい
5. 原宿 (+)	多様なスタイルが共存している

クラスター1は『1. 日本のサブカルチャー(0)』『2. 若者文化(0)』『3. 武道(+)'』『6. 文化祭(+)'』の4項目でクラスター名は「日本文化のジャンル」とした。クラスター1は「クラスター1は日本文化の中のいくつかのジャンルを考えたもので、3は武道精神ですけど、6は日本の高校文化の中の一環として扱っているものと考えています。武道精神はかなり日本特有のようなイメージを持っていて、文化祭のような日本の高校文化も中国のような結構堅苦しい勉強環境の中には全然ないといっても過言ではない一つの文化。高校も大学も大体同じように考えています。かなり独特だと思います。」と解釈した。

クラスター2は『7. セーラー服(0)』『10. キャバ嬢(-)』『8. 喫茶店(+)'』の3項目でクラスター名は「学校文化と風俗」とした。クラスター2は「クラスター2は、7は学校文化の一つだけれども、10と8はサービス業の中で日本のアニメやテレビ番組が示した割合としては結構多いと考えます。例えば、7については日本の学生を考えると、制服、セーラー服を思い浮かべます。キャバ嬢は日本の夜の生活を考えると、最初に思い出すものはキャバ嬢で、喫茶店は日本の生徒のアルバイトや他の日常生活の中でよく出てくる店舗やサービスの一つと考えています。」と解釈した。クラスター3は『11. スカイツリー(+)'』『12. ロリコン(-)』『9. メイド(0)』『4. 侍(+)'』『5. 部活が自由(+)'』の4項目でクラスター名は「日本特有の文化」とした。クラスター3は「クラスター3の中で『9. メイド(0)』と『4. 侍(+)'』は日本特有のようなイメージを持っている文化、11は日本特有の建物です。『5. 部活が自由(+)'』は高校文化、つまり学習文化です。『12. ロリコン(-)』は日本でよく出てくる一つの単語というか、オタク文化の一つの側面、悪影響の側面を扱っています。結構、日本特有のものがあって、日本の文化を表すいくつかの側面と考えています。一番違うと実感できるのは5ですね。一番部活について。中国はほぼないといっても過言ではない国なので。とても堅苦しい勉強生活を実感したので。」と解釈した。

各クラスター間の比較においては、クラスター1と2について「クラスター1は、いくつかの日本特有の文化、クラスター2はその文化からの具体的なイメージのようなもので。例えば、文化祭というと必ず喫茶店が出てくる、勉強という制服、セーラー服が出てくる、というような。武道は日本伝統文化なので、キャバ嬢はほぼ関係ないか。大体こういう文化を表すいくつかの具体的なイメージですね。クラスター2がクラスター1から生まれたような感じですかね。」、クラスター1と3について「クラスター1とクラスター3は、侍は武士の中でとても重要なものの一つ、



図3 被調査者Cのデンドログラム

表3 被調査者Cのイメージを持つようになった切っ掛け

クラスター1	
1. 日本のサブカルチャー (0)	×
2. 若者文化 (0)	×
3. 武士道 (+)	アニメ
6. 文化祭 (+)	アニメ、番組、日本人の友達
クラスター2	
7. セーラー服 (0)	アニメ
10. キャバ嬢 (-)	番組、アニメ
8. 喫茶店 (+)	アニメ、実際に行ってみて
クラスター3	
11. スカイツリー (+)	アニメ、実際に行ってみて
12. ロリコン (-)	アニメ
9. メイド (0)	アニメ
4. 侍 (+)	アニメ
5. 部活が自由 (+)	アニメ、番組、日本人の友達

文化祭と部活が自由はほぼ一致していて、メイドも結構日本の伝統文化の中の一環として考えているので。クラスター3もクラスター1から生まれるというような感じです。」、クラスター2と3について「クラスター2とクラスター3、どちらも文化から生まれる側面だけれども、クラスター2はより現代社会に近いもの、クラスター3の中のメイドや侍など、ほぼ今は見られないものだと考えています。」と解釈した。

全体のイメージについては、「近代、日本のサブカルチャーは世界中によく知られる一つの分野であり、それが日本を知る一つのいい機会というか、日本とは具体的にどのような国なのかを知る一つ結構いい部分だと考えています。(サブカルチャーと日本留学との関係は?) それは私の場合は結構大きな関係があると思っています。私は日本語の勉強の前、まずは日本語学習の面からいうと、私は日本語を勉強する前に日本のサブカルチャーや日本のアニメや番組を結構見て、大体5年間、趣味の一つとしてよく見て、それが日本語の勉強の中で結構助けになるというか、この経験によって日本語の勉強がより易くなったというのは私の実感なんです。具体的にいうと、私は片仮名を勉強する前に日本語を聞いてるだけで何を言ってるかがほぼ分かるようになったのは私の実感なので。そして、日本留学との関係という、それは留学を決める際にどの国に行くかにおいては、一つのかなり重要なインセンティブになりました。」と解釈した。

### 3.4. 被調査者Dの場合

図4は、被調査者Dのデンドログラムである。

クラスター1は『1. 日本のサブカルチャー(0)』『2. 若者文化(0)』『9.SNSを使っている人が多い(0)』の3項目でクラスター名は「若者文化＝SNS」とした。クラスター1は「クラスター1は私の個人的に日本の若い人のイメージとして、若者文化とか、日本のサブカルチャーといったらまず頭から浮かんだことです。SNSは使ってる人が多いですが、これが代表的なイメージです。多分、日本の若い人は普段どんな生活をしているのか、あとは、テレビに出ている若者たちは何を考えているのか、生活や具体的にどんなエンターテインメントを楽しんでいるのか、どのような人間関係

か、いろんな私的なことを含めて、若者文化というイメージがあります。」と解釈した。

クラスター2は『3.漫画とアニメ(0)』『8.秋葉原(0)』『4.J-POP(-)』『5.アイドル文化(+)]』『6.ドラマ(0)』の4項目でクラスター名は「エンターテインメント」とした。クラスター2は「J-POP。クラスター2は若者文化の中でエンターテインメントとして外国人から見ると、日本の若い人の代表的な一番盛んな文化、私のイメージはマンガやJ-POPやドラマやアイドル文化等、そういうのは中国でも人気のある日本の文化です。」と解釈した。

クラスター3は『7.お笑い(+)]』『10.関西人が面白い(+)]』の2項目でクラスター名は「関西＝お笑い」とした。クラスター3は「クラスター3は若い人に限らず、この地域に関してのイメージはお笑い番組や芸人など、あとは関西人が面白いというイメージは私的にはあります。」と解釈した。

各クラスター間の比較においては、クラスター1と2について「クラスター2は若者文化の一番代表的なグループとして、多分、この若者文化から出たものです。クラスター1からクラスター2が生まれた。」、クラスター1と3について「クラスター1とクラスター3は、お笑いはサブカルチャーとして私のイメージがある。でも、若者文化に限らずだと思います。」と解釈した。

全体のイメージについては、「全体的には若者文化が一番代表的だと思います。あとは、クラス

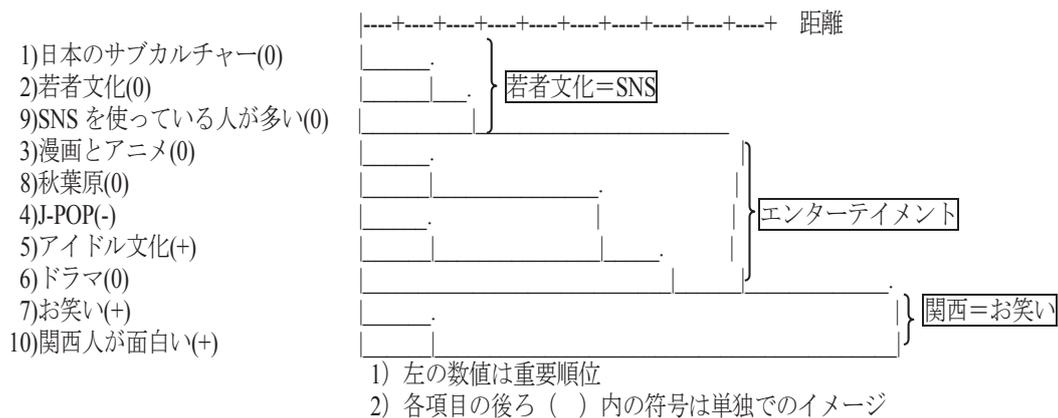


図4 被調査者Dのデンドログラム

表4 被調査者Dのイメージを持つようになった切っ掛け

クラスター1	
1. 日本のサブカルチャー (0)	×
2. 若者文化 (0)	×
9. SNSを使っている人が多い (0)	インターネットで
クラスター2	
3. 漫画とアニメ (0)	テレビで
8. 秋葉原 (0)	実際に行った
4. J-POP (-)	テレビで
5. アイドル文化 (+)	実際に日本人と付き合ってみて
6. ドラマ (0)	テレビで
クラスター3	
7. お笑い (+)	テレビで
10. 関西人が面白い (+)	実際に日本人と付き合ってみて

ター2は外国人から見た日本のサブカルチャーの中で一番盛んなことだと思います。多分、今、若い中国、アジアに限らず、全世界の中で日本のサブカルチャーは外国人にとって、とても魅力的だと思います。(サブカルチャーと日本留学との関係は?) 関係あります。サブカルチャーの中でマンガやアニメやアイドルなどが好きな人は、まず日本語の勉強をしたいという気持ちが絶対に生まれると思います。日本へ留学した理由の一つです。」と解釈した。

#### 4. 考察と今後の課題

##### 4.1. クラスターの比較

ここでは、被調査者4名のデンドログラムの解釈をもとにしたクラスターについて考察を行う。表は、被調査者4名のクラスターの一覧である。

表5 クラスター一覧

クラスター	被調査者A	被調査者B	被調査者C	被調査者D
1	伝統と現代文化	オタク文化	日本文化のジャンル	若者文化＝SNS
2	若者の流行	風俗とエンタメ	学校文化と風俗	エンタメ
3	交通手段	音楽とアーティスト	日本特有の文化	関西＝お笑い
4	—	ファッション	—	—

第3章の被調査者のデンドログラムの解釈をもとに考察すると、被調査者B、C、Dにおいては、クラスター1がクラスター2、3、4の上位項目になっていることが分かる。また、被調査者B、C、Dにおいては、刺激語①日本のサブカルチャー、②若者文化が同じクラスター1とされている。ここから、被調査者B、C、Dは、日本のサブカルチャーと若者文化を同類のもの(クラスター1)と捉え、そこから下位項目(クラスター2、3、4)が派生したと考えていると、推察できる。個々に観察すると、被調査者Bは「サブカルチャーと若者文化」＝「オタク文化」として捉え、その下位項目として「風俗とエンタメ」、「音楽とアーティスト」、「ファッション」があると考えていると思われる。被調査者Cは、「サブカルチャーと若者文化」は「武士道」等の日本文化のジャンルの一つとして捉え、そこから「学校文化と風俗」、「日本特有の文化」が生まれたと考えていると推察できる。被調査者Dは、「サブカルチャーと若者文化」＝「SNS」として捉え、そこから「エンタメ」、「関西＝お笑い」が派生したと考えていると察せられる。一方、被調査者Aは、「サブカルチャー」と「若者文化」を同類のものとは捉えていない。「サブカルチャー」は「祭り」や「多文化社会」等、どちらかと言うと伝統的な文化のイメージとして捉え、「若者文化」は「ツイッター」や「流行語」等の「若者の流行」として考えていると推察できる。以上のことから、サブカルチャーと若者文化は同類のものとして捉えられることがあり、また流行や風俗等を産み出す母体としても考えられていると言えよう。

##### 4.2. 被験者4名のイメージの共通点と特徴

ここでは、被調査者4名の中で複数名に見られるイメージの共通点について考察を行う。

「ソーシャル・ネットワークキング・サービス」(SNS)は被調査者A「インスタ映え」「ツイッター」、被調査者D「SNSを使っている人が多い」に、「お笑い」は被調査者A「芸人」、被調査者D「お笑い」「関西人が面白い」に、「風俗」は被調査者B「ホスト」「メイド」、被調査者C「キャ

バ嬢」「メイド」に、「漫画」は被調査者 A「漫画」、被調査者 D「漫画とアニメ」に、「音楽」は被調査者 B「ライブ」「初音ミク」、被調査者 D「J-POP」に、「東京」は被調査者 B「原宿」、被調査者 C「スカイツリー」、被調査者 D「秋葉原」にそれぞれ見られた。

中国人を対象とした対日観に関する先行研究では、表 6 に見られるようなイメージが観察されており、本研究での「サブカルチャー・若者文化」のイメージとは、全く異なると言えよう。

表 6 対日観とサブカルチャー・若者文化

先行研究での共通イメージ	規則遵守／礼儀正しい／親切／生活水準が高い／外国人差別／曖昧
本研究での共通イメージ	SNS／お笑い／風俗／漫画／音楽／東京

また、被調査者 4 名の共通点としては現れなかったが、各被調査に単独で見られた特徴的なイメージを取り上げる。まず、被調査者 A に見られた特徴としては、「交通手段」が挙げられる。このイメージはインターネットでのドラマやアニメから得られたものであり、来日後、実体験として強化されたものと考えられる。被調査者 B の特徴としては、「ファッション」が挙げられる。「古着」と「原宿」というイメージでクラスターが形成されており、また「山本耀司」というファッションデザイナーの名前も挙げられている。被調査者 C の特徴としては、「学校文化」が挙げられる。「文化祭」、「セーラー服」、「喫茶店」、「部活が自由」というイメージが挙げられている。被調査者 D においては、「アイドル文化」というイメージが見られる。「アイドル文化」を「漫画」、「J-POP」、「ドラマ」等と同類として捉え、中国でも人気のある日本文化としている。

#### 4.3. 日本留学とイメージの切っ掛け

ここでは、サブカルチャーと日本留学の関係とイメージを持った切っ掛けについて考察を行う。

まず、サブカルチャーと日本留学の関係については、被調査者 B 以外は関係があったとした。被調査者 A は、最初に日本語や日本に興味を持った切っ掛けは漫画と述べた。被調査者 C は、日本語を勉強する以前に日本のサブカルチャーやアニメを見ていたと述べた。被調査者 D は、漫画やアニメ、アイドルが好きな人は、日本語の勉強をしたいという気持ちが生まれると述べた。以上、被調査者 A、C、D に共通するものは、漫画、アニメである。日本の漫画、アニメは、クールジャパンの代表として取り上げられるものであるが、大塚 (2018) が述べている通り、中国の大学院生等においてもその影響力は大きいと言える。また、漫画、アニメの影響力は、交換留学生や大学院生だけではなく、中国人訪日旅行客の魅力的な旅行動機にもなっている (付・方 2017)。

次に、イメージを持った切っ掛けについては、インターネットやテレビ等のメディアと、実際の経験 (日本での体験や日本人の友人) に大別できよう。日本に留学する前はメディアを通じてイメージを抱き、日本に留学した後は実際に経験してイメージを強化、あるいは新たに抱くようになるものと考えられる。

#### 4.4. マイナスイメージ

被調査者 4 名がマイナスのイメージを持っているものについて考察を行う。

被調査者 A は、マイナスのイメージを持ったものは無かった。被調査者 B は、「お宅 (オタク)」と「大胃女王 (大食い女王)」にマイナスのイメージを持っている。これについて被調査者 B は「オタク」は「ニートのイメージ」、「大食い女王」は「無理やり食べ物を浪費するイメージ」と述べて

いる。「オタク」については、日本においても以前は家に引きこもって人と交流をせずにマニアックな趣味に走る人というイメージがあったが、昨今は自分の趣味を極めた専門家というイメージも浸透しつつある。この辺りは、日本人の認識と中国人の認識が異なる点かもしれない。「大食い女王」は「フードファイター」と呼ばれることもあるが、日本ではテレビ番組の名物企画として確立しているが、この中国人留学生はエンターテインメントとして楽しむことができないと考えられる。被調査者Cは、「キャバ嬢」と「ロリコン」にマイナスイメージを持っている。これについて被調査者Cは「キャバ嬢」は「日本の夜の生活を考えるとき、最初に思い出すもの」、「ロリコン」は「オタク文化の一つの側面、悪影響の側面」と述べている。「キャバ嬢」については、「日本のアニメやテレビ番組が示した割合としては結構多い」と述べている通り、ドラマ等でマイナスイメージを与えられ取り上げられることが多いからと考えられる。「ロリコン」については、被調査者Bと同じように昔の「オタク」が持つマイナスイメージとして捉えていることが分かる。被調査者Dは、「J-POP」にマイナスのイメージを持っている。被調査者Dは、「J-POP」を漫画、ドラマ、アイドルと並列に扱い、「若い人の代表的な一番盛んな文化」、「中国でも人気のある日本の文化」と述べており、何故マイナスのイメージを持っているのかは不明であるが、個人的な好悪によるものかもしれない。

#### 4.5. まとめと今後の課題

本稿では、中国人交換留学生がサブカルチャーを通じて日本文化をどのようにとらえているのかを考察した。その結果、以下の点が推察された。(1) 中国人交換留学生は日本のサブカルチャーと若者文化を同類のものとして捉えることがある。(2) サブカルチャー・若者文化から流行が産み出されると考えている。(3) サブカルチャー・若者文化として「SNS」、「お笑い」、「風俗」、「漫画」、「音楽」、「東京」というイメージを抱いている。(4) サブカルチャー・若者文化は、伝統的な日本の文化や特徴とは異なると考えている。(5) サブカルチャーの中でも、特に漫画やアニメが日本語学習や日本留学の動機になっている。(6) オタクについてはマイナスイメージを持っている。

以上の点が考察できたが、「サブカルチャー」と一口に言ってもその領域は多岐に渡っており、宮沢他(2017)ではその相関図が示されている。実際、本校でも中国人留学生が抱いたサブカルチャーについてのイメージは多様であった。今後はサブカルチャーの中でも漫画、アニメ等、特定のものに絞り、調査を行いたい。また、サブカルチャーだけではなく、留学生の日本での生活に直接関連するアルバイトを通じた対日観についても取り上げてみたいと考えている。

#### 付記

本論文は、日本学術振興会学術研究助成基金助成金基盤研究C(課題番号:17K02838, 研究代表者:安龍洙)の助成によるものである。

#### 注

- 1) 「①日本のサブカルチャー、②若者文化」は研究者が予め設けた項目でプラス・マイナスのイメージ評価はさせなかったため、本稿では(0)と記す。
- 2) 被調査者Bは「各地巡礼」と述べたが、これは漫画やアニメの舞台となった土地を訪れる「聖地巡礼」のことと思われる。

## 引用文献

- 安龍洙 (2010) 「外国人の対日観に関する研究－中国人非正規留学生の場合」『茨城大学留学生センター紀要』 8, 1-17.
- 安龍洙 (2012) 「外国人の対日観に関する研究－中国の少数民族出身者の場合」『茨城大学留学生センター紀要』 10, 1-14.
- 安龍洙 (2013) 「外国人の対日観に関する研究－中国人留学生の来日前後の対日観を比較して」『茨城大学留学生センター紀要』 11, 1-15.
- 大塚英志 (2018) 「特集 日本研究の道しるべ：必読の 100 冊 ポピュラーカルチャー」『日本研究』 57, 129-142.
- 付靖秋・方蘇春 (2017) 「インバウンド観光におけるコンテンツツーリズム～訪日中国人と知覚リスクを中心に」『聖泉論叢』 25, 57-70.
- 松田勇一・安龍洙 (2018) 「日本社会における中国人交換留学生の異文化理解に関する一考察」『茨城大学全学教育機構論集グローバル教育研究』 1, 69-83.
- 宮沢章夫・大森望・泉麻人・輪島裕介・都築響一・さやわか (2017) 『NHK ニッポン戦後サブカルチャー史 深掘り進化論』NHK 出版
- 独立行政法人日本学生支援機構 (2018) 『JASSO 概要 2018』 [https://www.jasso.go.jp/about/organization/\\_icsFiles/afieldfile/2018/08/03/jasso\\_gaiyou2018.pdf](https://www.jasso.go.jp/about/organization/_icsFiles/afieldfile/2018/08/03/jasso_gaiyou2018.pdf) (2018 年 9 月 26 日閲覧)

## 参考文献

- 安龍洙 (2008a) 「韓国人留学生の対日観の変容に関する一考察－個人別態度構造分析法 (PAC 分析法) を用いて」『留学生交流・指導研究』 10, 31-48.
- 安龍洙 (2008b) 「韓国人の対日観に関する一考察－個人別態度構造分析法 (PAC) を用いて」『ユーラシア研究』 5(3), 107-125.
- 安龍洙 (2009) 「外国人の対日観に関する事例研究－韓国人短期留学生の場合」『茨城大学留学生センター紀要』 7, 1-13.
- 安龍洙 (2010) 「外国人の対日観に関する研究－日本滞在歴の長い韓国人の場合」『ユーラシア研究』 7(4), 373-392.
- 安龍洙 (2011) 「外国人の対日観に関する研究－ベトナム人留学生の場合」『茨城大学留学生センター紀要』 9, 1-18.
- 安龍洙 (2016) 「日本で就職した元韓国人留学生の対日観の変化に関する一考察」『茨城大学留学生センター紀要』 14, 93-105.
- 安龍洙・宋有宰 (2013) 「外国人の対日観に関する研究－日本滞在歴の長い韓国人留学生の場合」『茨城大学留学生センター紀要』 11, 81-96.
- 内藤哲雄 (2002) 『PAC 分析実施入門：「個」を科学する新技法への招待 (改訂版)』ナカニシヤ出版
- 原沢伊都夫 (2013) 『異文化理解入門』研究社, 58-59.
- 松田勇一 (2013) 「外国人の対日観に関する研究－ベトナム人留学生の場合」『茨城大学留学生センター紀要』 11, 97-111.
- 松田勇一 (2014) 「外国人の対日観の変化に関する研究－ウクライナ人留学経験者の場合」『茨城大学留学生センター紀要』 12, 55-74.
- 松田勇一 (2017) 「外国人の対日観の変化に関する研究－台湾人日本永住者の場合」『茨城大学留学生センター紀要』 15, 41-59.

# 映像を用いた実践共有の課題と可能性 —日本語中級クラスにおけるインタビュー・プロジェクトの映像化から—

瀬尾 匡輝\*・瀬尾 悠希子\*\*

(2018年10月1日受理)

## Difficulties and Possibilities of Sharing Teaching Practices with Video: A Case of Project Work in an Intermediate Japanese Language Class

Masaki SEO\* and Yukiko SEO\*\*

(Received October 1, 2018)

### 要旨

本稿では、筆者らが留学生に向けて行った日本語授業を撮影し、それを分析したうえで56分の映像作品として編集し、公開する。映像化した作品では、教科書の日本文化紹介に興味を持った学習者が、プロジェクト活動を通してどのように本質主義的文化観を乗り越えられていたのか、また乗り越えられていなかったのかを描き出す。そして、実践の映像化の過程に注目し、実践を映像作品に編集し、公開・共有することの意義と課題を議論する。

【キーワード】映像による実践の公開・共有、フィールドワーク、記録のための撮影、実践の映像作品化

### 1. はじめに

南出・秋谷(2013)によると、フィールドワークにおけるビデオカメラの活用法には、観察のための撮影と記録のための撮影があるという。観察のための撮影では、フィールドワークのデータ収集や分析を目的にビデオ録画を行う一方で、記録のための撮影では、フィールドワークで撮影した映像を映像作品として編集し、それを上映するという目的に重きが置かれている。言語教育研究の論文においては、これまで専ら前者のデータ収集や分析のためにビデオ撮影が行われ、分析結果は文字や写真などの形で示されてきた一方で、分析のために使用された録画データが編集され上映されることは少ない。だが、文字起こしされたデータや一瞬だけを切り取った写真では、実践者や

---

\*茨城大学全学教育機構 (〒310-8512 水戸市文京 2-1-1; Institute for Liberal Arts Education, Ibaraki University, 2-1-1 Bunkyo Mito-shi 310-8512 Japan)

\*\*獨協大学国際教養学部言語文化学科 (〒340-0042 埼玉県草加市学園町 1-1; Department of Interdisciplinary Studies, Faculty of International Liberal Arts, Dokkyo University, 1-1 Gakuen-cho, Soka-shi 340-0042 Japan)

学習者の表情やジェスチャー、教室内のやりとりなど実践が行われる場の雰囲気や臨場感を描きだすうえで大きな限界がある。場の雰囲気や臨場感を伝えるためには、映像を用いることが最適であり、人々が簡単に映像を録画・編集・公開できるようになった昨今においては、記録のための撮影を基にした実践共有や公開の可能性を追求していく必要があるだろう。そこで、本稿ではその足掛かりとして、筆者らが留学生を対象とした日本語授業を撮影し、それを分析したうえで56分の映像作品として編集、公開することで、映像による実践・研究の共有の課題と可能性を議論する。

## 2. 映像作品で紹介する実践の概要

本稿では、筆者らが茨城大学の日本語中級授業で行ったプロジェクト活動を映像作品にまとめ、公開する。撮影したプロジェクト活動では、受講生達が普段疑問に思っていることについて関係者にインタビューし、そのデータを持ち寄り、解釈について議論をしたうえで、最終的にポスター発表として学内の人々に向けて発表した。プロジェクト活動の流れを表1に記す。

表1 プロジェクト活動の流れ

1回目	ペアでテーマを考え、インタビューの質問を作成する。
授業外	インタビューを実施する。インタビューは15分程度のビデオにまとめる。
2回目	ビデオ（インタビューデータ）を授業で鑑賞し、データの解釈について話し合う。
3回目	評価について話し合う。ポスターの内容を考える。
4回目	ポスターを作成する。
5回目	ポスター発表会

活動には、アメリカ、中国、タイからの交換留学生6名が参加した。動画を撮影する際には、ビデオ撮影及び公開の同意書を用意し、署名してもらった。そして、本稿で映像を公開するにあたり、各協力者に映像を視聴してもらい、公開の許諾を得た。

映像化した作品では、教科書の日本文化紹介に興味を持った学生達が、プロジェクト活動を通してどのように本質主義的文化観を乗り越えられていたのか、また乗り越えられていなかったのかを描き出す。撮影は、実践者のうちの一人が1台のカメラで行った。そして、実践のビデオ録画を文字起こししたものを読み込み、かれらに焦点をあて分析し、一つの映像作品に編集した。

## 3. 映像作品

映像作品をこちらから視聴いただきたい。<https://youtu.be/1Y5jyvIVfxE>



#### 4. 実践を映像化する際の課題と映像化することの意義

実践を映像化するには次のような課題があった。たとえ映像がその場を映し出すといっても、フレームで撮れる範囲は限られており、視聴者に見せるためのテーマやフォーカスを定める必要がある（清矢，2001）。だが、実践を行っている最中はどこに焦点を当てて撮影するのかを定めることは難しかった。本実践開始当初は、1台のカメラで学習者3組を満遍なく撮影していた。なぜなら、授業の実践は複雑かつ豊かであるため（佐藤，1997）、その時点では実践のどこを切り取って共有すればよいか絞ることができなかつたからである。焦点を定めはじめたのは、3回目の授業で、ある1組の学習者の意見が互いにかみ合っていないことに気づいたからだった。筆者らは、ひとまずこのペアを中心に撮影を進め、最終的に2人の葛藤はプロジェクト活動の目的であった日本文化に対する本質主義的見方を見直すということをつりかえるうえで適していると考えたため、この2人を中心に実践を映像化することにした。仮に別のペアを中心に撮影していたら、本プロジェクトの目的をつりかえるのに適した映像が必ずしも撮れていたかどうかわからない。焦点をしばるということはその他の情報をいったん捨て去るということである。映像を用いないフィールドワークでも同様の問題はあるが、映像を撮り最終的に映像を作品とする場合は、撮影していない部分は映像による記録と共有ができないため、さらに大きな課題となると考えられる。

また、実践者自身がビデオ撮影することの難しさが指摘できる。本科目は2名の教員が週に1回ずつ授業を担当していた。瀬尾悠希子が授業をするときは、瀬尾匡輝がビデオ撮影を行っていた。しかし、瀬尾匡輝が授業を担当するときは事情により瀬尾悠希子が授業に参加できなかったため、瀬尾匡輝はカメラを片手に一人で撮影しなければならなかった。授業と同時に撮影しているため、学習者とやりとりをしながら撮影に集中することは困難であった。また、撮影よりも教育を優先するため他の学習者のほうに行かなければならないことも多く、焦点を当てることにしたペアを撮影できないこともあった。だが、やりとりを間近で撮影することができたため、ある意味躍動感のある映像にすることもできた。

さらに、映像であるがゆえに匿名性が守られないという問題もある。文章のみによる論文であれば、参加者の名前や場所を仮名にしてプライバシーを保護することができる。しかしながら、映像ではそれが難しい。そのため、個人情報への配慮をどうするかという問題は一層大きくなる。

では、教育実践を映像作品化することには、どのような意義があるのだろうか。実践者自身が映像を作品化する場合、作品化するまでに経る映像の観察・分析という過程は、多角的な視点からの実践のふりかえりを促す。例えば、筆者の一人は2回目の授業終了時に記したフィールドノートに、学習者はインタビューで得た回答を自分の考えに合わせて解釈しているのではないかと書いた。だが、作品化するために映像を何度も見返すうちに、学習者がインタビューで3分近く自身の意見を述べていることに気づいた。そして、インタビューを受けた日本人学生は学習者の冗長とも言える意見開示に影響を受け、学習者の考えに沿った回答しか述べなかつたのではないかと思うようになった。筆者らは、学習者のインタビューの解釈のしかたに問題があるのではないかという考えからプロジェクト活動でデータセッションを行っていたが、インタビューの方法を学習者に伝えていくことの重要性にも気づくことができたのである。映像は、実践者の記憶やフィールドノートには残されていない情報も鮮明に記録する。作品化の過程でこのような映像を何度も見返し、そこに映されていることを分析することによって、より多角的な実践のふりかえりが可能になる。そして、この多角的なふりかえりこそが、実践をめぐる教師の認識の枠組みを拡張し、教師の知を豊かにするのである。

実践を映像化することの意義は単に自身の実践とより深く向きあえるようになることだけではない。清矢 (2001) は、ビデオを用いたフィールドワークは異なる立場の人々が同じ場面を視聴することを可能にし、対話を促すきっかけになるという。また、たとえ同じ映像を視聴したとしても、映像を見る人の社会的、個人的文脈によってはイメージの解釈が異なるため、一つの映像から思わぬ偶然を見つけたり、視聴者間の社会的な協働を促進したりすることもできるという (バンクス, 2016)。つまり、実践を映像化し、共有することで、同じ場面をより多角的に捉えることが可能になり、協働的な批判的省察の深まりが見込まれるのである。だが、このような他者とよりよい実践に向けたやりとりをすることは、これまで教育現場では多く行われてきた (佐伯他, 2018)。例えば、教育実習において実習生の授業実践をビデオ録画し、それを実習指導担当教員や他の実習生達と視聴することは教員養成課程では当たり前のように行われる活動だろう。だが、本実践の映像化では収集したデータを映像作品として上映する「記録のための撮影」(南出・秋谷, 2013, p. 65) に重きを置いており、文字や写真ではない方法で実践を描きだし、それを論文誌に掲載した。そうすることで、教師教育の場や職場といった限定された人々のみと実践を共有するのではなく、映像による実践共有をより広く開いていくことを試みている。とはいえ、本実践の映像化は、映像を公開したところで留まっており、共有の結果、視聴者や実践者にどのような変化が生じ得るのかはまだ考察できていない。今後は本映像を視聴した人達や実践者にとってどのような学びがあり、どのように映像の共有を通してよりよい実践に向けた対話ができるのかを検証したい。そして、実践の協働的な批判的省察をより開かれた営みとすることを目指していきたい。

## 引用文献

- 佐伯胖・刑部育子・苅宿俊文 (2018) 『ビデオによるリフレクション入門—実践の多義創発性を拓く』 東京大学出版会
- 佐藤学 (1997) 『教師というアポリアー反省的实践へ』 世織書房
- 清矢良崇 (2001) 「研究者が AV 機器を用いるのはなぜか」 石黒広昭 (編) 『AV 機器をもってフィールドへ—保育・教育・社会的実践の理解と研究のために』 新曜社, 29-46.
- バンクス, マーカス (2016) 『質的研究におけるビジュアルデータの使用』 新曜社
- 南出和余・秋谷直矩 (2013) 『フィールドワークと映像実践—研究のためのビデオ撮影入門』 ハーベスト社

## 日本人学生の韓国留学観の変化に関する一考察

高柳 有希\*・安 龍洙\*\*

(2018年10月1日受理)

### Changes in Japanese Students' Attitude toward Study in Korea

Yuki TAKAYANAGI\* and Yong Su AN\*\*

(Received October 1, 2018)

#### 要旨

本稿では、PAC分析法を用いて、韓国留学中の日本人学生3名を対象に3回に渡って韓国留学観について追跡調査を行った。その結果、1回目の調査では、「人と人との距離が近い」「一人で行動（ご飯）しにくい」「酒文化」という項目が被調査者3名に共通して挙げられ、「人と人との距離が近い」に関しては、驚くがプラスに捉え、「一人で行動（ご飯）しにくい」「酒文化」に関してはマイナスに捉えていた。2回目の調査では、「韓国の文化に慣れた」「日本に関心を持ってくれる（親切にしてくれる）人が多い」「韓国語に限らず韓国に関わる仕事したい（将来の選択肢が増えた）」「服は意外と無難（他人と同じにする）」「酒文化」「交通費が安い」という項目が2名以上共通して見受けられ、特に「韓国に慣れた」という特徴が強く伺えた。帰国直前に行った3回目の調査では、被調査者3人に共通して2回目からあまり変化がないこと、韓国に慣れて日韓の違いを意識しなくなったことが示された。しかし、お酒の文化に関してはネガティブな印象が変わらないかむしろは強まる傾向が窺えた。

【キーワード】日本人留学生、韓国留学、追跡調査、留学観の変容、PAC分析

#### 1. はじめに

本研究は、日本社会における日本人と外国人の異文化相互理解について、外国人がどのように理解し評価しているのかを、個人別態度構造分析法（Analysis of Personal Attitude Construct: PAC分析法）を用いて、認知的・情意的観点から探る一連の研究の一部である。

---

\*仁済大学文理科学部国際語文学部日語日文専攻（〒621-749 Inje-ro 197, Gimhae, Gyeongnam, College of Humanities and Sciences, Faculty of International Language and Literature, Major of Japanese Language and Literature, Inje University）

\*\*茨城大学全学教育機構（〒310-8512 水戸市文京 2-1-1; Institute for Liberal Arts Education, Ibaraki University, 2-1-1 Bunkyo Mito-shi 310-8512 Japan）

本稿では韓国に交換留学中の日本人学生3名を対象にPAC分析法を用いて「韓国留学」の特徴及びその変容を探った。外国人学生及び日本人学生の海外留学観を探った先行研究としては安(2014、2016、2018a、2018b)、池田(2014)などが挙げられる。

安(2014)では韓国人留学生を対象に彼らの日本留学観とその変化を探った。その結果、「反日感情」にはマイナスのイメージ、「地震」「原発事故」には不安なイメージ、「優しくて親切な日本人」にはプラスのイメージを持っており、「反日感情」「地震」「原発事故」に関しては日本留学を通してイメージが薄らぎ、マイナスのイメージからプラスのイメージに変わっていることが示された。

安(2016)ではインドネシア人留学生を対象に彼らの日本留学観と留学前後の日本留学観の変化について探った。その結果、2名以上の被調査者に共通して「物価が高い」「模範意識が高い」「本音を出さない」「お酒が好き」「消極的」「時間を守る」「課題・宿題が大変」「季節に対するポジティブな印象」「一人暮らしの楽しさ」「アルバイトについての言及」「自転車の利用」などのイメージが挙げられ、日本人に対する「曖昧さ」「本音をあまり出さない」というイメージは来日後に弱まり、「課題・宿題」に関してはプラスのイメージからマイナスのイメージへ、「飲み会・飲み屋」に関してはマイナスのイメージからプラスのイメージに変わることがわかった。

安(2018a)では東欧出身短期留学生(ロシア、キルギス、ハンガリー、ブルガリア)を対象に彼らの日本留学観を探った。その結果、日本留学について「日本の大学生は外国人に無関心」「日本で知り合った留学生を通して日本以外の国にも興味を持つようになった」とし、日本人及び日本社会について「日本は安全で暮らしやすい」「仕事を重視する社会」とし、留学生と日本人との交流について「外国人との交流に消極的だが、親切で困った時に助けてくれる」とした。また、東欧出身短期留学生たちに共通して、「日本人の優しさ」「日本のサービス」「外国人に対する親切な態度」をポジティブに捉えているということが分かった。

安(2018b)では日韓プログラム14期生の韓国人を対象に、彼らの留学観の特徴と変化について探った。その結果、日本留学に期待を抱く一方で日本の「自然災害」「生活費」「生活環境」に不安を抱いており、来日後は「自然災害」「異なる環境への適応問題」「言葉や文化の違いによる不安」などが解消され、日本社会に適応していった。また日本の「いじめ」や「個人主義」に関しては、来日前のネガティブなイメージが、来日後ポジティブなイメージへ変化した。

池田(2014)では韓国仁済大学で実施された3週間の夏季語学研修に参加した日本人学生を対象に、彼らの海外留学に対するイメージ及び意識の変化を探った。その結果、複数の学生に「異文化体験に大きな意義を感じる」「韓国語を学びたいという気持ちがより一層強まった一方で、留学において言語を重視しない」「留学を自分自身の成長の場だと考える」「留学自体の不安より、留学制度や帰国後の状況が不安」という点が共通して見られた。

本研究では日本人学生3名を対象に、1) 渡韓直後(2017年11月)に1回目の調査、2) 1回目の調査から5ヶ月経過した時点で2回目の調査(2018年3月)、3) 約11ヶ月交換留学を終え帰国する直前に3回目の調査(2018年6月)、をそれぞれ実施し彼らの韓国留学観の特徴と変化について検討した。

## 2. 調査方法

調査は、1部と2部に分けられる。1部は質問紙による調査で、調査協力者の属性を尋ねるフェイスシートと「韓国留学観」に対するイメージ評価からなっている。1部のイメージ評価の手順は

以下の通りである。

- (1) あなたは「①韓国での留学生活、②将来の進路、③私と韓国人との交流」などの表現からどんなイメージが思い浮かびますか？思い浮かんだイメージを「単語、または短い文」で下の【質問Ⅰ・記入例】のように【質問Ⅰ】に記入してください。上記①～③はイメージ項目に入れて、あなた自身のイメージを7個以上書き、全体のイメージ項目が10個以上になるようにしてください。
- (2) (1) で書いたそれぞれの「単語か短い文」が、プラス・マイナスのイメージに関係なく、あなたが「韓国留学」を考える時に、重要と考える順番に並べ替えてください。
- (3) 次に、「重要イメージ」のイメージ項目同士を比較して、二つの組み合わせがどの程度近いのか、判断していただきます。最初に、①と②を比較します。①と②の関係が、直感的なイメージやその内容から見て、どの程度近いのか、次の尺度で判断して、「1、2、3、・・・」と書いてください。同じ要領で、①と③、①と④・・・というふうに、最後の組み合わせまで比較して、記号1、2、3などで書いてください。尺度は、非常に近い=1/かなり近い=2/いくぶん近い=3/どちらともいえない=4/いくぶん遠い=5/かなり遠い=6/非常に遠い=7とします。

上記(3)において作成された「重要イメージ対比表」を基に、ワード法でクラスター分析をし、デンドログラムを作成した上で、2部のインタビューによる調査を行った。2部の調査では個々の調査協力者のデンドログラムに基づき、インタビューによる調査を行った。まず、調査協力者にクラスター分析を行ったデンドログラムを見せ、各項目についての説明やクラスター分けについての解釈について尋ねた。最後に、連想項目のイメージについて、プラスイメージの場合は(+)、マイナスイメージの場合は(-)、どちらともいえない場合は(0)の記号を記入してもらい、各イメージを抱くようになったきっかけや媒体などを尋ねた。1回目の調査は、第2著者立会いのもと第1著者と共同で行った。また、2回目と3回目の調査は第1著者が行ったが、1回目の調査で得られたデンドログラムを提示し、1) その時点での各クラスター及びクラスター全体についての解釈、2) 各クラスターを見て、イメージが変わったり無くなったりしたことや新しくイメージが生まれたことがないか、について尋ねた。

### 3. 結果

ここでは、まずクラスター分析の結果を示し被調査者自身の解釈について述べる。

#### 3.1. 被調査者 A

図1は被調査者Aの1回目の調査時のデンドログラムである。

被調査者Aのクラスター1～クラスター4までのクラスター解釈を以下の表1に示す。また、クラスター名については、クラスター1を「将来と留学の関係」、クラスター2を「留学生活」、クラスター3を「韓国人に感じる事」、クラスター4を「韓国文化について」とした。

クラスター1では、1回目2回目ともに将来に関わるという部分で共通しているもの、韓国のテレビを中心に話した1回目と比べて、2回目は日本のテレビの良さにも気づいたということと話している。3回目では特に変化はない。クラスター2では、1回目には韓国人にどれほど踏み込んでいいかわからないと話していたのに対し、2回目では具体的なエピソードも混じえて韓国人との絆に関して嬉しそうに話してくれた。それと同時に、人間関係において日韓の国は関係なく、結局は人の問題だということも話してくれた。3回目では、韓国人との嬉しいエピソードを混じえながら、

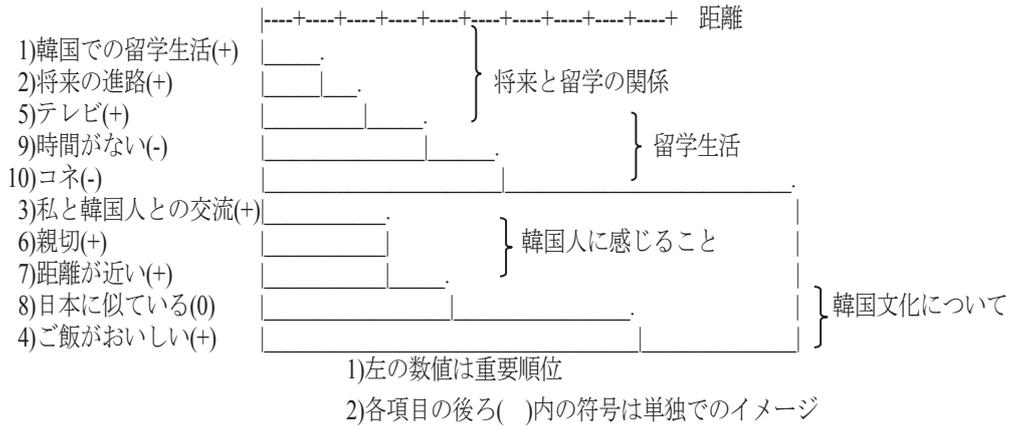


図1 被調査者Aのデンドログラム

中身の濃い時間を送れたと話し、留学の限られた時間に関してもポジティブな印象になったと答えた。クラスター3では、1回目で、嬉しいが驚いてしまう「韓国人の踏み込んだ親切」や「距離の近さ」について話していましたが、2回目ではその背景にある「韓国人のパーソナリティゾーンの狭さ」に気づいたことやストレートな表現に見えて実はすごく考えて発言していることに気づいたなど、韓国生活を通して人の内面を理解していることが伺えた。3回目では、2回目で話していた「ストレートな表現の裏でよく考えている」という印象が薄れ、韓国人はいいことも悪いこともストレートに表現していると話していた。クラスター4では、2回目で韓国の交通費が安いことやおかずが無料ででてくるなどの韓国ならではの良いところを挙げながらも、日韓の区別をあまり意識しなくなって、「“韓国の” 良いところ」と考えても、あえて出てこなくなったということも話していた。3回目では2回目とあまり変化は無かった。

全体として、被調査者Aは留学を通して韓国人や韓国文化に深く溶け込み、日本と特に区別して意識しなくなっている印象を受ける。また、短期ではなく留学として韓国に来れたからこそ、韓国人との深いつながりが持てたと話した。

表1 被調査者Aのクラスター解釈

クラスター1：『1) 韓国での留学生生活(+)] 『2) 将来の進路(+)] 『5) テレビ(+)] ([10) コネ(-)]	
1回目	将来の進路に対するイメージ。韓国のテレビに関係した仕事をしたい。タシボギ（再視聴）、VODなど韓国のテレビの多様性に驚いた。韓国のテレビについてもっと知らなくてはと思う。テレビ業界はコネが大切。
2回目	留学が終わったあとの将来に対するイメージ。日本に一時帰国時、日本のテレビ業界にも興味が広がった。地方局が人の10年を追ったドキュメンタリーなどを作っているなど、韓国に出たことによって日本のテレビの魅力に気づいた。韓国はコンテンツが多くて選べるけれど、日本は番組の種類が少ない分、集中してテレビを見ている。韓国はドラマを番組局が作らなくて、日本は番組局が作るからシリーズものができるということも分かった。韓国の老人はテレビを本当によく見る。イケメンは万国共通。日本のスターは韓国でも人気だし、それが共通の話題になる。
3回目	留学と将来に関わる事。2回目とあまり変わらない。やはり、日韓どちらのテレビも好き。テレビに加えて日韓共に「YouTube」なども盛んだと感じた。
クラスター2：『9) 時間がない(-)] ([10) コネ(-)] 『3) 私と韓国人との交流(+)]	
1回目	留学生活で大事にしたいこと。試験など時間に追われる。限られた韓国人の知り合いとよりしっかり向き合いたい。韓国は、知り合うのは簡単だけど本当に仲良くなるのは難しい。韓国人の生活のテリトリーにどこまで踏み込んでいいかわからない。

2回目	韓国にいる今のイメージ。コネに関しては、学生としては関係ないと思った。韓国人の交流に関しては、韓国人だからとか日本人だからとかは関係なくて、結局は人だと思う。なかなか会えない人（韓国人）でもすごく自分のことを大事してくれる。意外と日本に関心を持ってきている人が多い。
3回目	韓国での生活。留学生活の通していやらしい意味の「コネ」ではなく純粋な人との「コネクション」が増えた。韓国人との交流では、会えば会うほど仲良くなる感じがある。交流に対する良いイメージはさらに強まった。時間に関しては、外国人の自分に声をかけてくれることのありがたさがあった。誘われることすべてに参加していたら時間が無くなってしまった感じ。時間が無いことに対するイメージは、悪いことばかりではないと思った。
クラスター 3：『6』親切(+』『7』距離が近い(+』	
1回目	韓国人のイメージ。バスで他の子供が泣いていたら、他人であってもみんなであやすといったような一歩踏み込んだ親切が印象的。知らない人同士でも、距離が近いと思った。個人的には嬉しいけれど、慣れていなくてびっくりする。
2回目	私が韓国の人に思うこと。韓国の人には距離が近いイメージだったけれど、それは積極的に韓国人の人がくるというかは、韓国の人個人のパーソナリティゾーンが狭いからだと感じた。日本人に比べて韓国人はストレートに表現するように見えるが、実は結構考えて話していると思った。
3回目	韓国の友達のイメージ・人間性。日本語や日本文化を知っていない韓国人とも仲良くなってきたが、その友達がワールドカップで日本と一緒に応援してくれたりして嬉しかった。前学期で仲良くなった韓国人の友達が、今学期に茨城大学に留学に行って自分の友達とつながってるのが嬉しい。2回目の時に感じた「ストレートな表現の裏でよく考えている」というイメージは薄れた。いいことも悪いこともストレートに表現するから、すべて真に受けていたら、誤解が生まれるかもしれないし、いけないと思った。前会った時には悪口を言っていたけど、知らないうちに仲直りしていいことを突然言い出したりする。韓国の人には喧嘩しても仲直りが早い。
クラスター 4：『8』日本に似ている(0』『4』ご飯がおいしい(+』	
1回目	韓国の文化。目上の人を敬うことや、挨拶をしっかりするなど礼儀が似ていて共感しやすい。韓国が好きになってから辛いご飯も食べられるようになったので、ご飯も美味しく食べられる。
2回目	韓国のいいところ。韓国に慣れて、あまり「韓国が」どうか感じなくなってきた。おかずが無料。国内移動や、日本との行き来も含めて交通費が安いのが良いと思う。
3回目	韓国に親しみを感じるところ。2回目と大きく変化はない。顔が似ていたり、白ご飯があったりするのもいい。韓国の方が楽だと思うところは、夜にお店がやっていること、夜一人で歩きやすいこと、交通費が安いこと、ご飯代が安いことなどがある。
クラスター全体	
1回目	将来やりたいことがあったからこそ、この韓国留学があったと思う。韓国のテレビの進んだシステムがやはり面白い。
2回目	韓国人になった感じ。都合のいい時だけ日本人ぶるところはあるかも。心が広くなりたい。
3回目	交換留学で、2週間の短期研修ではできない深い付き合いができた。韓国人は、仲良くなる時間は早いけど、より深い関係になるのは半年以上の時間が必要だと感じた。1年という時間があったからこそ、韓国人の友達と本心を語れる仲になれた。何ごとにも外に出るのが大事だと思った。

### 3.2. 被調査者 B

図2は被調査者Bの1回目の調査時のデンドログラムである。

被調査者Bのクラスター1～クラスター5までのクラスター解釈を以下の表1に示す。また、クラスター名については、クラスター1を「韓国生活の中での意外性」、クラスター2を「仕事選択時に考える生活のし易さし難さ」、クラスター3を「韓国人と付き合っていく上で感じたこと」、クラスター4を「実際に生活して見えた韓国生活の実態」、クラスター5を「ファッション（日本で普段感じる発展してほしいところ）」とした。

クラスター1では、1回目で日本にはない韓国のフレンドリーさや、韓国の中での日本（日本人）について、また日本人の自分が直接感じる韓国など、日韓に焦点を当てて話していたが、2回目で

は韓国に限らず世界の国の中の日本に関して話したい。3回目では、2回目とあまり変化がないと話した。クラスター2では、韓国には辛いものか甘いものしかないと感じていた1回目と比べて、2回目では韓国料理にも様々な味、料理があることがわかったと話した。また、1回目では自分の将来について「韓国語を使う」ことにこだわっていたが、2回目では「韓国に関わって留学経験を生かせる仕事がしたい」と話し、被調査者Bの視野の広がりを感じさせる。3回目では2回目

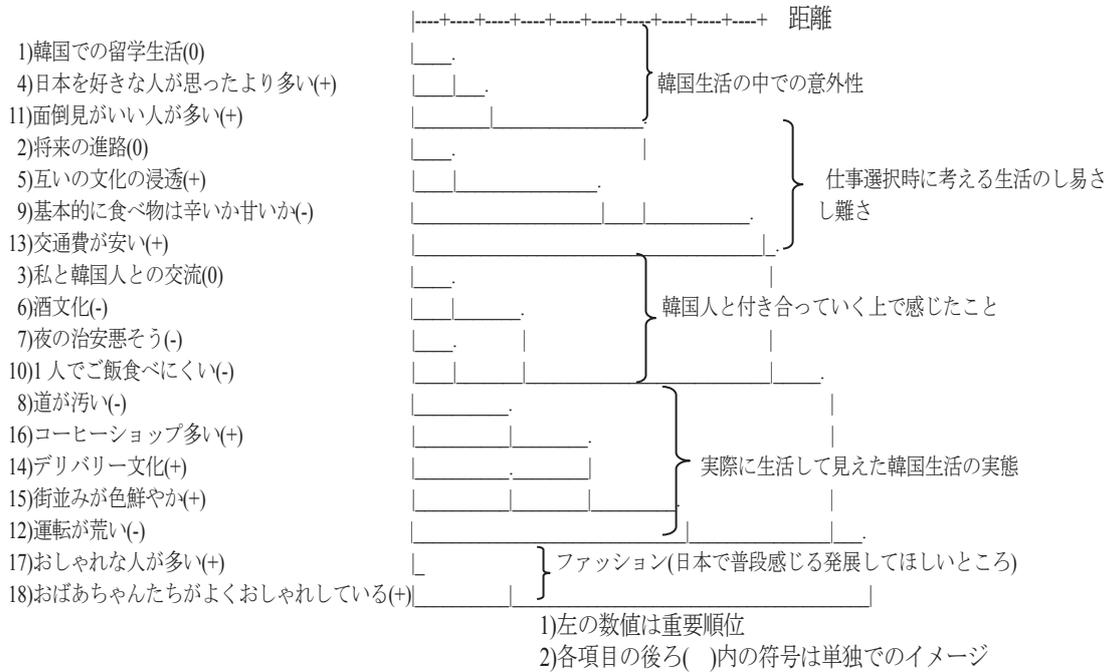


図2 被調査者Bのデンドログラム

表2 被調査者Bのクラスター解釈

<p>クラスター1: 『1) 韓国での留学生活(0)』 『4) 日本を好きな人が思ったより多い(+)] 『11) 面倒見がいい人が多い(+)]</p>	
1回目	<p>韓国で過ごさなかったらわからなかった韓国人の人のことについて。もともと韓国が好きで日本にいるときから韓国のことを調べて知っているつもりでいたが、日本では韓国の悪いニュースばかり(とくに釜山では慰安婦像のこと)がとりあげられているので、韓国で日本はあまり好かれていないと思っていたが、実際は日本人ということですのでごく良くしてもらって驚いた。また、チューターの韓国人やカフェで出会った人たちが、「ご飯行こう」「家にもおいで」などすぐ言ってくれて、韓国人の人は自分の内側に人を入れるのが早いな、フレンドリーだなと思った。</p>
2回目	<p>実際に韓国で生活していて、人と接する中での意外性。韓国人からだけではなく違う国の人たちからも日本人ということで親切にもらえたり、好いてもらえたりすることが多い。また、1回目の時に比べて、無くなったイメージ項目は無い。人脈が広がって、日本と関わりが無い韓国人とも関わる機会が増えたが(学校外の人も含む)、日本人を珍しく思って親切にしてくれる人も多いと新たに感じた。</p>
3回目	<p>韓国での人との関係。2回目と変わらない。韓国人の方は、知り合いに日本留学をした人がいたり、家族が日本に住んでいたりと、意外と日本との関わりがある人が多いと思った。</p>
<p>クラスター2: 『2) 将来の進路(0)』 『5) 互いの文化の浸透(+)] 『9) 基本的に食べ物は辛いかわいかわい(-)] 『13) 交通費が安い(+)]</p>	
1回目	<p>韓国の一般的な文化。韓国はメニューの種類が少なくてしょっぱいものがあまりない。韓国料理のお店が本当に多い。日本では韓国のK-POPやファッション、メイクが浸透しているが、韓国では日本の食(おでんなど)や、漫画アニメなどが浸透している印象を受ける。韓国に実際に来てみて、これらの印象は強くなった。</p>

2回目	将来の進路を決める際考慮する部分。食べ物に関してのイメージが弱くなった。韓国料理は辛いものや甘いものだけではなく、種類がたくさんあることを知った。10月の時は韓国語を使った仕事につきたいと思っていたが、今は韓国と関わって自分の留学経験を活かせる仕事なら何でもしたいと思うようになった。
3回目	2回目から変化はない。
クラスター3：『3) 私と韓国人との交流(0)』『6) 酒文化(-)』『7) 夜の治安悪そう(-)』『10) 1人でご飯食べにくい(-)』	
1回目	韓国の現地で過ごしてみてわかったこと。日本よりも、わいわいお酒を飲むこと（ゲームをしてお酒を飲ませること）への抵抗感が無い感じがした。日本では、お酒を飲むときもゲームをしたり無理やり飲ませたりはしないから韓国の酒文化に驚いた。個人的には、ゲームとかがあると飲み会に行きたくないけれど、行かないと友達との出会いの場が無いから仕方なく行っている。治安が悪そうと思ったのは、実際に怖い目にあったことは無いけれど、韓国人の友達が夜の外出を注意してくれて、人気の少ないところは怖そうに感じたから。
2回目	韓国人の友達と過ごしながら感じたこと。お酒文化に関してはイメージが強くなった。学校の周りに居酒屋が多くて、外に机を出しておじさんや学生たちがお酒を飲んでいるのを見ると、お酒文化が日常化している印象を受ける。裏通りやモール街、飲み屋の多い通りはやはり10月と同じで怖く感じる。一人でご飯を食べにくいことに関してもイメージはあまり変わっていない。新たに日韓の「相槌」の違いを感じた。日本人（自分）の相槌リアクションがウケたりすることが多い。
3回目	韓国人の人の付き合い方。日本の1人文化と韓国のみんなと過ごす文化、それぞれ違いは感じるがどちらもいいと思う。お酒の文化に関しては嫌だなと思う気持ちが強くなった。先生と飲むときに一気に飲みしなくてはいけないとか、先輩のお酒を断れないのは、健康にも悪いし理解できない。異文化として一定期間体験するのはいいが、これが日常なら耐えられない。
クラスター4：『8) 道が汚い(-)』『16) コーヒーショップ多い(+)'』『14) デリバリー文化(+)'』『15) 街並みが色鮮やか(+)'』『12) 運転が荒い(-)』	
1回目	韓国の街並み。韓国の街の上を見ていると、夜遅くまでネオンが光っていたり色鮮やかな感じがするけれど、下を見ると路上駐車があったりゴミが落ちていて、ごちゃごちゃしている印象を受ける。韓国は、テイクアウトがOKだったり、持ち帰りがよくできたりすることに驚いた。実際、韓国の出前を利用した時、おまけでコーラやおかずなど付いてくることに驚いた。とても便利だが、出前が二人前以上からなので、一人では利用しにくいと思った。運転の荒さに関しては、少し印象が悪くなった。
2回目	韓国の建物や街並みに関して。10月の時（1回目）と変わりが無い。建物が立つのが早いこと、トイレが汚いこと、お店の立ち代わりが早いこと、大学の坂が多いこと新たに感じた。韓国の大学は基本坂があるので、坂がないことが大学の売りになっているのを見て驚いた。18禁のCDが売っていることに驚いた。履修登録などの重要な連絡も遅くてびっくりした。
3回目	韓国の常識。新たに、バスや電車の中の電話が気になったが、静かに話すなど配慮があるので問題ないと思った。連絡の遅さは2回目と変わらない。タバコ文化について、日本は店の中で喫煙できるのは気分が悪いがよく分煙されている。韓国では店での喫煙が一切できなくていいが、喫煙所もほとんどないので道に吸い殻が落ちていたり、道でタバコのおいを嗅ぐことがあったりして良くない。それぞれ長所と短所があると思った。また、夜に出歩く人が多い。
クラスター5：『17) おしゃれな人が多い(+)'』『18) おばあちゃんたちがよくおしゃれしている(+)'』	
1回目	韓国人の人の服装に関して。女性に関しては、身なりで日韓あまり違う感じはしないが、男性に関しては韓国人の方が髪の毛などしっかりセットしているなど、身なりに気を遣っている感じがする。日本の男性はジーンズとかをよく履いているが、韓国の男性はスキニーや綿パンなどすっきりした服装をしている気がする。おばあちゃんに関しては、韓国人の人は髪を明るく染めたりショッキングピンクを着たり派手、日本の人は髪は白髪染め程度で、服も「小豆色」のような落ち着いた色をよく着ている。おばあちゃんのファッションに関しては韓国に来て初めて感じたので驚いた。
2回目	街を歩いている人。それぞれのイメージが無くなってきた。前は、日本人から見て韓国人のファッションセンスがおしゃれだと思っていたが、今は韓国生活をして感覚が韓国に近づいたからか、みんなが流行の服を着ていて、それを着ておけば無難だなということがわかってしまった。
3回目	2回目から変化はない。カップルのいちゃつきが目につく。でも、お年寄りのご夫婦が手をつないでいるのは微笑ましい。若者のカップルに関しては目のやり場に困るが、別に悪い感じはしない。

クラスター全体	
1回目	もっと韓国の人と親しくなりたい。もっとお互いの文化を分かり合いたい。マスコミを通してではなく、自分が直接韓国を感じることができる状況を作れたことが、この留学の良いところだと思っている。韓国人と交流して、新しい考えや習慣を学べるから嬉しいけれど、文化の違いもあるから良いことばかりではないなとも思った。韓国人の「人を内側に入れる早さ。フレンドリーさ」は日本人もこれを見習えば、外国人の人に対してもっとフレンドリーになれるのではないかと思った。また、韓国はいろいろ誘ってくれても日時や内容の詳細を全然教えてもらえないことが多いことに戸惑う。あとは、カップルや夫婦の熱々なスキンシップに驚いたりしたが、愛情表現の豊かさが良いと思った。自分が韓国の人にスキンシップをされてもそこまで嫌ではない。おしゃれとしてタトゥーが一般的なのは分かるが、やはり怖いと感じてしまう。
2回目	留学を通して、自分が大胆になれている感じがした。韓国にいと分からないことを自分で聞いたり、何とかしなくてはいけないから、日本に一時帰国した際にも自分が前よりも行動的になっていると感じた。
3回目	自分に自信がついた。留学を通して、本心で気持ちを言い合える友達（日本人や日本語の分かる韓国人）がいることの大切さ、出前の注文など勇気が必要な時に背中を押してくれる仲間の存在の大切さを感じた。異文化の中では「思い切り」や「広い視野」が必要だと思った。

と変化が無かった。クラスター3では、お酒文化に関して、韓国の街の様子から印象が強くなったと話したが、1回目に話したようなお酒を無理に飲ませることは触れなかった。また、夜の街が怖く感じることは1回目と変わらず、新たに日本人のリアクションや相槌が韓国でウケることについて話した。3回目では、韓国と日本のそれぞれの文化の良さを話しながら、お酒に関するマイナスなイメージは強まっていた。クラスター4では、全体的に1回目と変わらず、新たに「建物が立つのが早いこと」「トイレが汚いこと」「お店の立ち代わりが早いこと」「大学の坂が多いこと」のイメージが追加された。3回目では、新たに、「電車内の通話」「タバコ文化」などが加わりながら、日韓どちらの文化にも長所と短所があると話した。クラスター5に関しては、2回目でイメージが無くなってきたと答えた。理由は、「韓国に来る前、来てすぐの頃は日本と違う韓国のファッションをおしゃれと感じたが、もう韓国に慣れて特別に思わなくなった」というものである。3回目ではあまり変化が無かった。

全体として被調査者Bは1回目では「韓国人と親しくなりたい」「韓国人のようなフレンドリーさを日本人も見習ったらいい」などこれからの希望が話されていたのに対し、2回目では「韓国がどうかではなく、「留学を通して自分が大胆になれた」と話した。被調査者Bが韓国に慣れ、あまり特別に意識しなくなっていることはこれ以外にクラスター5の結果を見ても分かる。3回目では、留学全体を通して日韓に心から分かり会える友達ができることが良かったと話した。

### 3.3. 被調査者C

図3は被調査者Cの1回目の調査時のデンドログラムである。

被調査者Cのクラスター1～クラスター3までのクラスター解釈を以下の表3に示す。また、クラスター名については、クラスター1を「私の人生」、クラスター2を「韓国に来てプラスに思った点・気づいた点」、クラスター3を「韓国に来て困惑した点・その他」とした。

クラスター1では、自分の韓国に関わる将来について考えることに変わりはないが、1回目では「通訳」と考えていた将来のビジョンが、2回目では「翻訳以外にも、留学中の経験や日本語の教科書出版に携わったことから、翻訳や出版に関わる仕事がしたい」と幅が広がった様子が伺える。3回目では、韓国の生活に慣れすぎて区別がなくなったり、韓国での治安が良いことと日本人

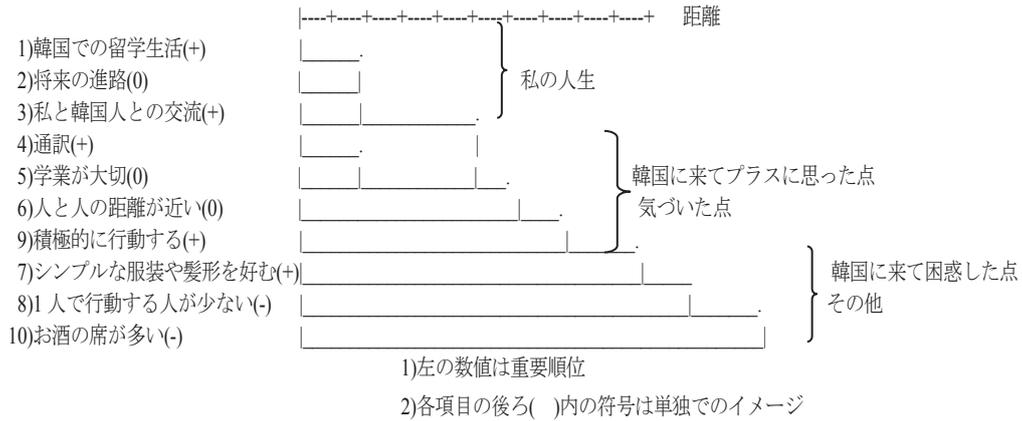


図3 被調査者Cのデンドログラム

に親切にしてくれる人が多かったりすることもあり、卒業後韓国での生活も十分できると話した。クラスター2では、1回目では韓国生活の中で新鮮に感じていたり頑張らなくてはと気張っていたりしたもの、2回目では慣れたと話した。3回目も、学業や人の近さに慣れ、学業に関しては容

表3 被調査者Cのクラスター解釈

クラスター1：『1) 韓国での留学生活(+)] 『2) 将来の進路(0)] 『3) 私と韓国人との交流(+)]	
1回目	昔の私の憧れ、今は考えなくてはいけないこと。自分が韓国の音楽やドラマなどに興味を持つようになってから韓国についていろいろ調べたが、実際旅行で韓国に来たのは一度だけ。韓国人と直接関わる機会がなかった。将来も韓国語をつかった仕事をしたい。韓国に来てみたら、韓国人との関わりの中で、憧れだけではダメで自分から行動しなくてはいけないと思った。文化の理解(急に物事が進んだり、急に予定が決まったりするところ)などしなくてはいけないと思った。韓国人の積極性に触れて嬉しい。自分もそうなりたと思った。
2回目	自分の中で深く考えなくては行けない部分。将来の進路に関してこれからどうするか真剣に考える機会が増えた。留学で学びながら、具体的に言語とどのように関わっていくか真剣に考えるようになった。翻訳、通訳だけではなく、本の翻訳出版の手伝いにも興味が湧いた。韓国の生活に違和感がなくなり、授業の韓国語にも緊張しなくなった。留学の終わりが見えて、また友達が軍隊や卒業でいなくなり、人との関わりをより求めるようになった。
3回目	韓国に慣れすぎて、日本との違いなど全然気が付かなくなるほどになった。他学科の韓国人の友達との交流を通して、聞き取れない韓国語などがあったり、通訳のお仕事では専門用語の知識が必要だったり、韓国では英語の条件が厳しいこともあって、将来の進路で通訳は現実的に難しいかなと思った。でも、韓国と関わらない将来は考えられないので、貿易など視野を広げて韓国に関わる仕事を探そうと思った。韓国で就職しても生活に対して不安はない。日本に好感をもってくれている人が多く、反日やすりなどの治安に関して心配ない。
クラスター2：『4) 通訳(+)] 『5) 学業が大切(0)] 『6) 人と人の距離が近い(0)] 『9) 積極的に行動する(+)]	
1回目	自分が韓国に来て気づいたり考えたりしているもの。どれも良いイメージ。日本ではあまり目標意識がなく勉強している感じだが、韓国は目標意識をもって一生懸命勉強しているところを見習わなくてはと思う。日本人のたてまえみたいなものがなくて、相手の想いを知りやすい。人付き合いしやすい。韓国人の積極性に触れて、少し自分も積極的になれてきたと思う。留学に来て将来の「通訳」になるビジョンが鮮明になってきた。
2回目	はじめより慣れたもの。イメージが薄くなったもの。初めはすごく意識していたものが、韓国生活に慣れてあまり意識しなくなった。人の距離感に関しても慣れてしまって気にならなくなった。一時帰国した時に日本人の友達と並んで歩いて、すこし物理的な距離があるように逆に気になった。積極的に行動することも前より気張らずに調節できるようになった。通訳というのは、人と人の間だけではなく、自分の頭の中でもされているということに気づいた。

3回目	<p>学業や人との距離の近さに関して、韓国生活に慣れすぎて今は何も感じなくなった。留学生だからというのもあるかもしれないが、韓国生活の中での容量を得た感じがある。通訳に対しては大変なイメージが強まった。積極性が成長して、知らない人と初めて会って新しい友達を作ることでもできるようになった。留学前では考えられないほどの積極性を得たと思う。日本で同じようにできるかわからないが、海外だからこそ自分の殻を打ち破れた。</p>
<p>クラスター3: 『7) シンプルな服装や髪形を好む(+)] 『8) 1人で行動する人が少ない(-)] 『10) お酒の席が多い(-)]</p>	
1回目	<p>日本との決定的な違い。韓国の少し派手目な服装や髪型が日本で流行しているが、実際はそれとは違って落ち着いた服や髪型をする人が多いと感じた。日本では一人で行動することは普通にあるが、韓国では一人していると「友達いない」とか「可愛そう」と誤解されるのが不便。韓国でのお酒の席では、お酒を飲ませるゲームがあって大変。お酒の種類もビールと焼酎ばかりでカクテルなどがないにも驚いた。</p>
2回目	<p>生活において感じたこと(良いこと悪いこと含む)。服装や髪型に関して、日本より韓国は人と同じようにする傾向があるように思った。日本は人と同じものを持っていると変な感じになったりするが、韓国は同じでも気にしないと思った。一人で行動する人が少ないと思っていたものは、薄くなった。意外と一人でいる人をよく見るようになった。お酒に関して、事あるごとに乾杯する、ペースが早い感じがした。お酒のゲームに関しては全然慣れない。日本はゲームしながらあまりお酒を飲まないから、韓国のお酒ゲームは不思議。また、新たに「人とぶつかっても気にしないおばさん」のイメージが追加された。思ったより韓国では日本に関心がある人が多いと思った。勉強している学生に優しい。受験生割引や勉強できるカフェが多い。韓国の交通費の金額に慣れて日本ののが高く感じる。韓国のカード文化にも慣れて、サインを適当に書くのがくせになってしまった。先生が優しくてフレンドリー。</p>
3回目	<p>服装や髪形、1人で行動する人が少ないことなどは、感じなくなった。服装や髪型に関しては、シンプル(似ている)ながら違いが分かるようになった。お酒の席に関しては、2回目の時より機会が減ったり、外国人ということでお酒の罰ゲームを免除してもらったりして楽になった。でも、お酒の席で前のようなゲームがあるとしたら、自分がお酒に強くないのもあってプレッシャーを感じる。韓国の飲み会は、ガヤガヤしていて叫んでいる人が多くて、びっくりする。自分が留学生だからか先生が優しくてフレンドリーというところは2回目より増した。</p>
<p>クラスター全体</p>	
1回目	<p>韓国での生活と将来。インタビューを通して自分が今何を思っているのか整理できた感じ。自分の将来も考えた上で韓国の何を苦手にして何を好きに思っているのか整理できた。</p>
2回目	<p>韓国の文化に対して寛容になった。</p>
3回目	<p>韓国での1年の留学を通して嫌なことはあんまりなかった。いい思い出が残っている。自分に親切してくれる韓国人の友達や先生から、なぜ私たちに親切にしてくれるのか話を聞いた時、日本に行って日本人に親切にもらった恩返しをしたいと思っていてくれたり、逆に日本で苦勞をしてその部分を気遣ってくれていると分かってとても感動した。前学期と違って、今学期のパディ活動が業務的な感じがして少し嫌な感じがあたり、今学期は中国語の授業も履修して頭の中で言語が混ざってしまったりして大変だったけれど、全体としてプラスな思い出が多い。</p>

量がついたと話した。また、韓国にいるうちに自分がとても積極的になれたと言う。クラスター3では、1回目に日韓の違いで注目していた部分が、2回目ではただ「生活において感じたこと」に変化した。また、「一人で行動する人が少ない」という項目は、韓国で生活しながら薄れたと言う。新たに追加されたイメージとしては、「韓国は人と同じことに抵抗がないこと」「人とぶつかっても気にしないおばさん」「思ったより韓国では日本に関心がある人が多い」「勉強している学生に優しい」「受験生割引や勉強できるカフェが多い」「韓国の交通費の金額に慣れた」「韓国のカード文化にも慣れて、サインを適当に書く」「韓国の先生が優しくてフレンドリー」があった。お酒に関して大変と感じるのは変化がなかった。3回目では、韓国の服装や髪型、一人で行動する人が少ないことなどが気にならなくなったと話した。

全体として、留学を通して被調査者Cは「韓国の文化に対して寛容になった」と答えた。クラ

スター1から3を見ても、韓国で生活をしながら「慣れた」「広く考えるようになった」という項目が多く見られる。また、帰国直前の3回目では、留学全体を振り返って、いい思い出が多かったと話した。

#### 4. 結果

##### 1) 1回目調査の特徴

1回目の調査では、「人と人との距離が近い」「一人で行動（ご飯）しにくい」「酒文化」というのが共通して挙げられた。そして、人と人との距離が近いことに関しては、驚くがプラスに捉えていることが分かった。また、「一人で行動（ご飯）しにくい」「酒文化」に関してはマイナスのイメージを持っていることも共通している。

##### 2) 2回目調査の特徴

まず、2回目の被調査者の共通点に注目してみると、「韓国の文化に慣れた」「日本に関心を持ってくれる（親切にしてくれる）人が多い」「韓国語に限らず韓国に関わる仕事したい（将来の選択肢が増えた）」「服は意外と無難（他人と同じにする）」「酒文化」「交通費が安い」という項目が2人以上共通して見受けられた。このうち、「韓国の文化に慣れた」「韓国語に限らず韓国に関わる仕事したい（将来の選択肢が増えた）」というのは被調査者3人全員から新たに出てきたもので、留学を通して韓国の文化に慣れ、「日本は」「韓国は」と身構えて考えることが無くなり、韓国生活への不安感が解消され、また将来に対する視野も広がっている様子が質問全体を通して見受けられた。「日本に関心を持ってくれる（親切にしてくれる）人が多い」に関しては、1回目では被調査者Bのみが話していたが、2回目で被調査者Aが新たに挙げており、留学を通して韓国の方が日本での反日報道とは違い日本に対して優しいことを感じていることが分かる。「服は意外と無難（他人と同じにする）」ということに関しては、1回目で、被調査者Bは「おしゃれ」被調査者Cは「シンプル」というイメージを持っていたのが、2回目では「無難」「他人と同じにする」といったイメージが変わっていた。そして、「酒文化」に関しては、一回目とイメージが変わらないか強くなったと話していた。これは韓国生活の中でお酒を飲む機会が多いことと、乾杯や飲ませるゲームが多いことによると話した。また「交通費が安い」と感じるということも、共通して見受けられた。

また、共通したものではないが、被調査者Aの「テレビ」に関して留学を通して母国（日本）のテレビの魅力にも新たに気づいたと話し、母国への関心が新たに追加されたところが特徴的である。各被調査者から韓国に関して挙げられた新たなイメージ（共通したイメージは除く）としては、「韓国人の表現はストレートに見えて実はすごく考えている」「おかずが無料」「日韓でリアクションが違う（日本はリアクションが大きい）」「建物が立つのが早い」「トイレが汚い」「お店の立ち代わりが早い」「大学の坂が多い」「人とぶつかっても気にしないおばさん」「勉強している学生に優しい」「受験生割引や勉強できるカフェが多い」「韓国のカード文化にも慣れて、サインを適当に書く」「韓国の先生が優しくてフレンドリー」が挙げられる。これを見てみると、人間関係に関して新たに気づいた部分もあるが、街の様子に関して1回目よりもイメージが具体化されていることが伺える。

2回目でイメージが弱くなったものは被調査者Aでは「コネ」、被調査者Bで「基本的に（韓国の）食べ物は辛いかわいかわい」「おしゃれな人が多い」「おばあちゃんたちがよくおしゃれをしている」、被調査者Cでは「通訳」「学業が大切」「人と人との距離が近い」「積極的に行動する」と話した。

これらのイメージの弱化は、被調査者が韓国の生活に慣れて韓国料理の多様性を知ったり、日韓の違いを意識しなくなったりしたことによる点が共通している。

2回目でイメージが強くなったものは、共通したものと重なるが被調査者Cの「お酒の席が多い(酒文化)」が挙げられる。

### 3) 3回目調査の特徴

帰国直前に行った3回目のインタビューでは、被調査者3人に共通して2回目からあまり変化がないこと、韓国に慣れて日韓の違いを意識しなくなったことが伺えた。しかし、お酒の文化に関してはネガティブな印象が変わらないかもしくは強まる傾向が伺えた。また、韓国にいながら、ただ慣れただけではなく、テレビや人付き合い、タバコ文化などのマナー、町並みに関して、日韓それぞれの良さがあると答えていた。

## 5. まとめと今後の課題

今回の調査では、日本人学生の韓国留学観として「人と人の距離が近い」「一人で行動(ご飯)しにくい」「酒文化」というのが共通して挙げられ、「人と人の距離が近い」に関しては、驚きはするがプラスに捉えていることが分かった。また、1回目の調査でマイナスのイメージであったものは「一人で行動(ご飯)しにくい」「酒文化」であったが、2回目の調査以降「一人で行動(ご飯)しにくい」に関してはマイナスのイメージが無くなり、「酒文化」に関しては変わらないかマイナスのイメージが強くなるということが分かった。これは安(2018b)の結果と一致しており、海外留学経験者は、留学期間が長くなり実体験が増えるにつれて、ネガティブなイメージがポジティブへと変化するという共通の経験をする可能性を示唆するものであると考えられる。

また、被調査者全員に共通して、調査を重ねるごとに「韓国の生活に慣れた」「日本と韓国の違いを意識しなくなった」「日韓それぞれの良さがある」と話すことが多くなった。また、インタビューでは留学生活での様々なエピソードを話しながら「韓国人はフレンドリー」「韓国人は日本人に関心を持ってくれる(親切にしてくれる)」といった実体験に基づいた留学観の特徴も多く表れた。

今後は、日本人学生の韓国留学観だけでなく、韓国のサブカルチャー(ドラマ、K-popなど)のとらえ方の変容にも注目し、日本人の韓国留学観について多角的に検討していきたい。

## 付記

本研究の一部は日本学術振興会学術研究助成基金助成金基盤研究(C)(課題番号17K02838, 研究代表者:安龍洙)の助成を受けて行われた。

## 引用文献

- 安龍洙(2014)「韓国人短期留学生の日本留学観の変化に関する一考察」『茨城大学留学生センター紀要』12, 75-88.  
安龍洙(2016)「インドネシア人交換留学生の日本留学に関する一考察」『茨城大学留学生センター紀要』14, 1-18.  
安龍洙(2018a)「東欧出身短期留学生の日本留学観に関する一考察」『茨城大学全学教育機構論集グローバル教育研究』1, 1-12.  
安龍洙(2018b)「国費留学生の日本留学観の変化に関する一考察—日韓プログラム14期生を対象にした4年間の追跡調査から」『留学生交流・指導研究』20, 97-114.  
池田庸子(2014)「海外留学に対するイメージ及び意識の変化—韓国語学研修参加者の場合」『茨城大学留学生センター紀要』12, 15-18.

# アメリカにおける社会正義のための教育の可能性 —多文化教育の批判的検討を通して—

青木 香代子\*

(2018年10月1日受理)

## Possibilities of Social Justice Education in the United States: Through Critical Analysis of Multicultural Education

Kayoko AOKI\*

(Received October 1, 2018)

### 要旨

アメリカにおける多文化教育は、異なる文化や多様性への理解に焦点が当てられ、社会における抑圧や差別、そしてそれが生み出される構造は見過ごされがちであることが指摘されてきた。社会正義のための教育は、社会的不正義に対して行動していくことができることをめざす教育であるが、これは従来の多文化教育の目的とも重なる部分である。本稿では、多文化教育をめぐる議論の考察を行い、社会正義のための教育において必要とされる抑圧の理解、そして社会正義のための教育の実践モデルについて検討する。また、社会正義のための教育が日本の教育にどのような示唆をもたらすのかを検討する。

【キーワード】 社会正義のための教育、多文化教育、社会正義、社会的公正、抑圧、  
social justice education

### 1. はじめに

日本では、日本語指導を必要とする児童生徒の数は2016年の時点で43,947人（文部科学省2017）にものぼり、その数は年々増加している。日本語を第二言語とする児童生徒に対して、言語的な支援だけでなく、進学や進路に関わる支援や経済的支援が必要とされている。また、国際結婚家庭の子どもや、国境をまたいで移動する子どもも増加しており、これまで以上に、ますます多様な教育現場を反映する教材やカリキュラム、評価方法や教師教育が求められている。一方、総務省は2006年に発表した『多文化共生の推進に関する研究会報告書—地域における多文化共生の推

---

\*茨城大学全学教育機構（〒310-8512 水戸市文京2-1-1; Institute for Liberal Arts Education, Ibaraki University, 2-1-1 Bunkyo Mito-shi 310-8512 Japan)

進に向けて』において、多文化共生について「国籍や民族などの異なる人々が、互いの文化的ちがいを認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きること」（総務省 2006：5）であると定義している。しかし、「多文化共生」に対する批判は、人々が「対等な」立場に立って「共に生きる」ことがめざされているにもかかわらず、不均衡な関係性が維持され続けている現状に向けられている。例えばハタノ（2010）は、多文化共生はマジョリティが都合よく使うことばであり、実際に日本に住む外国人への「強制」が行われているのではないかと強く批判している。「多様性」や「多文化」ということばは、いわゆるマジョリティ、特権集団<sup>1)</sup>に属する者にとっては、マイノリティを受け入れる（ふりをする）ための、都合のいいことばになってはいないだろうか。「多様性を認めること」が、単に自分と違う文化を学ぶだけにとどまっていなかったらどうか。多様性を認め、より平等で公正な社会をめざす教育とはどのようなものだろうか。

アメリカ合衆国（以下、アメリカ）では、1960年代のアフリカ系アメリカ人を中心とした公民権運動と、それに起因するエスニック・グループの運動が、それまでの教育におけるエスニック・グループの表象やその欠落等への批判へと発展し、人種差別主義や不平等を生み出す社会構造を変革する動きの中で、多文化教育が展開されてきた（松尾 2013）。しかし、アメリカにおける多文化教育は、「多文化」ということばからイメージされるように、「多くの」「文化」を理解することが目的や目標の教育であるとして捉えられることが多く、その実践は「3Fアプローチ」と呼ばれる、異なる文化の食べ物（Food）、衣服（Fashion）、祭り（Festival）を学ぶことに焦点が当てられ、社会の中の力関係やそこから生じる問題については見過ごされる傾向にあることが指摘されてきている（馬淵 2013）。多文化教育は、単に自分とは異なる「文化」（ここでいう文化とは3Fに代表されるものを指す）を学ぶことだけにとどまらず、抑圧や、抑圧が生み出される構造について理解し、それを変えていこうとする生徒を育てるための教育という側面を持っているといえる。またその重要性は、「グローバル化」に逆行するように、多様性への不寛容があらさまに表現される現代において、ますます高まっている。

アメリカでは近年、批判的に問題を捉え、社会的不正義に対し行動していくことができることをめざす教育は、社会正義のための教育（social justice education）としても実践されてきている。<sup>2)</sup> 社会正義のための教育は、多文化教育と目的や目標が重なる部分があるとされている（McDonald 2012, Cho 2017）。そのため、本稿では、まず、多文化教育学者である Banks、Sleeter and Grant、そしてニエトの論を中心として多文化教育の特徴を概観し、それぞれの特徴において抑圧に対抗する生徒を育てることがどのようにめざされているか、また多文化教育における実践においてどのような課題があるかを検討する。次に、社会正義のための教育の概念とその実践モデルについて考察し、日本における教育に向けた示唆を探ることとする。

## 2. 多文化教育をめぐる議論

多文化教育とは、ジェームズ・A・バンクス（Banks, 2008）によれば、人種、民族、ジェンダー、性的指向、障がい、宗教、社会階級等にかかわらず、すべての生徒が平等かつ公正に学校で教育を受けられるべきであるという教育概念、教育実践、および教育改革運動である。前述のように、多文化教育は公民権運動を起因とする権利のための運動から始まっている。そのため、多文化教育は、人種差別、自民族中心主義、言語差別等への対応の中で展開されてきた（ニエト 2009）。また、多文化教育は、学校のカリキュラム、教育方法、学校の政策、方針にまで及ぶものでもある（Banks 2008、ニエト 2009）。

Banks (2008) は、多文化教育の実践におけるアプローチを 1) 貢献アプローチ (民族集団及び文化集団に関する内容で、各集団の祝祭や英雄に焦点を当てる)、2) 付加アプローチ (文化的内容、概念、テーマを既存のカリキュラムを変えずに付け加える)、3) 変換アプローチ (カリキュラムの原理やパラダイム、及び基本的な前提を変え、多様な視点から概念や出来事、問題を考察し、社会構造として知識を理解する)、4) 社会行動アプローチ (変換カリキュラムをさらに発展させ、学習した概念や問題、論点に関連する個人的、社会的、市民的な活動を行う) の 4 段階に分けて示している。

また、Sleeter and Grant (2009) は、それまでの先行研究の分析を行い、多文化教育の類型を 5 つのアプローチに分類して示している。

- 1) 特別な教育を必要とする生徒、および文化的に多様な生徒のための教育アプローチ：低所得家庭の生徒、特別な支援を必要とする生徒、英語能力が十分でない生徒の学力向上をめざす。
- 2) 人間関係アプローチ：多様な生徒の間に肯定的な関係を作るため、ステレオタイプの軽減や統合、寛容、受容の認識を高める。
- 3) 単一集団学習アプローチ：アフリカ系アメリカ研究、チカーノ研究等、特定の集団の社会運動や集団が抱えてきた問題について学ぶ。
- 4) 多文化教育アプローチ：多元的で平等な社会、多様な背景を持つ人々の尊重、集団間の公正な関係を目指し、カリキュラム、指導法、評価等の改革を行う。
- 5) 多文化・社会正義のための教育アプローチ：社会構造の平等と文化多元主義を促進するため、人種主義 (レイシズム)、階級主義、性差別、障がい者差別等、様々な抑圧を取り扱う。批判的思考、社会運動、エンパワメントのスキル等を教える。

上記 5) のアプローチは、1990 年代以降のホワイトネス研究や、批判的人種理論の影響を受けて、人種主義をはじめとする抑圧を克服するために発展したものである。アメリカの学校現場では、非白人の生徒の数は増加し続けているのに対し、教師は大半が白人である。<sup>3)</sup> ホワイトネス研究とは、「白人であること」が、意識化されない特権や無徴化された文化や規範がいかに歴史的、経済的、政治的、社会的、文化的に構築されてきたかを問題にするものである (Frankenberg 1993)。そして、白人教師の人種認識や特権性は、教育実践にも影響を及ぼしている (Howard 2006)。また、批判的人種理論は、多様性の概念や社会の階層構造への挑戦として、法学の研究から生まれたものである (松尾 2013)。教育における批判的人種理論は、Ladson-Billings (1998) をはじめとして展開されてきたが、Ladson-Billings によれば、教育におけるカリキュラム、教授法、評価等が支配集団の文化に基づいているとする。このため、多文化教育においても、白人性を脱構築し、より人種的に平等で公正な社会をめざすための教育が模索されてきている (松尾 2007)。

プエルトリコ系アメリカ人で、自身も英語を第二言語として学んだ経験を持つニエト (2009 : 674-704) は、多文化教育について、社会政治的な文脈の中で次のような特徴があるとしている。

#### 1) 多文化教育とは、反レイシズム (人種差別) 教育である。

反レイシズムは、多文化的視点の中核をなすものであり、人種的・文化的アイデンティティ理論の枠組みで人種を議論することによって、レイシズムがいかにあらゆる人々に否定的な影響を与え

るかを理解することをめざす。

## 2) 多文化教育とは、基礎教育である。

従来のカリキュラムは、ヨーロッパ的で男性的で上流階級的なものであるが、これは学校の多様性を反映しているものではない。アメリカだけでなく、世界の諸地域の歴史や地理について、広範な多様性を理解し、共感できる社会的・知的能力を身に付けることをめざす。

## 3) 多文化教育は、すべての生徒にとって重要である。

多文化教育は、人種、エスニシティ、社会階級、言語、性的指向性、宗教、ジェンダー等あらゆる差異に関係なく、あらゆる人々に関するものであり、あらゆる人々のためのものである。

## 4) 多文化教育とは、全面的 (pervasive) なものである。

多文化教育は、単なるプログラムや授業の一環として実践するものではなく、カリキュラムや教育方法、評価、教員の構成、学校の食事、家庭への手紙、生徒の母語の使用等が、社会や生徒の多様性に対応したものである。

## 5) 多文化教育とは、社会正義のための教育である。

権力や不平等、貧困、差別、戦争等について、問題を変革するために何ができるのか、社会正義についての議論を行い、生徒が学んだことを実際の状況に適用し、より包括的かつ拡張的に物事を考える方法を学び、多文化的視点を身に付ける。

## 6) 多文化教育とは、プロセスである。

特定の生徒に不利益をもたらす政策や実践を廃止し、教員養成課程において、学校や社会におけるレイシズムや差別の存続が生徒に与える影響や、多様な生徒の学習を促すためのカリキュラム上の戦略や教授法について理解を深める。

## 7) 多文化教育とは、批判的教育学である。

多文化カリキュラムの主な目的は、生徒が物事を決定する能力や社会的行動を起こす能力をのばすのを支援することである。また、批判的教育学は教員が生徒に知識を伝達するだけのものではなく、生徒たちが異なる視点を批判的に分析し、矛盾点を見つけ、理解し、それに基づいて行動することを促す。

さらにニエトは、多文化教育において、多様性を支持するレベルとして、1) 寛容 (tolerance)、2) 受容 (acceptance)、3) 尊重 (respect)、4) 肯定／連帯／批判 (affirmation/ solidarity/ critique) の4つに分類している (ニエト 2009 : 742-754)。「寛容」は、学校における多文化教育においては最も低いレベルで、言語的・文化的差異は社会が必然的に負わなければいけない責務であるという考えのもと、差異を変換するプログラム (例えば ESL プログラム) や、黒人史月間等、表面的なものにとどまる。「受容」は、差異を承認することを意味する。例えば、教科書や教材にある程度多様性が反映され、異なる学習スタイルや言語が認識される。「尊重」では、多様性は提供される教育の基礎として位置づけられ、生徒の経験や考えがカリキュラムに反映される。「肯定／連帯／批判」は、多様性をサポートする最も高いレベルとなり、そこでは、生徒の家庭の文化や言語を正当に受け入れ、それらを学習のための有効な資源として用いる。また、異なる集団が共生する際に生じる衝突や葛藤、苦痛は、学習における不可欠の要素として受け入れる。ニエトは、前述の多文化教育の7つの特性における実践を、この4つのレベルごとに整理している。表1は7つの特性のうち、本稿に特に関係する5) 社会正義のための教育のレベルの説明を抜粋したものである。

ニエトの多文化教育の論に特徴的なのは、過去や現在の社会および教育における「不平等や排除

表1 社会正義のための教育のレベルと実践

1) 寛容	2) 受容	3) 尊重	4) 肯定／連帯／批判
学校教育は、稀薄ながら幾分か地域のプロジェクトや活動とつながりを持つ。	社会変革のための学校の役割が認識される。何らかの変化が見られるようになる。例えば、生徒が地域の奉仕活動に参加する。	生徒は自らの社会的関心を反映する地域活動に参加する。	カリキュラムや教育方法は、社会的公正が教育の中核であるという理解にも続いている。思考と行動が学習の重要な要素となる。

(ニエト 2009、750-751 より一部抜粋)

と同時に、移民の歴史を考慮に入れる必要がある」(ニエト 2009: 17) としている点である。ニエトは、多文化教育は個人的・社会的・歴史的・政治的な文脈の中に存在するとしているが、これは、アメリカの歴史は、奴隷制と侵略を抜きに考えることはできないからである。そして、初期の移民が学校でうまくやっていたという神話は、自分たちの移民としての歴史を放棄し、拒否してきた結果、今の学校のカリキュラムや教育方法にも反映されていると指摘する。そのため、多文化教育は、「文化や言語の保持への関心をはるかに超える変革的なプロセス」であり、「社会における権力や特権の問題」に関わることでありとニエト (2009: 21) は主張する。そしてこれは、「レイシズムをはじめとする差別に挑戦することを意味する」のである (ニエト 2009: 21)。

これまで見てきたように、Banks、Sleeter and Grant、ニエトらは、多文化教育で最終的にめざされるものは、社会における抑圧や不平等に立ち向かうことのできる生徒を育てることであることがわかる。Banks の多文化教育のアプローチでは、「変換アプローチ」や「社会行動アプローチ」において、抑圧の構造について認識を促したり、行動を起こしたりすることを促すことがめざされている。Sleeter and Grant も、多文化教育の最後の類型である「多文化・社会正義のための教育アプローチ」において、抑圧が生まれる社会構造について理解を促し、批判的思考や社会運動のスキルを身に付けることがめざされている。ニエトの多文化教育の定義においては、多文化教育は社会正義のための教育、そして批判的教育であるとし、差別や抑圧やそれが生み出される構造について理解し、批判的思考や多文化的視点を持つことを促すとしている。

しかし、実際の実践では、Banks の貢献アプローチや付加アプローチ等にとどまっているのが現状である (馬淵 2013)。このような傾向に対する批判は、アフリカ系アメリカ人の女性学者であり文化評論家でもあるベル・フックスによっても指摘されてきている。例えば、フックス (2006: 45) は、大学における女性学の授業において、非白人女性について学期の最後でとりあげたり、1単元でまとめてしまったりといった実践は、「ただうわべだけでとりあげようとする行為」であり、「アリバイ的なやり方」、「だれもができるお手軽な改革」で、「多文化主義の考えに立った変革とはいえない」と強く批判している。その上でフックス (2006: 47) は、変革をめざす教育の中心的課題は、「教室を、民主主義的な場にするということ、誰もがそれに寄与する責任を感じる場」にすることであり、一人ひとりの「声」が尊重される「学びの共同体」を創り出すことでもあるとしている。それには、教師自身がそれまでの知識がいかに狭い枠組みの中で教育されてきたかを自覚する必要があるのである (フックス 2006)。

また、ヨーロッパにおける市民教育や社会正義について研究しているオスラー (2017) は、ヨーロッパにおける多文化教育 (ヨーロッパでは「異文化間教育」と呼ばれる) は、アメリカから始まった反人種主義・多文化主義の研究や、Banks による多文化教育の理論的研究に影響を受けてきているが、アメリカ以外の国でも学校教育における平等をめざす闘争が起きてきているということにつ

いて注目されてこなかったと指摘している。さらに、Banksの多文化教育の理論研究は、世界的にもインスピレーションを与えているが、「危険なのは、マイノリティのコミュニティに欠陥があるという見方をする政策立案者が、多様性を代償とする統合を強調することであり、とりわけ社会正義に関連した政策目標を犠牲にすること」(オスラー 2017: 71) であるとする。また、多文化教育が国家的な枠組みの内部で理解され、「支配的な国家的政治文化がナショナリストによる多文化教育の解釈を補強し」(オスラー 2017: 71)、グローバル的な視点を組み入れることを妨ぎ、多文化教育のモデルが国家的なモデルにとどまっていることを指摘している。オスラーの指摘は、国内での枠組みのみに陥りがちな多文化教育の課題を示している。

これらの批判は、多文化教育は、単に異なる文化の理解や自分の文化との差異を学ぶだけにとどまるのではなく、社会において周縁に置かれてきた人々の歴史や、構造的に継続されてきた抑圧や差別にすべての人々が立ち向かうための教育でもあることを再度認識させてくれるものである。

### 3. 社会正義のための教育—概念と実践モデル

ニエト (2009) は、「多様性の肯定」とは、単に差異をほめたたえるだけではなく、不公正な政策や実践に異議を申し立てることであるとしている。しかし多文化教育をめぐる議論において、必ずしも不平等や不正義、差別に立ち向かうための実践、すなわち社会正義のための教育に関する議論が十分になされてきたわけではない。

例えば Nieto (2013) は、教育における社会正義は、指導、学習、生徒に関する態度、信念 (beliefs)、行動であり、指導法の基盤を形作るものであるとし、特に不平等、貧困、レイシズムやその他の偏見の問題を、教育の社会政治的な文脈において認識することを意味するとしている。また Nieto (2013: 21) は、教育における社会正義には以下の4つの要素があると説明している。

- 1) 教育における社会正義は、構造的な不平等や差別を引き起こし悪化させる誤解や真実ではないことやステレオタイプに挑戦し、直面し、それらをこわす。
- 2) 教育における社会正義は、すべての生徒に、彼・彼女らの最大の可能性の限界まで学ぶことができるリソース (教材だけでなく、期待感や尊重といった情緒的なものも含める) を提供する。
- 3) 教育における社会正義は、特定の背景を持つ生徒は欠点があるという理論を拒否し、すべての生徒には学力を伸ばすことができる長所を持つということを理解することを求める。
- 4) 教育における社会正義は、民主主義社会において役割を果たすために、批判的思考を促し、社会運動を支援する学びの環境を作る。

しかしこの4つの要素の背景となる議論、つまり構造的な不平等や差別がどのように引き起こされるのか、また特定の背景を持つ生徒が欠点を持っているという理論はどのように社会的抑圧に関係しているのか等について、ニエトは詳しく議論しているわけではない。そのため、本節では、支配・被支配の関係や抑圧が生み出す不平等な社会構造、それを維持する特権性の脱構築にも焦点をあてる社会正義のための教育における概念をみていく。

社会正義のための教育は、social justice education、あるいは education for social justice と呼ばれている。ここでいう社会正義 (social justice) は、日本語では「社会的公正」と訳されることも多い。特権集団に属する人々のための社会正義の教育について研究したダイアン・グッドマン (2017: 5) によれば、社会正義とは、「権力や資源をより公平に分配し、あらゆる人が尊厳や自己決定権を

持って、心身ともに安全に暮らせる方向を模索するもの」である。そして Bell (2016:3) によれば、社会正義の目標は、「すべての社会的アイデンティティ集団に属する人々がそれぞれのニーズが互いに満たされるように完全に、公正に参加することをめざす」ことであり、そのための過程として、「民主的かつ参加型であるべきであり、多様性や差異に敬意を払い、変革を起こすために他者と協働することにおいて、人間の営みと能力に対して開放的、肯定的であるべきである」とする。さらに、社会正義は、周縁化された人々を認識し尊重する社会的プロセスでもある (Bell, 2016:3)。

社会正義の実現のために、グッドマンは、「不公平な制度的構造や慣行を変え、支配的イデオロギーを批判的に問い直す」ことが必要であるとする (2017:5)。しかし社会正義に対して積極的に行動したいと考えている人がいる一方で、抵抗感を抱いている人がいることも事実である。特に、特権集団に属する人々にとって、社会的に構築されてきた特権集団の価値観や制度を批判的に捉え直し、自分自身に特権があることを認めることは容易ではない。それだけでなく、社会正義のためには、社会政治的な要因や心理的要因を克服する必要がある (グッドマン 2017)。社会正義のための教育は、学習者自身が持っている先入観や自己概念を問い直すように導くが、そのためには教育者は「個人の成長を促すような状況や学習内容、プロセス」を用意し、感情と知性に働きかける必要があるのである (グッドマン 2017:46)。

社会正義のための教育において重要な点の一つは、抑圧について理解することである。抑圧には様々なものがあるが、その例として、グッドマンは次の項目を挙げている (各項目の次に書かれているカッコ内の内容は、抑圧の対象となるものである)。**①人種差別 (人種)**、**②性差別 (生物学的な性)**、**③異性愛主義 (性的アイデンティティ)**、**④トランスジェンダーへの抑圧 (ジェンダー・アイデンティティ、ジェンダー表現)**、**⑤階級差別 (社会経済的地位)**、**⑥障がい者差別 (身体的・精神的)**

表2 様々な抑圧

抑圧・差別 (抑圧の対象となるもの)	支配的 (特権集団)	従属的 (劣位集団)
人種差別 (人種)	ヨーロッパ系の人々 (白人)	非白人、複数の人種的ルーツを持つ人々
性差別 (生物学的な性)	男性	女性、インターセックスの人々
異性愛主義 (性的アイデンティティ)	異性愛者	レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、クィア、無性 (性に無関心な人々)
トランスジェンダーへの抑圧 (ジェンダー・アイデンティティ、 ジェンダー表現)	生物学的性とジェンダーが 一致する男性、女性	トランスジェンダー
階級差別 (社会経済的地位)	上流階級、中産階級	労働者階級、貧困層
障がい者差別 (身体的・精神的能力)	健常者	障がい者
年齢差別 (年齢)	若者、壮年	高齢者
宗教的な抑圧 (宗教)	キリスト教信者	ユダヤ教、イスラム教、ヒンドゥー教、 無神論者、その他の宗教的少数者
外国人差別、排外主義 (国籍)	その国で生まれた人	その国で生まれていない人

(グッドマン 2017 より修正を加えて筆者作成)

神的能力)、⑦年齢差別(年齢)、⑧宗教的な抑圧(宗教)、⑨外国人差別、排外主義(国籍)がある。これらの他に、民族、言語、体形や外見等に対する抑圧がある(表2参照)。グッドマンによれば、すべての人は複数の社会的アイデンティティ(の属性)を持っており、カテゴリーによって「特権集団と劣位集団のどちらにも属しうるし、権力構造のどちら側にも立ちうる」(グッドマン2017:11)としているが、これらのカテゴリーは社会的に構築されてきたものであり、人々の生活に大きな影響を及ぼしているとする。また、社会的不正義は、様々な制度だけでなく、個人の意識にも埋め込まれているものである。そのため、抑圧が社会的システムだけでなく個人の生活やコミュニティにおいてどのように機能し、維持されてきたかを理解することは重要である(Bell, 2016)。

前頁(表2)のグッドマンの抑圧に関する分析では、「支配的集団(特権集団)」と「従属的集団(劣位集団)」の二項対立構造のように見えるが、グッドマンが述べているように、すべての人は複数の社会的アイデンティティを持っているということを鑑みれば、二項対立ではなく、より複雑な構造であることがわかる。これは、抑圧が起こるレベルにも関係しているといえる。Adams and Zúñiga (2016)は、抑圧は個人、集団(グループ、コミュニティ)、制度(システム)のレベルにまたがっているとするとし、構造的な不平等はそれぞれのレベルで起こるとした。そしてそれは、人種、エスニシティ、性別、ジェンダー、性的指向性、社会的階級、宗教、年齢、障がい等に対する抑圧とお互いに関係し、交差しながらそれぞれに影響し合っているとするとする。図1は、それを図にしたもので、個人、集団、制度のそれぞれのレベルにおいて、あらゆる種類の抑圧が起こり得ることを表しているものである。そして、このような抑圧は、人種差別、階級差別、性的指向性に対する差別等に現れている。社会正義のための教育では、これらの抑圧に対して、効果的に働きかけるために、抑圧が日常生活においてどのように機能しているのかについて理解することを重要視する(Bell, 2016)。社会正義のためにどのようなことをすべきかについて、さらにBell(2016:16-22)

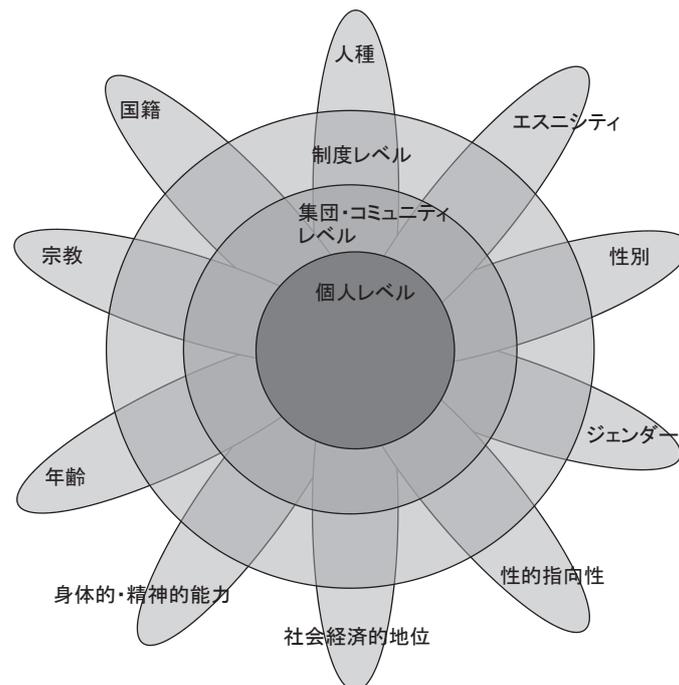


図1 抑圧のシステムのレベルと抑圧の種類<sup>3)</sup>

は次のようなことが必要であると述べている。

#### 1) 批判的意識 (critical consciousness) を発展させること

批判的意識とは、パウロ・フレイレ (1979) により展開されたものであるが、批判的意識を持つことは、抑圧を生み出す政治的・社会的パターンを認識し、抑圧的な状況に疑問を呈し、分析し、挑戦するために連帯して働きかけることを意味する。

#### 2) 二分法 (binaries) を脱構築すること

抑圧はしばしば、特権を持つ集団と、そうでない集団を排除する二元的な構造を生む。しかし、この二分的な構造を脱構築し、個人的・社会的な複雑性を認識することは、変革のために重要なことである。どちらかのカテゴリー (白人/黒人、ゲイ/ストレート等) に分類されるかにより優劣をつけられ、抑圧を継続してきた二分法を分析し、脱構築する必要がある。

#### 3) カウンターナラティブを活用すること

批判的人種理論をはじめとするカウンターナラティブは、特権集団 (あるいは支配集団) の正当性を安定させるためのナラティブを不安定なものにさせる。また、カウンターナラティブは、周縁化された集団の抑圧されてきた、あるいは隠されてきた抵抗のストーリーを掘り起こし、抑圧的な状況は変えることができるということを示すことができる。1960年代~70年代のネイティブ・アメリカン、アジア系アメリカ人、チカーノ、アフリカ系アメリカ人の学生らによる学生非暴力調整委員会 (Student Nonviolent Coordinating Committee) の活動等は、今日の若者の運動にも影響を与えている。

#### 4) 権力を分析すること

先述の社会運動からさらに学ぶことは、権力と利害の関係を探り続ける必要があるということである。「誰のための制度なのか?」「誰に利益があり、誰が負担するのか?」といった疑問は、ヒエラルキーや隠れた利害関係を明らかにすることに役立つ。

#### 5) 利害の一致を探ること

利害の一致という概念は、集団間で利益を共有できる可能性を探る上で、役に立つ戦略となるかもしれない。しかし同時に、異なる戦略が必要となったとき、変革のために協働するには限界があるということについて現実的である必要がある。

#### 6) グローバルなつながり (global connections) を作ること

抑圧は、地理的、歴史的な文脈において、国境を越えて構築されてきた。労働、移民、ジェンダー、民族間の関係等は、トランスナショナルな視点で分析することも必要である。例えば、グローバル・フェミニズムや、グローバル・クリティカル・レイス・フェミニズム (global critical race feminism)、トランスナショナル・フェミニズムは、ポストコロニアル制度およびアメリカ帝国主義のもとにおいて、女性が直面してきた問題に焦点を当て、ローカルな戦略と解決に取り組んでいる。

#### 7) 連合と連帯を構築すること

抑圧や不平等は、複雑に関係し、交差しており、それに立ち向かうためには、多様な人々が連帯する必要がある。そのためには、多様な集団が、異なる立場に立った人々が権力にアクセスするための見識やエネルギーを集結し、連帯して戦略を立てることが重要である。

#### 8) 被抑圧集団のリーダーシップに従うこと

社会正義のためには、周縁に置かれた人々の声を聞くことも重要な実践の一つである。障がい者

の権利のためには障がい者の、LGBTQの人々の権利のためにはLGBTQの人々の声を聞かずして、決定を下すことはできないからである。

### 9) 責任あるアライとなること

アライ、もしくはアリー (ally) とは、抑圧されている人々が求めているものを聞き、彼らと共に連帯して抑圧に立ち向かう人のことである。しばしば、支配集団に属する人々は、周縁化された集団を「助ける」ために、前もって考えたアイデアを無理強いすることがある。このようなスタンスは、不平等な権力関係を生み出す。また、アライということばは、必ずしも支配集団に属する人のみに使われるものではなく、すべての人々がお互いのアライとなるべきである。

以上のことは、これまでの社会正義への働きかけにおいて発展してきた理論や実践を含むが、Bell (2016) は、これらを創意工夫し、実践を組み合わせることによって現在の社会正義のための教育への実践に導くことができるとしている。

では、社会正義のための教育においては、どのような実践がなされているのだろうか。社会正義のための教育は、抑圧を生み出す社会構造やその特徴を理解するために、生徒に批判的、分析的なスキルを延ばすことを可能にし、さらに抑圧が生み出される構造を崩し、変革することを支援する (Bell 2016 : 4)。そして、社会正義のための教育においては、抑圧的な状況を認識し、可能な行動を起こすための知識とスキルを身に付けることをめざす。これは、生徒に、教室の中で教えられていることだけでなく、学校の外で起こっていることについても疑問を持つことを促すことも含む (Christensen 2012)。

さらに Adams and Zúñiga (2016) は、社会正義のための教育のコアとなる概念に関する授業実践として、以下の4段階を挙げている。Adams and Zúñigaによれば、この実践のデザインは、社会正義のための教育のワークショップ等でも活用することができるとしている。

#### 1) 学びの共同体 (learning community) の構築

最初の段階では、学びの共同体をつくることから始める。具体的には、まず、参加者がアイスブレイクでお互いを知り、その後、グループのガイドラインを話し合う。また、この段階では、社会正義のための教育のコアとなる概念や抑圧について紹介する。

#### 2) 社会化のプロセス、社会的カテゴリー、社会的集団、社会的アイデンティティ等の概念を個人レベルで理解する

この段階ではさらに踏み込んで、社会的アイデンティティ等の概念を紹介し、社会化のプロセスについて理解する。グループディスカッションを行い、エンパワメントの個人的な経験について話し合う。

#### 3) 制度的・社会的枠組みにおける理解を促すために、歴史的背景や社会的構造、現在の抑圧についての分析に焦点を当てる

この段階では、様々な抑圧が歴史的にどのように構築されてきたかについて理解する。また、異なる抑圧がどのように複雑に絡まっているかについて、またどのようにそれをほぐすかについてインタラクティブな活動を通して考える。

#### 4) アクションプランを立てる

ここでは、グループに分かれ、変化を起こすためにどのようなことが必要かを図式化する。また、実際にどのような行動を起こすことができるかについて考え、プランを立てる。

このような実践において、支配集団に属する参加者が怒りの感情を表したり、防衛的に振る舞ったりすることがあるが、そのような場合、ファシリテーター（あるいは教師）は、感情的な反応を参加者に振り返ってもらったり、それをシェアしてもらったりすることによって、その感情を認識するという方法をとることができる（Adams and Zúñiga 2016）。もう一つの方法は、現在の抑圧に対して参加者が感じた怒りや恥じらいといった感情と、歴史的に構築されてきた抑圧とを結び付けることである。これにより、そのような感情にとらわれることなく、現在の不平等や不正義が歴史的に構築されてきたものであるということを理解することができる（Adams and Zúñiga 2016）。

#### 4. 日本における教育への示唆

社会正義のための教育は、日本における教育にも示唆を与えている。第1章でも述べたように、日本語指導が必要な児童生徒や海外にルーツを持つ児童生徒は近年ますます増加している一方で、在日外国人に対するヘイトスピーチや外国人労働者に対する待遇の問題等が顕在化しているなか<sup>5)</sup>、単に特権集団に属するマジョリティ側の生徒が自分と異なる文化を学び、交流するといった従来行われている3Fアプローチだけでは、不十分であることは明白である。無論このような指摘は、日本の多文化教育研究でも議論されている。例えば森茂（2013：88）は、外国人児童生徒が直面している問題やその対応について、「マイノリティの外国人児童生徒の問題としてのみとらえるのではなく、その差別構造を支えるマジョリティの日本人児童生徒の問題として捉える必要がある。マジョリティの意識（価値）変革なくして『異文化を理解し共に生きていこうとする姿勢』、すなわち『多文化共生』に向けての資質の育成はあり得ないからである」と述べている。その上で森茂は、日本の学校におけるカリキュラムにおいても、「マジョリティの特権性を自覚させるような内容」や、「マイノリティの対抗的な語りを学習内容として構成する必要がある」とする（森茂 2013：102）。森茂の指摘は、グッドマンが示したように、「学習者自身が持っている先入観や自己概念を問い直し、特権性を自覚するということにもつながるといえる。

社会正義のための教育では、生徒は暗記することよりもむしろ疑問を持つことによって、教育が広がるとされる（Christensen 2012）が、実際には、児童生徒が疑問を持ったり、議論を行ったりすることがいつも歓迎されるわけではない。同時に、児童生徒が異なる背景を持つ人々に対する不寛容な表現やヘイトスピーチを耳にしたとしても何ら疑問を持たない場合もある。しかし、社会正義のための教育においては、生徒だけでなく、教師自らが抑圧や抑圧の構造を理解し、議論を歓迎し、意識を変えていく実践を行う必要があるだろう。人種や民族、宗教等の違いが日本に比べてはるかに可視化しやすいアメリカとは違い、日本では多様性が可視化されにくい。グッドマンや Adams and Zúñiga が示した抑圧の構造モデルは、自らのアイデンティティと特権性について理解するために参考にすることができるであろうが、これらのモデルはアメリカにおける文脈で活用されているため、日本における抑圧の構造を分析し、実情に合わせて応用する必要がある。また Bell やニエトの社会正義のための教育における論や、Adams and Zúñiga の実践デザインがどのように日本において展開され得るのかについても今後検討していく必要がある。

#### 5. 結語

本稿では、アメリカにおける多文化教育について、Banks、Sleeter and Grant、ニエトの論を中心に概観し、その課題を検討した。そして、社会正義や抑圧の概念、社会正義のための教育の要素とその実践デザインについて、グッドマンや Bell、Adams and Zúñiga、ニエトの分析をもとにみてき

た。多文化教育は、様々な文化を学ぶだけでなく、社会的に構築されてきた抑圧や差別に対抗するために行動することがめざされる教育でもある。しかし、実際には、多様性や差異の理解に焦点が当てられ、不平等や抑圧、またそれが生み出される構造は見過ごされがちであることが指摘されてきた。ニエトが指摘したように、多様性を認めることは、単に差異をほめたたえるだけではなく、不公正な政策や実践に異議を申し立て、抑圧に立ち向かうことでもある。

社会正義のための教育では、抑圧の理解や抑圧が起こるレベルや交差性も重視し、抑圧を認識することにまず焦点をあてるため、Banksらの多文化教育の理論をもとにした実践でも難しいとされてきたことが克服できる可能性があると考えられる。社会正義のための教育は、多様性を認め、より平等で公正な社会をめざし、抑圧や差別に対して行動を起こすことも目標とされるため、様々な形での実践が試みられている。今後は、アメリカにおける社会正義のための教育における実践の現状と課題についても研究を進め、日本における社会正義のための教育の実践開発の可能性を探っていくこととしたい。

## 注

- 1) 本稿では、社会的に特権を持つ人々が属する集団を特権集団、また社会において支配的な地位に属する人々を支配集団として用いている。
- 2) Social justice は、後述するようにはしばしば「社会的公正」と訳される。一方で、多文化教育において social justice に近い概念として equity (エクイティ) があるが、こちらも「公正」と訳されることが多いため、本稿では social justice を「社会主義」とした。
- 3) 2015-2016年に実施された全米教育統計センター (National Center for Education Statistics 2018) の調査によれば、白人教師の割合は約 80%であった。
- 4) Adams and Zúñiga (2016) の抑圧のシステムおよびグッドマン (2016) の抑圧の種類を元に筆者作成。
- 5) 本稿では取り上げていないが、国籍や民族に対する抑圧だけでなく、子どもや女性の貧困といった経済格差の問題も社会正義のための教育で取り上げる内容に含まれる。これらの問題がどのように社会正義のための教育において取り扱われるかについては今後の課題としたい。

## 引用文献

- オスラー, オードリー (2017) 木村涼子、キム・ハリム、片田真之輔他 (訳) 「<翻訳>私たちが語る物語: 多文化的文脈において正義と平等のための教育におけるナラティブの役割を考える」『大阪大学教育学年報』22, 65-80. (Osler, A. (2015). The story we tell: exploring narrative in education for justice and equality in multicultural contexts. *Multicultural Education Review*, 7, 12-25.)
- グッドマン, ダイアン (2017) 出口真紀子 (監訳)、田辺希久子 (訳) 『真のダイバーシティをめざして—特権に無自覚なマジョリティのための社会的公正教育』上智大学出版 (Goodman, D. J. (2011) *Promoting diversity and social justice: Educating people from privileged groups*. 2nd Ed. New York: Routledge.)
- 総務省 (2006) 「多文化共生の推進に関する研究会報告書—地域における多文化共生の推進に向けて」
- ニエト, ソニア (2009) 太田晴雄 (監訳)、フォンス智江子、高藤三千代 (訳) 『アメリカ多文化教育の理論と実践—多様性の肯定へ』明石書店 (Nieto, S. (2004). *Affirming diversity: The sociopolitical context of multicultural education* (4th ed.). Boston: Pearson.)
- ハタノ, リリアン・テルミ (2010) 「『共生』の裏に見えるもう一つの『強制』」馬淵仁編著『『多文化共生』は可能か—教育における挑戦』127-148頁. 勁草書房
- フックス, ベル (2006) 里見実 (監訳) 『とびこえよ、その囲いを—自由の実践としてのフェミニズム教育』新水社 (hooks, b. (1994). *Teaching to transgress: Education as the practice of freedom*. New York: Routledge.)
- フレイレ, パウロ (1979) 小沢有作、楠原彰、柿沼秀雄、伊藤周 (訳) 『被抑圧者の教育学』亜紀書房 (Freire, P. (1970). *Pedagogy of the oppressed*. New York: Continuum.)
- 松尾知明 (2007) 『アメリカ多文化教育の再構築—文化多元主義から多文化主義へ』明石書店
- 松尾知明 (2013) 『多文化教育が分かる事典—ありのままに生きられる社会をめざして』明石書店
- 馬淵仁 (2013) 「多文化教育における政策的課題と葛藤—アメリカ合衆国における調査が示唆するもの」松尾知明編著『多文化教育をデザインする—移民時代のモデル構築』25-43. 勁草書房
- 森茂岳雄 (2013) 「多文化教育のカリキュラム・デザイン—日本人性の脱構築に向けて」松尾知明編著『多文化教育をデザインする—移民時代のモデル構築』87-106. 勁草書房

- 文部科学省 (2017) 「『日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査 (平成 28 年度)』の結果について」
- Adams, M. & Zúñiga, X. (2016). Getting started: Core concepts for social justice education. In M. Adams, L. A. Bell, D. J. Goodman, and K. Y. Joshi (Eds.), *Teaching for diversity and social justice* (3rd ed.). New York: Routledge, pp.97-130.
- Banks, J. A. (2008). *An introduction to multicultural education* (4th ed.). Boston: Allyn and Bacon.
- Bell, L. A. (2016). Theoretical foundations for social justice education. In M. Adams, L. A. Bell, D. J. Goodman, and K. Y. Joshi (Eds.), *Teaching for diversity and social justice*. 3rd Ed. New York: Routledge, pp.3-26.
- Christensen, L. M. (2012). Teaching about social justice and power. In J. A. Banks (Ed.), *Encyclopedia of diversity in education*. Thousand Oaks, CA: Sage, pp.1992-1995.
- Cho, H. (2017). Navigating the meanings of social justice, teaching for social justice, and multicultural education. *International Journal of Multicultural Education*, 19 (2), 1-19. Retrieved from <http://ijme-journal.org/index.php/ijme/article/view/1307/1180>
- Frankenberg, R. (1993). *White women, race matters: The social construction of whiteness*. Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Gay, G. (2012). Multicultural education, purposes, and goals. In J. A. Banks (Ed.), *Encyclopedia of diversity in education*. Thousand Oaks, CA: Sage, pp.1548-1553.
- Howard, G. R. (2006). *We can't teach what we don't know: White teachers, multiracial schools*. 2nd Ed. New York: Teachers College Press.
- Ladson-Billings, G. (1998). Just what is critical race theory and what's it doing in a nice field like education? *International Journal of Qualitative Studies in Education*, 11 (1), 7-24.
- McDonald, M. (2012). Social justice teacher education. In J. A. Banks (Ed.), *Encyclopedia of diversity in education*. Thousand Oaks, CA: Sage, pp.2002-2005.
- National Center for Education Statistics (2018). *Characteristics of public elementary and secondary school teachers in the United States: Results from the 2015–16 National Teacher and Principal Survey*. Retrieved November 25, 2018 from: <https://nces.ed.gov/pubs2017/2017072rev.pdf>
- Nieto, S. (2013). *Finding Joy in Teaching Students of Diverse Backgrounds: Culturally Responsive and Socially Just Practices in U.S. Classrooms*. Portsmouth: Heinemann.
- Sleeter, C. E. and Grant, C. A. (2009) *Making Choices for Multicultural Education* (6th ed.). Hoboken, NJ: John Wiley & Sons.

## 茨城大学全学教育機構論集 投稿規程（改定版）

2018年6月27日  
全学教育機構 学術委員会

### 1. 投稿できる論文

本論集は大学教育研究の活性化と進展に寄与することを主眼とし、a. 大学教育研究と b. グローバル教育研究の2つの分野を置き、これらに関する未発表の原著論文、教育実践報告を主な対象とする。また、同じ号への投稿数について制限はない。

このほか a. 大学教育研究においては、大学教育に新たな視点や展望を与えるもので大学教育に有益であると思われる総論、レビュー等についても、全学教育機構論集編集委員会（以下編集委員会）の承認を経て「大学教育の窓」として投稿できるものとする。なお、編集委員会は全学教育機構学術委員会を中心に組織するものとする。

b. グローバル教育研究においては、日本語・日本事情教育、日本語学、留学生教育、外国語教育、グローバル教育、国際理解教育、異文化間教育を主な対象とする。

### 2. 投稿資格

#### a. 大学教育研究

著者のうち、少なくとも一人は茨城大学教員（特任教員、非常勤教員含む）であることを原則とする。「大学教育の窓」への投稿に関しては、茨城大学教員に限らないものとする。

#### b. グローバル教育研究

著者のうち、少なくとも一人は茨城大学教員（特任教員、非常勤教員を含む）および海外協定校等本学のグローバル教育に携わっている者であることを原則とする。

### 3. 発行

原則として年1回とする。

### 4. 査読

a. 大学教育研究においては査読は行わないが、提出された論文については、編集委員会にて検討の上受理する。規定に著しく反するなど、大きな修正や書き替えを要する場合は、受理せず翌年度に回すことがある。b. グローバル教育研究においては査読を行う。査読は、編集委員会が委嘱する全学教育機構国際教育部門の教員またはそれ以外の専門研究者により行われ、査読者の審査に基づき、編集委員会がその結果を審議の上承認する。

### 5. 著作権

1) 本論集は冊子形式ではなく、電子ジャーナルとしてしてのみ、配布・配信される。

2) 本論集に掲載された論文及び報告の著作権は、著者が有するものとし、編集委員会はこれらの著作物について全学教育機構論集をはじめ公開する権利を有する。

3) 図・表及び著作物の半分以上の引用等に関して発生する著作権問題の処理は、有料の場合でも著者の責任で各自が行うものとする。具体的には、図・表など掲載物発行者または製作者

本人、故人である場合は遺族等の著作権継承者またはその他代理人等に対し、引用に関わる了承を事前に得るものとする。写真の肖像権に関しても、掲載の了解を得るなどの処理をし、引用物については、電子化され公開されることを説明し、了解を得ておくものとする。特に、写真や絵画などを高精細画像として使用する場合は、もとの著作者の許諾が必要になる。

- 4) 著者は、茨城大学学術情報リポジトリによる掲載論文の電子化公開について承諾するものとする。

## 6. 研究者倫理

- 1) 著者は、論文及び報告の内容が研究者倫理に反しないよう留意する。
- 2) 著者は、論文及び報告中に記載された個人等のプライバシーが守られるよう配慮する。例えば、インターネット等を通して論文が公開されたときに、論文及び報告中において匿名とした人物が判定されることがないように配慮する。

## 7. 掲載された論文及び報告の訂正と撤回

- 1) 著者からの申告により、論文及び報告内容に重大な誤りがあると学術委員会が認めた場合に限って、訂正を認める。その際、訂正前の論文に続けて、訂正箇所に関する記事を追記することで対応する。なお、重大な誤りとは数式や著者名などの誤りであり、読者が容易に判定できる軽微な誤り（誤字・脱字など）の訂正は認めない。
- 2) 不適切な分析方法など論文に重大な誤りや研究上及び執筆上の不正行為が発見された場合は、著者の申し出の如何に関わらず、論文の撤回を求めることがある。なお、撤回論文については、リポジトリから消去はせず、論文内に撤回論文としてのスタンプを入れて明示する。

# 茨城大学全学教育機構論集

## グローバル教育研究

### 第2号

#### 執筆者一覧

(アルファベット順)

- 安 龍 洙 (茨城大学全学教育機構 教授)  
青 木 香代子 (茨城大学全学教育機構 講師)  
八 若 壽美子 (茨城大学全学教育機構 教授)  
池 田 庸 子 (茨城大学全学教育機構 教授)  
石 鍋 浩 (東大阪大学短期大学部介護福祉学科 教授)  
松 田 勇 一 (宇都宮共和大学シティライフ学部 准教授)  
瀬 尾 匡 輝 (茨城大学全学教育機構 講師)  
瀬 尾 悠希子 (獨協大学国際教養学部 特任講師)  
高 柳 有 希 (仁済大学国際語文学部日語日文専攻 講義専担教授)

#### 編集責任者

青 木 香代子 茨城大学全学教育機構 講師

茨城大学全学教育機構論集

グローバル教育研究

第2号

2019年2月発行

発行者 茨城大学全学教育機構

〒310-8512 水戸市文京2-1-1

TEL (029) 228-8593 FAX (029) 228-8594

# Journal of Global Education

## Vol. 2

---

### Contents

---

#### Articles:

AN Yong Su; An analytical study of intercultural understanding of exchange students from South Korea living in Japan .....	1
AOKI Kayoko & AN Yong Su; An analytical study on perceptions of short-term international students from China about studying abroad in Japan .....	13
HACHIWAKA Sumiko; Life story interview of former international students who live in Japan with their families: How they evaluate their study abroad experience .....	29
IKEDA Yoko; Life story interview of former exchange students: How they became English teachers in Japan .....	47
ISHINABE Hiroshi & AN Yong Su; How do the international students from South-East Asian countries understand Japan through the Japanese subculture? .....	59
MATSUDA Yuichi & AN Yong Su; Perceptions of Japan by Chinese students in the country as seen in Japanese subculture .....	73
SEO Masaki & SEO Yukiko; Difficulties and possibilities of sharing teaching practices with video: A case of project work in an intermediate Japanese language class .....	87
TAKAYANAGI Yuki & AN Yong Su; Changes in Japanese students' attitude toward study in Korea .....	91
AOKI Kayoko; Possibilities of social justice education in the United States: Through critical analysis of multicultural education .....	103
<b>Information for Contributors</b> .....	117

---

Institute for Liberal Arts Education  
Ibaraki University

February, 2019